

日本移民五十周年記念

かさと丸



1958年6月18日

日本移民五十年祭委員會發行

「か
さ
と
丸」

『笠戸丸』目次

◇表紙……………	玉木 勇治	
「笠戸丸」發刊について……………	山本喜譽司	5
笠戸丸と日本海海戦		7
笠戸丸の身許調べ……………	古野 菊生	21
“笠戸丸以前”賛否両論沸く		
―第一回移民の道が開けるまで―		25
笠戸丸ブラジルへ		41
笠戸丸航海日記		47
悲しき戀も乗せて……………	鈴木貞次郎	88
―笠戸丸サントスに着く―		104
憧れのブラジルに第一歩・		
當つた五十年前の“豫言”		
―日本移民ベタほめの伯字紙―		107
希望に胸ふくらませて		
―コーヒー耕地へ移民出發―		116
各新地配耕縣別家族数および人員、通譯名		118
船中の殺人事件		125
配耕地別移民氏名		130
笠戸丸第一回移民名簿		162

日本の花火にビックリ	207
―ブラジル開港百年記念博飾る―	
“移民争議”各耕地で起る	209
耕地から移民の逃亡相つぐ	219
“四世の系圖”國際結婚組と純日系	223
第一回移民の變り種	
好漢「イツパチ」の生涯	229
鉄道工夫として麻州へ	250
―或る第一回移民がたどつた道―	
笠戸丸第一回移民生存者	268
笠戸丸の戸籍	
ブラジルの土を踏んだ最初の日本人四名	
笠戸丸二船員の脱走	85
笠戸丸船員のその後	
“生れる移民史”鈴木貞次郎氏の横顔	102
各縣人別家族数 および人員（男女別）	
移民周旋屋が大散財	
第一回移民のアルバイト	
各縣人別代表者	
通譯五人男の横顔	
通譯にならぬ通譯	
聖市の邦人“埋葬弟一号”	
“移民の父”上塚周平	245

投身自殺した隈部三郎氏

248

大武和三郎氏と辭書

259

ブラジル移民の創始者"水野龍氏"

261

當時の"民間領事館"

266

アルゼンチンに渡った笠戸丸第一次移民

267

皇國殖民會社の解散

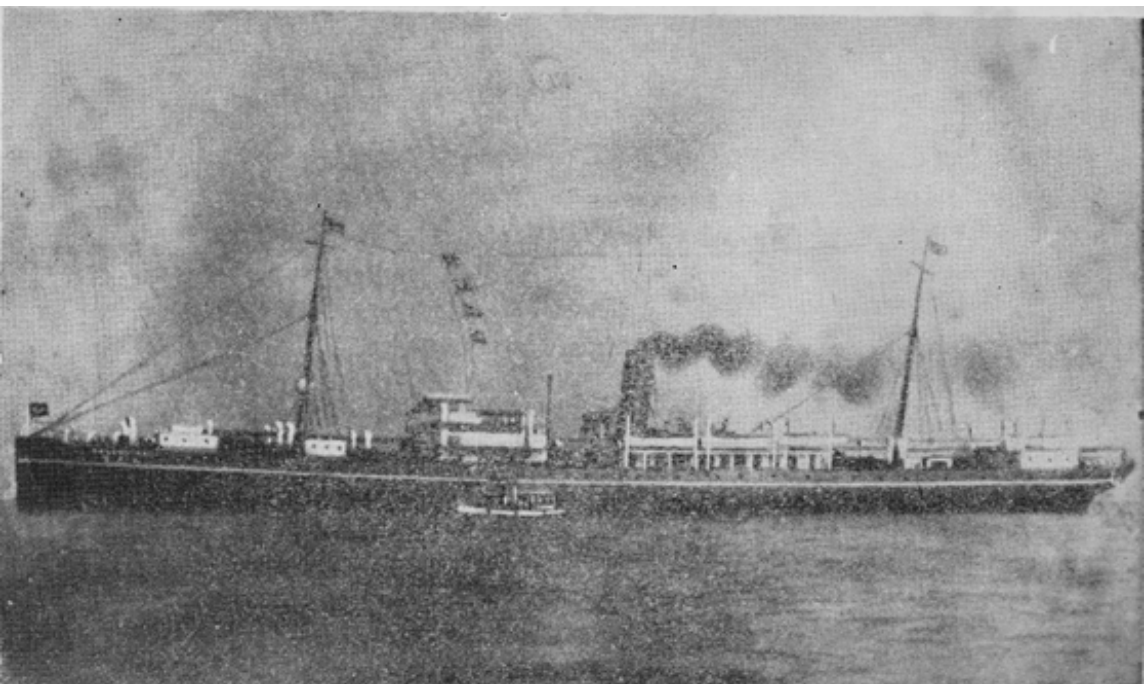
343

あとがき

345

(注・目次の順序が前後している箇所があります)

第一次移民を運んだ笠戸丸



“笠戸丸”發刊について

日本移民五十年祭委員会

会長 山 本 喜 譽 司



ブラジルへの日本人移住五十周年記念日として、第一回移民船笠戸丸のサントス入港の日をもつてしたことは、誠に當を得た挙であつたと思う。

よつて、まだ笠戸丸組の多くの生存者がある今日において、笠戸丸を圍む色々な資料を蒐集編纂して後世に残すことは、日本移民五十年祭記念出版として、極めて興味あり且つ有益であると信じて、サンパウロ新聞社にその上梓を委嘱して出来上つた冊子がこれである。

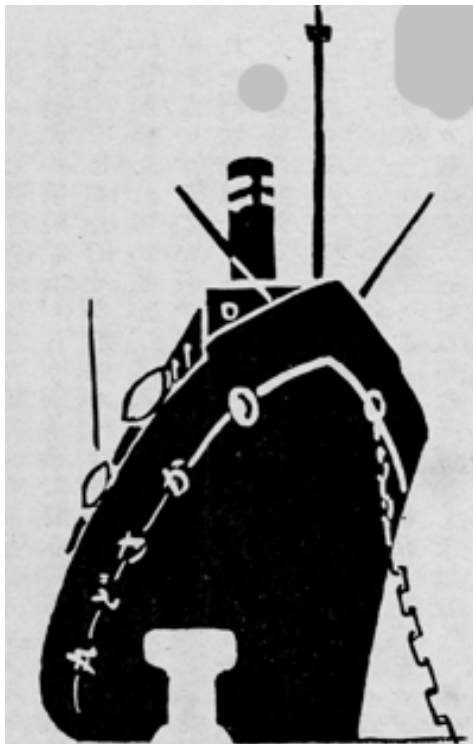
本書の読者は、笠戸丸に乗った先駆者達が各人各様の希望に燃えつつサントスに上陸、やがて開拓者の苦難に充ちた茨の路が待ち受けていた事を知られるであろう。然し誰が当時において、今日見るが如き日系コロニアの繁栄を豫見し得たものがあつたであろうか。

感慨無量と申さねばならぬ。

笠戸丸についての史観は後世の賢者に任せて、ここには

ひたすら素材の集積にとめたのみである。

一九五八年六月一日



笠戸丸と日本海海戦

笠戸丸の前身はロシアのバルチック艦隊の病院船アリョー
ル号だった。そして、このアリョー
ル号の不注意が日本海
海戦に日本海軍大勝の糸口となつたのだ。



第一回移民を運んできた笠戸丸の前身はロシアのバルチック艦隊所属の病院船で、日本海海賊で日本海軍のため捕獲されたものであった。その船名が「カザリン號」とか「カザン號」とかいわれているが、これは「アリヨール号」が本当であるらしい。このバルチック艦隊に所属し日本海海戦で捕獲された病院船は「アリヨール」と「カストローマ」の二隻だった。当時の記録からその間の消息をうかがってみよう。

バルチック艦隊の大遠征

歴史に「ロジエストウエンスキー航海」と名をとどめるバルチック艦隊の大遠征は単なる威かくではなくして、海戦史未曾有の出来事として實行された。戦艦七隻・童巡四隻、駆逐艦九隻・特務艦六隻から成る大艦隊は、一九〇四年十月十五日、雪積るリバウ軍港の丘を後にして極東遠征の途についた。バルチック艦隊の到着前に乃木が旅順を陥れるか、旅順の陥る前に艦隊が極東に達するか、世紀の大競争が始まったのである。航程一万八千海里、その間に一カ所の根據地も持たないロシアが、平時なら問題はないが、戦時国際法の嚴重に実践される環境のもとで、かかる大艦隊を極東に送るのがいかに難事業であるかは、今日から考えても十分に理解される。しかし、氣宇の大きい民族と、

ニコライ皇帝の日本ちよう罰戦意とは、それを当然の作戦として決行したのであつた

当時ロシアは日本に負けようなどとは夢にも思つていなかった。単に、日本にお辞儀をさせるのに半歳かかるか、一年かかるか、という計算の問題でしかなかった。単に、もつとも陸相サカロフ大将は、二年もすれば小日本は自壊するだろうと、日本にとって戦慄すべき戦略構想を語つたことはあるが、自國の勝利について寸毫の疑いも持つ者はなかつた。戦つてみると、日本が生意気な戦鬪をやる。特に四月十三日に海軍の第一人者マカロフを旅順港外での戦鬪で旗艦「ペトロ・パウロスク」と共に失つて皇帝は激怒した。速かに本國の艦隊を急派し、日本艦隊を撃滅して、その陸軍を満州に孤立させ全滅させてやろうと考え、四月三十日に、バルチック艦隊の遠征を決定し、五月二十日に、それを天下に公表させたのである。公表には七月に出発とあつた。それは建造中の新鋭戦艦四隻中の四番艦「アリョール」號（病院船と同名）が、六月末に完成するのを待つ意味であつた。そのとき旅順には六隻の戦艦が健在であつた。それに新鋭四隻と、「三笠」級の一艦「オスラビア」を加えると合計十一隻である。日本は四隻しかない。戦術に少々のお劣があつたところで、十一對四の戦鬪では負けようにも負けられまい。バルチック艦隊が朝鮮海峡に達するの日をもつて、日露戦は終局を告げるであらう。

その算術は必ずしも狸の皮算用ではなかった。だから日本の朝野は、艦隊回航のニュースを聞いた日から神経を痛めた特に十月十五日、その出発を知った以後の我が新聞には、約半歳にわたって、バルチック艦隊に関する記事の載らない日はなかった。特に一月二日に旅順陥落の喜びを伝え、戦争新年を祝い納めた後は、繁くバルチック艦隊の消息を傳えている。

いかに早く敵を発見するかが第一の問題である。そのとき来るべき海上決戦に動員された艦船は実に百二十五隻の多きに達した。それはもとより空前であるが、同時に絶後に近かった。英國が最盛時にジュットランド海峡に集めた百五十隻と、米國がマリアナ沖海戦に全力を集結した百五十隻の二つだけが、それを凌いだに過ぎない。明沼三十八年の世界では想像を超越した集中であつた。決戦の主体は第一戦隊六隻第二戦隊六隻、第三第四おのおの四隻、驅逐隊二十一隻、水雷艇十一隻の合計五十二隻であつて他の七十三隻が敵艦発見のパトロールに使用された。

濟州島から佐世保を一線として南方に正方形を描き、それを碁盤の目のように区劃して数十区に分ち、その幾区ずつかを、七十余隻の艦船に擔當させて見張つた。四十隻近い艦船で編成された敵の艦隊は、二列縦陣で航行するとしても長さは一海里半に達し、どこかで日本の分擔パトロール区域の一劃を横切るであろう。

既に哨戒海面の区劃は五月十九日に決定され、小倉少将の特務艦隊二十四隻の仮装巡洋艦は、二十一日から部署についていたが、さらに碁盤の目は細かく刻まれ、そこへ第三艦隊の各艇を投入した巡邏の密度を二倍にしたのである。巡洋艦「和泉」が二十七日午前六時五十五分・五島・宇久島の北西二十四海里の地點から敵と接觸を保ち得たのは正にパトロール強化の結果であり、同艦は二十五日同方面哨區に増配されて出動したものである。興味深い史実は「和泉」が出動に際して、「密封命令」を渡されていたことだ。開封日である二十七日に開いてみたら、「二十八日に至るも敵が対馬海峡方面に出現せざる場合には、津軽海峡に單獨急航せよ」とあつた。これによつてみれば、二十八日中に敵が五島西南及び済州島南方の海上に現われない場合は、東郷は津軽方面に海戦を豫定したものであろう。

信濃丸の敵艦隊発見

そのときバルチック艦隊はどうしていたか。大決戦を明日にひかえた五月二十六日の正午、ロジエストウエンスキー提督はにわかに艦隊速力を五ノットに減じて戦闘訓練を三回も繰返した。兵員は長官の精神に異状なきやを疑つた。が、長官には確固とした計算があつたのだ。彼は東郷の作戦計画を第一回戦に水雷夜襲で来ると豫想した。先ず

魚雷で我れを傷つけ、翌朝から主力砲戦、その夜が水雷戦というふうには東郷の逆を考えていた。それ故に海戦を豫想する沖ノ島付近を午後二時から三時頃に通過し、砲戦を交えた後、夜暗ウラジオへ急航する作戦を立てた。そうするためには、時間が余り早過ぎて普通の航行速度で行くと夜間に対馬水道入口邊で水雷夜襲を蒙ることとなる。そこで速力を激減し、時間繋ぎに演習をやったという次第だ。だから、東郷にしてみれば、もう現われなければならぬ時間なのに一向に現われる様子もなく、一部の将兵は焦慮に駆られ再び津軽説や能登半島論が擡頭する始末であつた。

今ごろ演習をやっているなぞとは想像もつかないばかりか、前日には「アドミラル・セニヤーウイン」の機関故障のために数時間も五ノット航行を余儀なくされ、さらにネボガトフ艦隊の合同後は速力の遅い艦があつたため速力を制限され十ノット以上の艦隊航進は不可能であつたのだから東郷が豫期した日より二日も遅く対馬海峡に現われたわけである。

二十六日の太陽が沈む頃から霧が下りてきた。ロジエストウエンスキーは何カ月ぶりでか初めて微笑と歓声をもらった。

いままで晴雨計の下がるのを見つめていた瘦躯の提督の考えでは濃霧致れば艦隊はこの自然の天煙幕に隠れて対馬

海峡を無事に突破し得るからである。

濃霧のみが艦隊を救う最大の恵みであるその濃霧が、二十六日の夜の海を包んだ。大願成就口提督は艦隊に「全速力航行」を命じ、晴雨計を睨みながら北進した。ところが、願い事に古来十全はない。その濃霧は夜半になって甚だしく度を加えこんどは航行の方が危険になってしまった。昭和十七年六月ミッドウエーの海戦で日本艦隊はここで禁断の無線を打ってしまったが、バルチック艦隊は嚴に自制し、碇泊用燈火のみを點じて辛じて航進した。その間日本艦船の無電交換が頻々として傍受され、艦隊は既に日本の哨戒区内に入っていることを知ったからだ。

ところが、艦隊の最後方に占位していた病院船「アリヨール」號（註Ⅱ日本海軍に捕獲され笠戸丸と名を改められブラジル第一回移民を運んだ）は、不謹慎にも燈火を點じたまま平気で航進していた（他の一隻「カストローマ号」は消燈）。

これほどの濃霧では敵に見つかるはずはないと思ったらしい。その油断不謹慎の燈火を、パトロール中の仮装巡洋艦「信濃丸」が発見したのである。二十七日午前二時四十五分。いまにして言えば第一回移民を運んだ笠戸丸（前身ロシアの病院船「アリヨール」號）は日本海海戦の大勝利の糸口をつくったものだといえる。

この燈火を怪しいとみた「信濃丸」の艦長成川大佐は接

近したが、霧が深くて國籍を確めることが出来ない。かな月光が時々東方から覗いて視認を妨げた。そこで成川大佐は怪汽船を、月と自艦の間に挟むように回轉航進して漸く彼の正左舷に接近した。凝視すると、三シヨウ二本エントツでロシア仮装巡洋艦「ズニエプル」型に似ていることを確めた。

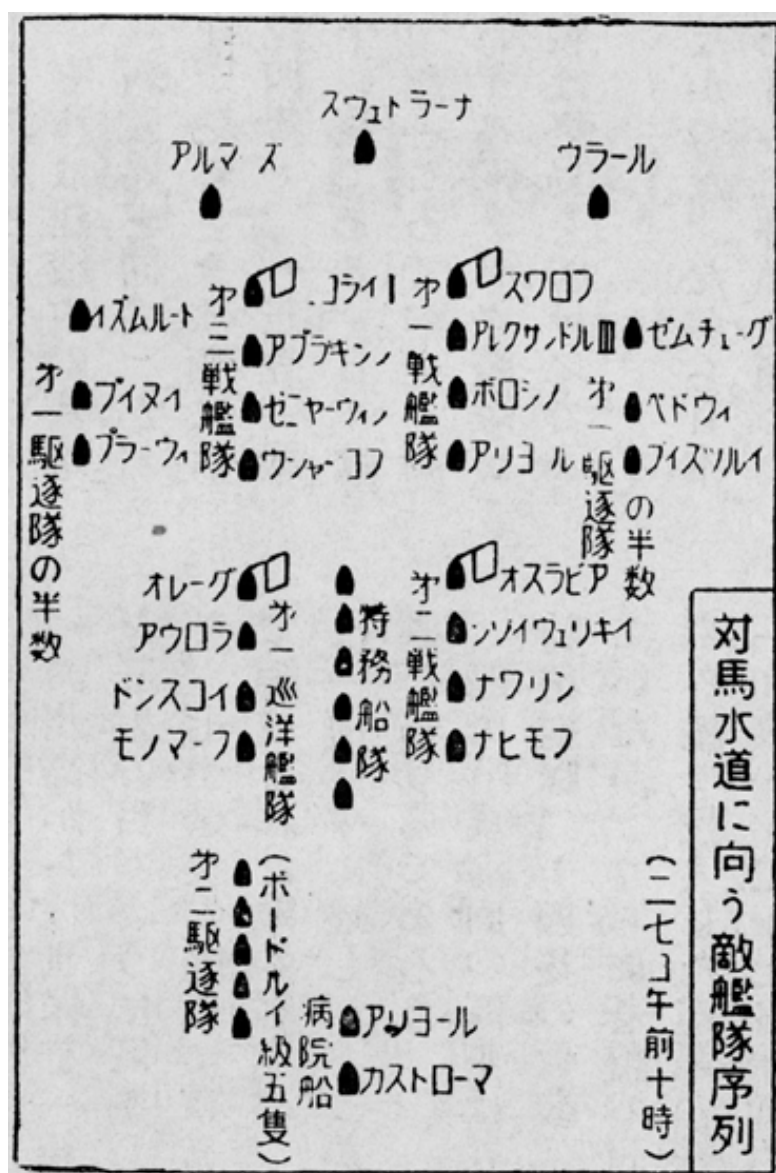
「信濃丸」は正体を確認しようとさらに接近してみると、該船は一門も大砲を備えていないので、バルチック艦隊中の病院船と察しられ、然らば近傍に艦隊がいるはずだと、全員が視聴力を百パーセント動員して凝視したが、濃霧の煙幕は遂に何物をも見せない。そこで成川大佐は該船を臨検しようと近づくと、盛んに燈火信號を点滅して何ものかに呼びかけていることが判明した。近くに敵艦のいるのはもはや疑いない。よつて少しく北東方に転針して捜査を続けようとした一瞬、驚くべし十余隻の軍艦が左舷僅か千メートルの近距離を航行しつつあり、さらに右方に数條の煤煙が尾を曳いているのを認め「信濃丸」が實にバルナツク艦隊の眞ツ直中にあるのを知った。成川大佐は呼吸を止めて一気に舵を取ると同時に直ちに無電を發した。「敵の艦隊二〇三地區」に見ゆと。時に二十七日午前四時四十五分。二〇三高地からは敵の旅順艦隊は撃滅された。この二〇三海區からはバルチック艦隊撃滅の糸が引かれたのであった。「信濃丸」は必死に接触を保持し四時五十分「敵航路東北

東、対馬東水道に向うものの如し」と打電し、一旦は濃霧中に見失ったが、六時五十分再び発見し、「敵針路不動、対馬東水道を指す」と無電を反覆し、僚艦からの返電を確認して哨戒発見の功を全うしたのであった。触接は近傍にあった「和泉」に引継がれた。「和泉」は六時五十五分に敵を発見、刻々敵の陣形を報告しながら午後一時半まで執ように食いついて離れなかった。これより先、片岡第三艦隊長官は「信濃丸」の無電を東郷長官に転電（五時五分着）すると同時に全艦船に出動させ、午前十時には五十余隻が四方からバルチック艦隊を遠巻きに包んでしまった。

この一戦のZ旗翻る

午前七時、口提督は日本艦隊の無電記號を受取り、それが五時前後からの符號と全然異なり、類似単調のものから急変して複雑多岐のものに転じているのを知り、傍らのイグナチウス艦長を顧みて「遂に我々も見付けられたネ」と語り、然らば海戦は午後二時前後に沖ノ島の西方にむいて戦われるものと見当をつけた。一方に東郷提督は五時五分に敵の出現を知り、その方向と速力から算出して会戦の地点を沖ノ島の西方に予定した。両将が予定した決戦海面は僅か七海里しか違っていなかった。祖国の存亡を賭ける戦場について両主将の想定と決意とがほぼ一致していたのは

午後一時五十五分、東郷はバルチック艦隊の全容を一万二千メートルの南方に視認した。五カ月待ちに待った敵に會つて旗艦「三笠」のシヨウ上高くいわゆるZ信号「皇國の興廢この一戦にあり各員一層奮勵努力せよ」の有名な信号が掲げられた。



この日本海海戦はわれわれが知るように日本の大勝利に
終つたが、さて大戦果を一括してみよう。五月二十七日の
午後一時五十分、バルチック艦隊の三十八隻が対馬水道を
通つて現われた。戦艦八、巡洋艦一〇、海防艦三、駆逐艦
九、特務艦六、病院船二であつた。それが二十八日夕刻ま

での戦闘で

▽撃沈 戦艦六、巡洋艦五、海防艦一、駆逐艦四、特務艦
三

▽捕獲 戦艦二、海防艦二、駆逐艦一、病院船二。

▽脱送中喪失 巡洋艦一、駆逐艦一。

即ち合計二十六隻を平定され、残ったのは巡洋艦四、駆逐艦三、特務艦三の十隻となってしまうた、ところが、そのうち巡洋艦三隻はウラジオ行を断念してマニラ湾にたどりついて武装を解除され、駆逐艦一隻と特務艦二隻は上海に遁入して同じ運命となった。これを総合すると、東郷艦隊の手から免がれたのは、僅かに仮装巡洋艦「アルスーズ」、運送船「アナズイリ」駆逐艦「グロースヌイ」及び「ブラーウイ」の四隻のみである。

（「大海軍を想う」による）

笠戸丸の前身はロシアの病院船

ロシアの病院船「アリヨール」を捕獲した仮装巡洋艦「佐渡丸」の当時の分隊長がサンパウロにいた。

不注意にも燈火をつけていたため哨艦「信濃丸」に発見されたバルチック艦隊の病院船「アリヨール」号は、他の僚船「カストローマ」号とともに日本海軍に捕獲されたが、

この「アリョール號」を捕獲した仮装巡洋艦「佐渡丸」に分隊長として乗組んでいた福田一郎氏（元海軍少将、現在サンパウロ市在住）は当時の思い出話を次のように述べている。

「朝鮮南岸の鎮海湾に集結して意気頗る軒昂、腕をさすって敵の来るを今や遅しと待ち構えていた我が連合艦隊の将兵は明治三十八年五月二十七日の早朝、哨艦信濃丸の發した「敵艦見ゆ」との警報に接し、東郷司令長官指揮の下に勇躍して直ちに出勤、これを撃滅せんとて戦場にはせ向い、午後になつて広古の大海戦が繰り広げられたのである。

余は前年の五月水雷長として乗っていた通報艦宮古が、大連湾近くで機雷にかかつて沈没し、その後ずうつと内地に帰っていたから未だ一度も海戦に参加した経験がない。それで煙霞立ちこめる遙か彼方に、黄色塗つた敵艦隊の煙突の上部を幽かにこの眼で見ることの出来た時は、実に血湧き肉躍るの慨に堪えなかった。だが仮装巡洋艦たる身の悲しさ勿論戦列に加わることを得ず、ただ遠方から高見の見物とシヤレこむだけで、艦橋に立ちながら双眼鏡を通して如何なる結果になるものかと、手に汗を握って内心竊かに心配していた。

暫らくたつて旗艦から敵艦隊に随伴する病院船を始末せよと命ぜられたので佐渡丸は惜しくも現場を去らねばならなくなった。ややあつて船体を白色に塗り舷側に沿うて横

に赤筋を画いたものと青筋と画いた二隻の病院船が北上して来るのを認めた。

そこで手近の赤十字の識別を施した大型の船に近づき、先ず「停止せよ」との万国信号旗をショウ上高く掲げ、汽笛を連吹して注意を促したが、知らぬ顔して航行を続ける。次に空砲を放つて見ても更に意に介しない模様。依て今度は実弾を敵船近くに打込み水柱を高く上げたので、漸く停止した。

時しも風波なお荒いため続航を命じて封馬東岸の三浦湾に入港、佐渡丸近くに投錨せしめた。余は臨検士官を命ぜられたので、直ちに杉本幸雄少尉以下士官兵数名を連れてカッターに乗って病院船に赴き、船長に導かれて應接室に入った。ところが船長は英語を解しないといつて婦長らしい三十才前後の婦人が代つて應對した。後に聞けば艦隊司令官の姪とか。

しかし眞偽は判らない。至極流暢な英語をあやつるのに反しこちらは最も不得手の会話と来ているので、彼我處を換えて却つて自分が訊問されるようなぶざまな恰好になつてしまった。まだ席が定まらない前に、彼女は先手を打つて口を開き、何の権利があつて病院船に停止を命じたか、何故に病院船に向つて大砲を打ったか、海戦が始まつたさ中に最も大切な病院船をいつまでも抑留するのは何事か、などと雄辯とうとう立板に水を流すが如きその語氣の鋭さ、

威丈け高になつてたたまかけて詰め寄る態度の傲慢さ、癪にさわつて仕方がない。これに封してこちらは覚束ない英語で考え考え一々釈明するといったみじめさ、気がいら立つにつれ、情が激すれば激するほど、いよいよ言葉は意の如く口に出て来ない。じれつたいやらくやしいやら、三十才にまだ間のある血の氣の多いうら若い大尉は、たまりかねて何を申すとはり飛ばしてやりたく拳を握つたこと幾度か、英語の下手なのがつくづく身にしみて情なく思われ、顧みて慚愧に堪えない。

でもやつと納得したらしかつたので余は初めて船舶書類の提出を命じ、正しく赤十字社の病院船アリヨール号であることを知つた。その他書類の形式は全部整っているから、今度は船内の搜索に取りかかった。

病院船に上る前から、前甲板にうず高く帆布に覆われた大きな代物は或は潜水艦ではないかと疑っていたから、早速取調べて見たところ、何でもないのに聊か当が外ずれてがっかりした。それから公私室は勿論倉庫や船艙の隅々まで丹念に捜して見たが何一つ怪しいと思わるゝものがないので一と先ずこの旨を艦長に手旗信号で報告すると、なお嚴重に搜索して見よとの返事。

この返事が届くか届かないうちに杉本少尉が飛んで来て、英国商船の船長以下四名が船艙に監禁されていることを告げた。聞いて見ると、石油を四日市に運搬中数日前台湾沖

でロシア船隊に撃沈されたのだということが判った。これは疑いもなく病院船として許し難き軍事行動であるから、艦長の名を以って捕獲を宣告し、翌日我が監視員の下に佐世保に廻航せしめた。後日同地捕獲審検所の審判で適法と認められ没収された次第である。他の病院船はカストロマ号といい、仮装巡洋艦満州丸が同じく三浦湾に引致して佐世保に廻されたがその後の事は聞いていない。

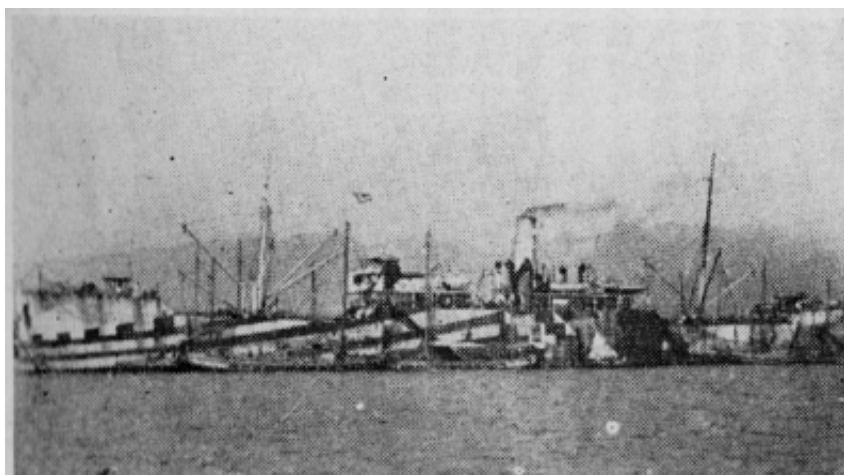
（「パウリスタ新聞」より抜すい）

笠戸丸の身許調べ

|| || ロシア海軍中佐の書いた本から || ||

古 野 菊 生

五十年昔、はじめて日本移民をブラジルに運んだ船が、笠戸丸だったということは、私たち誰もが知っています。けれども、この笠戸丸が、もともと日本海海戦で日本に分捕られたロシア艦隊の病院船だったということは余り知られていませんでした。邦字新聞に、当時の仮装巡洋艦「佐戸丸」の分隊長で、この病院船を分捕った人の話が出ていました。笠戸丸が、ロシアの太平洋第二艦隊の病院船だっ



たことを、私は前に、何かの本で読んで知っていました。その病院船の名は、カタリーヌ号である、と、ハッキリ書いてありましたが、実際にその病院船を捕獲した人の話では、アリヨール号だということですから。もちろん。このアリヨール号の方が、正しいでしょう。

ずいぶん前のことですが、サンパウロのブラジル人の本屋で私は一冊の本を掘り出しました。この本屋は、本を一冊いくらではなしに、キロ売りするという、ヘンちくりん

な店ですが私の掘り出した本は、そのキロいくらよりは少しましの二クルゼイロ均一の古本の山の中にありました。その本は、一九〇五年といえますから、つまり明治三十八年に当りますが、その年にフランスで出版されたものでした。例のロシアの太平洋第二艦隊が本國ロシアの港を出て間もなくのちに出版されたものです。著者は艦隊乗組のロシア海軍中佐です、(Capitaine de Frégate N. L. Klado) 日本語に訳して「日露戦争におけるロシア海軍」(“La Marine Russe Dans La Guerre Russo-Japonaise”)というのが本の標題です。

当時、ロシアの海軍力が日本の海軍力に、はるかに劣っていたことを自分で知っていましたか、この本の著者は、まるで、日本海軍にメチャメチャにやられるのを前もって知っていたみたいです。読んでいてどうにもこうにも気の滅入る文章です。実力がロクにありもしないのにカラ元気を出して大ハリキリなのも変ですが、今から戦争に乗り出すというのに、あんなに意気しよう沈していたのでは、勝てる戦にも勝てなかったでしょう。

で、まあ、それはそれとしまして、カンジンなのは、のちに我が親愛なる笠戸丸となった病院船のことです。その病院船アリヨール號というのが、この私の掘り出した本の中にやはり見つかったのです。もつとも、名前がロシア語

で書いてあるわけではありませんので・私の本の中の名はオレールというふうに書いてあります。その艦隊にはこのほかに病院船もなかったようですから、このオレール號とというのが、ロシア語のアリヨール號に当るのだと思います。ところで、この本に書いてあることに間違いないとしますと、この船は一九〇四年十一月、つまり、東洋へ向う途中で、ロシアのクロンスタットという軍港で、原因不明の沈没をしたことになっています。もつとも、すっかり沈んでしまったのではどうにもならなかったでしょうから沈みかけた、というのが真相でしょうとにかく、そのため、船の機關部に海水が侵入し、機械の一部がダメになってしまったらしいのです。丁度、当時建造中の「スラヴァ號」という巡洋艦に据えつけてあるのをとりはずして来て、アリヨール号のダメになった機械ととり代えました。そのため第二艦隊に属して東洋に向うことになっていました新巡洋艦「スラヴァ」号は、そのままクロンスタット軍港にとどまらざるを得ないことになりました。

もし、この軍港で「アリヨール」號が沈没してしまっていましたらわが笠戸丸は、五十年前に、わたしたちの先輩に当る人たちを乗せて、ブラジルに渡ることが出来なかったわけです。そして新巡洋艦「スラヴァ」號は、あるいは対馬海峡の海底のモクズと消え去っていたかも知れません。

笠戸丸の戸籍

一九二二―二三年のロイド・レジスターブックによると笠戸丸の前身は△舊名KAZAN△船級LOYD△トン数六・〇二三トン、△進水一九〇〇年△造船所Wingham R ichardson & CO (Ld) - Newcastle Englandとなっている。(大阪商船調べ)

日露戦役当時バルチック艦隊所属の病院船であったものを日本海海戦で日本海軍が分捕ったもの。その後海軍省から東洋汽船会社が委託運航（船長英国人）を受け、これをさらに皇國植民会社が傭船して第一回ブラジル移民輸送を行った。

明治四十五年三月三十一日

大阪商船が笠戸丸を購入、南米航路第一回航海に就航させたが、その時は移民を乗せていなかった。その後近海航路に就航させるためこれをさらに改装した。

第一回移民をブラジルに運んだ当時の笠戸丸の主な乗組員は次の通り。

船長 A・G・ステーブソン（英国人）

一等航海士 村尾 武

機関長 飯島 巽

事務長 布施謙蔵

船醫 草間 某

通訳 金沢一郎

(東京外國語学校教師)

火夫長 横山清蔵

(死亡、サントス市墓地 Ⅱ番號五十號Ⅱに埋葬)

Ⅱ 笠戸丸以前 賛否両論沸く

第一回移民の道が開けるまで

日本人のブラジル移住の第一ページは、いまから五十年前――一九〇八年（明治四十一年）六月十八日サントス港に着いた笠戸丸で皇國殖民合資会社取扱いのサンパウロ州政府との契約による移民一六七家族七八一名の第一回移民によつて開かれた。しかし日本移民五十年の歴史には、いわゆるⅡ笠戸丸以前Ⅱの準備時代があつた。

最初の視察者

ブラジルのことが日本に紹介されたのは一八九三年（明治二十六年）メキシコ、ペルーを視察した根本正代議士（榎

本武揚の植民協会の中堅人物として活躍）がその翌年日本外務省からブラジル視察に派遣され、一八九四年九月十五日に首都リオ・デ・ジャネイロに着いた。笠戸丸第一回移民より十年あまりも前の話で当時のブラジルはプルデンテ・モラエス大統領の時代であった。根本代議士は同年十月二十六日まで四十二日間にわたりペルナンブーコ、バイア、ミナス・ゼライスおよびサンパウロ各州を視察して歸朝後ブラジルが日本人の移植民地として有望であるという報告書を外務省に提出している。また根本代議士が殖民協会へ送った手紙の中で次のように書いている

日本移民に適する地はペルナンブーコの南部に有之、特にサン・パウロ、ミナスは最も宜しくと存候。土地肥沃にして到る處樹木高く生い茂り、小生が曾て墨國ソコヌスコ地方にて目撃したると同様に御座候。又サン・パウロ市とサントス港の間には交通の便利充分に具わり居候。ナツシメント氏の紹介に依りサン・パウロ州知事に面会仕候處知事は懇切に待遇せられ、小生サン・トス港に出港の節は、特に別仕立の馬車用意被致呉候。サン・パウロ市よりサントス港に到る道路は仲々立派なるものにて、高度は大抵二千百呎に有之随つて氣候も温和に御座候。寒暖器は途中馬車の内華氏八十度、サントス港にて八十五度を示し候。着後移民取扱所一覽仕候。来住の移民上陸の節は、先ず此処に宿し候手順にて、百般の便宜備わらざるなく、移民に

対する取扱方法完全致居候には一驚を喫し候。昨今欧州特に伊太利より来航するものは陸続踵を接し、毎週数百人及び候。

小生もサン・パウロ取扱所にて一度目撃仕儀（中略）ブラジルは米國と同じく大平原を有し、土地は概して肥沃に御座候。就中ミナス、サン・パウロ、リオ・グランデ・ド・スール、サンタ・カクリーナの諸州最も豊饒の地方に御座候。ミナス、サン・パウロ州、最も温和に有之、午前七時小生書翰認め居候室内にて寒暖器正に七十五度を示し、候天候も桑港又はメキシコ府の如く、至って長閑に御座候。

日本移民事業に取り最も望みあるは、サンパウロ州に有之、縦横にび漫せる幾多の大平原は以て無数の市街を建設し、永住の地となすに足るべく、生計の程度を高め。

財富を増殖し、子女に充分の教養を施し、何不足なく愉快に生活するを得べく、彼我両國の利益不遇之と存候。唯必要なるは勤勉不倦の職工及忍耐力に富みたる労働者に御座候。何卒日本移民移殖の儀御尽力有之御希望致し候。

あに日本の為め而已ならず、実に人類を救うの美事に有之と存候。

当時としては実によく視察し、卓見を示しているものだといえよう。しかし当時は日伯通商條約締結前であつたことと、日本移民の流れが北米へと向つていた時代なので、根

本代議士のこの報普書はあまり注目を引かなかった。

こんな状態であったため、一八九四年サンパウロ州のブラード・ジヨルダン会社代表チャールス・アレキサンダー・カーライル氏が日本に渡って吉佐移民会社と日本移民輸送契約を結んだが、実現に至らなかった。

目伯修好通商航海

條約締結さる

前に述べた日伯修好通商航海條約は、一八八〇年にブラジルが清國と修好通商條約を締結した折、日伯間でもこの話があつたが立消えとなり、それから二年後、駐支ブラジル公使カラド氏が訪日の際に再び交渉を日本外務省が提案したが、ブラジル側は氣乗薄で、これまたお流れとなった。その後日清戦役も終り十三年後に一八九五年（明治二十八年）十一月五日に日伯兩國間の修好通商航海條約が、フランスのパリで調印された。

この時の日本側全權は駐佛会根荒助公使でありブラジル全權は駐佛ガブリエル・デ・トレード・イ・アルメイダ公使であつた。

一八九七年二月十二日にパリで同條約の批准書が交換され發効した。

かくして一八九七年（明治三十年）八月二十三日に、駐伯

初代日本辨理公使として珍田捨己氏が総領事を兼ねて赴仕した。

立消えた移民契約

この條約が締結される前の一八九五年（明治二十八年）八月二十一日パラ州土地局と東洋移民貿易会社代表者ジュリオ・ビナビデス氏との間に日本移民三千名、誘入契約が締結されたことが、翌年の州知事の教書中にも述べてあったが、條約締結前のことでもあり、その上に珍田公使着任後外務省宛に「アマゾン方面に本邦人の移住は適さない」という意見が出されたので、結局このパラ州日本移民三千名契約は外務省の不許可で実現せずに立消えとなった。一八九七年になって吉佐移民会社と東洋移民会社の代表である青木忠橘氏がブラジルを訪れた。移民会社の代表が訪伯したのはこれが初めてである。

直ちにサンパウロ州のプラド・ジヨルドン商会と單獨農業労働移民二千名の契約をし、これを契機に吉佐移民会社が設立された。契約は主としてコーヒー園労働で、期限は五カ年、賃金は一カ月三十シリング（当時約十五円）労働時間は十時間、衣食住は雇主持ち、日本式風呂も準備するというのであった。かくして船も郵船会社の土佐丸を傭船し八月十五日いよいよ神戸港を出帆するという間際になっ

た出発の四日前、プランド・ジョルドン商会から「コーヒー暴落のため約束の移民を引受けられない。出航中止されたし」という電報が舞い込み、神戸埠頭に乗船待機中の移民は出発を中止せざるを得なくなった。この損害は二十九万九百七十余円といわれ、移民会社では損害賠償の手続きを珍田公使に要請したが、結局望みなく泣き寝入りとなってしまった

その当時の聖州のコーヒー暴落は事実で、コーヒー値は前年の半値にならぬ下落ぶりであった。イタリア移民なども毎年五万人近くも入っていたものがコーヒー暴落の翌年の入伯数は二万人足らずに減ったくらいであった。

その上にプルデンテ・デ・モライス大統領の任期があと一年で終るという年で、バイヤ州にはジャグンソン族土人の反乱事件が起り鎮壓のため出動した人員の死傷は六千といわれ、その費用も莫大な額に上り、伯國政府の財政困難のため従ってサンパウロ州政府の負擔も大きく影響した多難な年であった

このようにして切角芽生えかけた日伯移民関係もまたまた一頓座してしまった。

日伯双方の反対論

一八九七年赴任した初代駐伯公使の珍田捨巳氏は翌年六

月二日病弱の理由で帰朝したが、この健康を害したためにブラジルに嫌気がしたのか、彼が在任中報告した対伯移民事情報告は日本移民誘人に有利なものではなく”日本人の移住適地にあらず”といった悲観的なものであった

一八九九年七月に二代目公使大越成徳氏が任命され赴任したが、同公使のサンパウロ州コーヒー耕地の視察報告書も日本移民に不相当とし「移民会社が行っているブラジル宣傳は極力警戒すべし」という注告をなし、外務省は、当時リオの移民勧誘員マルシャル・サンツなる者が日本でブラジル移民宣傳をしていたのに対し左のかうな警戒書を各府県知事宛に發し移民旅券不許可を命令していた。

「近頃伯國移民募集のため同国から渡来し、各地移民会社に募集方申入れ居り候もの有之候由に聞及候処、当省に於ては目下の処同國移民は渡航許可せざる方針につき貴県へ認可出願候者有之候はば認可相成らざるよう致したし」この外務省の警告のためサンツは岡山の帝國殖民会社や和歌山の厚生移民会社と移民輸送の契約書を作ったもののすべて御破算となつてしまった。

大越公使の下に外山義文通訳官、堀口九万一書記官がいたが、大山がサンパウロ州コーヒー耕地悲観論に対し堀口書記官は樂觀論者であつた。

外山は明治卅二年十二月十五日付で本省宛コーヒー耕地の実情に関する報告書を送り欧州各國政府が自国民のブラジ

ル渡航を警戒していると述べたが、その事情報告なるものは、いずれもブラジル誘入移民としては縁の薄い國々の北欧諸国移の来伯実例を報告しており、いわゆる暗い面だけの報告で明るい面を避けているような傾向がみられた。

日本移民送出しに極力反対した大越公使は一九〇三年五月二十六日に帰朝し、後任は堀口九万一書記官が代理公使に就任した。その頃駐日ブラジル公使も二代目の代理公使マヌエル・カルロス・ゴンサルベス氏が就任した。この前の代理公使オリベイラ・リマ氏は日本移民反対論者で、一九〇二年帰国後出版した著書の中で、日本人は支那人と同人数だが、支那人ほど柔和でなく、殊に自負心が強く、それが少しでも傷つけられると、やつきになって反抗する。もし耕地主が、欧州移民と同等の待遇を與えないと、日本人は大いに憤慨するであろう。日本人は多くの美點をもっているとはいえブラジルの移民としては歓迎したくない。また日本人自身も環境の著しく異ったブラジルでは幸福を感じぬであろう。と書いている。オリベイラ・リマの対日本人觀察は日清役後の日本人が反省なき神経質な自負心を指摘している。こうして日本人側でブラジルを日本人發展地として賛否両論があつた如く、ブラジル人側でも、そうした二つの傾向に分れていた。

移民熱を高めた

杉村公使の報告

ところで堀口代理公使は、ブラジルの移民会社員サンツが日本に行く前に会見して話合ったが、サンツは日伯間の移民問題は適不適の問題でなく、要するに距離が遠いだけで、旅費がかかる点にあるのだと述べていた。このサンツのために日本関係者宛の添書を与えて便宜をはかつてやつた。

ブラジルは日本移民にとって不適の地だと報告した大越公使の後任として三代目に杉村氏が一九〇五年四月十九日着任した。着任早々堀口九万一書記官を伴ってますミナス・ゼライス州とサンパウロ州を視察したが、その視察報告にはコーヒー耕地の移民の賃銀、雨期には自作栽培地を提供し、衛生状態の良好、気候の温和、衣食住の簡易さ等が詳細に述べられて対伯移民の有望性を説明していたが、この報告書は外務省内部の日本移民反対のガンコ連をも動かし、一方大阪朝日新聞紙上で発表され各方面に反響を呼び起した。一九〇五年末に堀口書記官が帰朝し、翌年（明治三十九年）一月八日東京銀行集会所において東京在任の貿易商、銀行家、船舶業者、海外事業関係者を集めてブラジル事情を紹介して杉村公使の報告書を裏書きした。

ちょうどこの頃（一九〇五年）北米桑港にアジア人種排斥

同盟会が設立され、日本人の移仕反対運動が組織化された。翌年四月桑港大震災が起り、日本学童の通学する校舎が焼失した。校舎不足を理由として学務局は遂に日本児童隔離教育令を出したが、この排日問題で日米両国政府で交渉が開始され、日本政府はこの隔離教育令撤回を交換条件として日本移民の米国行きを制限するという弱気な協約を結んだ。このため日本移民は北米大陸から締出しを喰つてしまった。

こういう時に杉村駐伯公使のサンパウロ州コーヒー耕地事情報告が発表されたのであるから反響があつたのは当然である

この機を逃さすに乗出したのが皇国殖民会社社長の水野龍氏であつた。その時の心境を水野氏は著書「南米案内」のなかでこう述べている

『日露役凱戦軍人の中一時多数の失業あるべきを想い、これを南米（杉村公使の報告により伯國サンパウロ州へ）移民の先鋒として本邦移民の端緒を開くは時機を得たものならんと信じ、一篇の意見書を草して朝野諸先輩の意見を問いたるに何れもその可なるを稱せざるはなかりき。然れども責任ある計画としては、公使の報告その他の材料のみを根拠として事を断ずるの不可なるを思い、身一度彼の地を踏査して、

然る後実行の可否を断ぜんと欲し、南米を企つるに至れる

ものなり』

かくて水野氏は駐日ブラジル國辨理公使マノエル・カルロス・ゴンサルベス氏を訪い、移民契約のため渡伯する希望を述べ、公使は充分の便宜を計ることを約束した。さらにその足で外務省通商局長の石井菊次郎氏を訪れて相談したが、石井局長は水野氏の実地視察に賛成であつた

水野龍氏乗出す

一九〇五年（明治三十八年）十二月 東洋汽船会社の南米航路第一回船グレンファード號に乗った水野龍氏は、ペルーからチリへ、アンデス山脈をミューラで越えてアルゼンチンへ、それから大西洋を北航してブラジルの首都リオ・デ・ジャネイロに上陸したのは翌年一九〇六年四月であつた。

横浜を出帆してから間もなく水野氏はチリへ行く青年鈴木貞次郎氏と知合いとなり、ブラジルのことを語り、鈴木青年はチリをやめ、水野氏とブラジルに行くことに決心した。

鈴木青年は着伯後、日本移民の「見本としてチビリツサ耕地で働いた。この鈴木青年がいまサンパリロ市に住んどいる鈴木南樹翁である。鈴木氏は、その著書「移民の草分」でその頃の模様を次のように書いている。

『横浜を出帆してペルーのカリヤオに直航するグレーンファード號は、色々の意味において戦勝日本が海外に送り出すサムシングであつた。同乗者の中にブラジル移民契約の使命を帯びて行く水野龍氏の居つたことが、私の運命をして今日あらしむる機縁となつたのである（中略）』

水野さんは私をその傍近く呼んで「まあ読んでごらん。氣に入ったらブラジルに行こうじゃないか」

例の杉村公使の「ブラジル移民に関する報告書」を私に渡してくれた。

「そうですね。私は必ずしもチリーと限つたわけでもありませんから、一つそれを読んで考えさせてもらいましょう」

「それがよい君、チリーも悪いとはいわぬが、ブラジルに行つて移民の先駆となるのも面白いじゃないか」

“移民の先駆”……それは私にとって一種の魅惑であつた。

私は船室に戻つてから一氣にこれを読破した。コーヒー樹というものはどんなものであろう！。絵にも写真にも見たこともない私はしきりに空想した。

翌日、私は水野さんの前に立つた。

「ここに書いてある半分の事実があつたとしても、コーヒー園労働は愉快ですな。私は貴方と一しよにブラジルに、参りましょう」

「それは君、公使の報告書だからネ、ウソはないヨ」

私の顔は火のように燃えた。

「どうぞ連れていって下さい」（中略）

かくて水野、鈴木両氏はリオからペトロポリスの日本公使館に杉村公使と三浦荒次郎通訳官を訪れ、日本移民契約の件について協議した。水野、三浦通訳官、鈴木三人はサンパウロ州に行き、州当局と移民契約について交渉したが、まずコーヒー耕地視察へと州移民局から案内され、モジアナ線チビリツサ駅ヒルミヤノ耕地、リベロン・プレット駅ゾーモン耕地、サン・マルチンニオ・ビスコンデ・ピニアル駅サンタ・ビルジニア耕地などを視察した。ここで鈴木氏は、移民の“見本”となってチビリツサ耕地で働きその耕地生活の模様を詳細に報告した。水野氏はサンパウロ州政府当局の移民契約の應諾回答を待機中、一九〇六年五月十九日杉村公使は脳溢血でたおれた。水野氏は来年再渡伯を期し、七月ブラジルを去って帰国した。杉村公使の後庄には内田定雄公使が来任したが、公使は北米以外に日本移民の發展地を求むべきだと主張しており、ブラジルに日本移民誘人には賛成していた。かくして皇国殖民会社とサンパウロ州政府との間に日本人家族農業移民誘入契約締結のため水野氏は翌年四月再渡伯した。永野氏はサンパウロ州移民及び植民局長ベント・ブエノ氏と協議し、欧州移民同様の待遇を日本移民にも与え、旅費は日本家族農業移民及

び単独移民にも欧州移民旅費より多額支給するという特別法案を州議会に提出し、予算を請求することとなった。

一九〇七年十一月六日、この移民契約はサンパウロ州農務長官カルロス・ポテリオ氏によつて署名された。

かくて日本移民史に劃期的な一ページを飾るブラジル農業家族移民の輸送が開始されることになった。希望に胸おどらせて水野氏は翌年一月帰国した。当時水野氏は五十歳であつた。一九〇八年（明治四十一年）二月二十五日、外務省の認可を得てブラジル行き農業家族移民一千人を募集した。一方水野氏は東京外国語学校スペイン語科卒業、又は在学中の五名をブラジル行通訳として募集した。この五人は大野基尚、仁平高、平野運平、嶺 昌、加藤順之助諸氏であつた。一行はシベリアを経由、ブラジルについたのは一九〇八年五月中旬だつた。

ブラジルの土を踏んだ最初の日本人四名

ブラジルを最初に訪れた日本人は、いまから約百五十五年前、一日本帆船の漂着民だといわれている。寛政五年十一月陸奥国石巻港を御用材四百本と御用米二千三百余俵を積んで出帆した若宮丸（廿四反帆船、乗組員十六名）は岩城領監屋崎で暴風に襲われ北方に流された後、寛政八年イ

ルクーツクに到着、ここに八年間滞在したが、さらにモスコーを経てピータ・スプログに行き、国賓待遇を受けた皇帝から「故国に帰りたいか」と聞かれ、居残ると答えたのが六名、あと四名が「帰して貰いたい」というので、これらは首府に四十予日留った後日本へ派遣の露国使節レザルツトと共に東洋に向う露艦ナデシユダ號に乗った。一八〇三年六月十六日クロンスタット港を出發しカナリア島から赤道を越し、西南へ向いブラジルのエカテリナ（サンタ・カタリナ州）いまのフロリアノポリスに入港した。約七十一日間滞在し一八〇四年二月八日出帆、長崎に着いたのが文化元年で幕府に引渡されたのが翌年（一八〇五年）で、石巻港を出てから十三年目であった

この四名の名は津太夫（六一才）儀平（四三才）左平（四一才）太十郎（三四才）でいずれも仙台の者——と「環海異聞」に載っている。

二番目に訪れたのは一八七〇年十月六日バイアに寄港した英艦（三隻から成る世界一周艦隊で、司令官はH a n b l e y 提督）に日本兵部省で練習生として乗組ませた薩摩藩の前田十郎左衛門と伊予藩の伊月一郎の二名である。当時のバイアの新聞ジオリオ・デ・バイア紙によると前田は七日の年前三時から四時までの間に切腹自殺をとげた。原因は郷愁に堪えかね神経衰弱からだといわれている。バルウ坂の英国墓地で葬儀が行われたが、佛教徒であるためヘブラ

イ人基地に埋葬された。

櫻散る明治四十一年 笠戸丸ブラジルへ

七八一人の先駆者

「ボオー」と腹わたにしみ通るような哀調をこめた汽笛とともに、ブラジルへ初めて行く移民七百八十一名を乗せた笠戸丸（六、〇〇〇トン）は神戸栈橋を静かに離れた。見送りのハシケから景気よく花火が上がる。日傘をさして島田まげに結った紙人形がフワリ、フワリと中空に舞っていた――。

いまから五十年前の明治四十一年四月二十八日午後五時五十五分。ブラジル移民のひらけた歴史的な日であった。笠戸丸が出港する三時間前甲板に移民たちを集めて見送りの移民会社代表の土井権太代議士は「外国に行っては、諸君の一人、一人が日本国を背負っていると思え。諸君の一人、一人が日本人の体面を汚すべからず。成功せずんば死すとも帰らすの覚悟で行くべし」と訓辞を行った。

「この柳コウリ一ぱいに円紙幣を詰めて帰るつもりで出かけ

ましたバイ」とは熊本の大工さんの希望だった「三年間
みっちり働いて生活費を切りつめて一万円をためたら、そ
れで故郷に帰っておふくろを京都の本願寺へつれていつて
お参りしたい」とはある若夫婦の願いだった。
いすれも大同小異、四、五年もしたら小金をためて、日本
へ帰りたいというのがその希望だった。

●巴西移民の有望

(八百の多数昨日神戸出帆)

北米移民の傾揺が殆どなくも此處に好機を興
へ皇國移民會社の手に據りて募集せられた
る第一回巴西移民七百八十三名は二十八日
午後二時神戸出帆東洋汽船會社の笠戸丸に
搭して一萬八千里外なる南米巴西に輸送せ
られたり今回の移民は既に同國政府に於て
移民法改正の結果特殊の待遇と與へられ
住者は必ず一家族の者に限られたる代り一
名に對しては航海費用百六十五圓の内一百
圓の補充金を與へられ(内四十圓は領事の
義務あるを以て結局六十圓の補助)六箇月
間同國政府命令の下にサンパウロ州に於

明治四十一年四月二十九日の大阪朝日新聞一同紙提供一

コーヒー一俵の採取貨は五百レース。その日一人で四俵ぐ
らいは収獲できるので、二ミルレースになるので一日一円
二十銭になるとソロバンをはじいていた。そのころ日本で
大工職は一日手辨当で四十銭百姓の日雇い飯付きで二十銭、
小学女百姓の日雇いが飯付きで二十銭小学女教員の月給が

八円、巡查が十円そこそであつたという。ブラジルではコーヒー四俵を採取して一日一円二十銭。月に三十五、六円になる。とすると、家族みんなで働けばこれはきつともうかるぞと大したハリキリぶりだった。

乗船していた移民及び関係者は次のようになっていた。

家族数 一六七

人員内訳

契約移民 七八一名

自由移民 一〇名

単独（男） 四六名

合 計 七九一名（男 六〇一名、女 一

九〇名）

その他の移民関係

水野龍、上塚周平、大野松子（通訳大 野基尚の妻）、仁

平ツナ子（通訳仁平 高の妻）

花火関係

三原万次郎（水野龍妾腹の子）、柏木 某（花火職人）

船側通訳 金澤一郎（東京外國語学校スペイン語 教授）
下船せず

推すべき形勢なり

●南米移民出發

第一回伯刺西爾移民を

搭載せる東洋汽船會社の笠戸丸は二十八日午後二時半伯國サントス港に向け神戸港を出帆したり渡航移民は七百八十三名にして其内譯左の如し

熊本縣五十八人▲鹿児島縣百七十二人▲沖縄縣三百廿七人▲山口縣三十人▲高知縣十四人▲愛知縣廿一人▲廣島縣四十二人▲福岡縣七十七人▲宮崎縣十人▲新潟縣九人▲其他三人

尙今後皇國植民會社の手によりて九千人を渡航せしむる豫定にして今回は移民監督保護のため法學士上塚周平氏一行中に加はり居れり又横濱駐在伯刺西爾國代理領事サントスシルバ氏も横濱より來りて種々斡旋したりと

●臨時大阪府會委員會

臨時府會聯帶委員會

アルゼンチン行旅行者

安田商店主及び雇員二名Ⅱ計三名。

ウルグワイ行旅行者

瀧波文平商店主 一名

笠戸丸移民（契約・自由）および引率者便乗者は金澤一郎氏を除き八百一名である。船員でサントス上陸した者は関某（火夫長を刺殺した犯人）八木伊勢吉（船大工）以上・二名脱船者、また高級船員付ボーイ福原庄五郎は公使館雇いとしてリオで下船した。同船員根岸誠一は七月六日笠戸丸がリオ着と同時に脱船上陸したまま生死不明となつてい

（大阪毎日新聞の記事）

る。当時の伝えられる模様では海に飛び込み陸へ向つて泳ぐ途中流され救助されたが、第一回移民のゾーモント耕地へ配耕された連中が退耕事件で移民収容所に来た折、同所炊事場で皿洗いをしていたというが、その後は消息不明。

五十年前の日本の新聞から

第一回移民をのせた笠戸丸の神戸出帆の模様を五十年前の四月二十九日付の大阪毎日新聞と大阪朝日新聞は次のように報じている。（原文のまま）

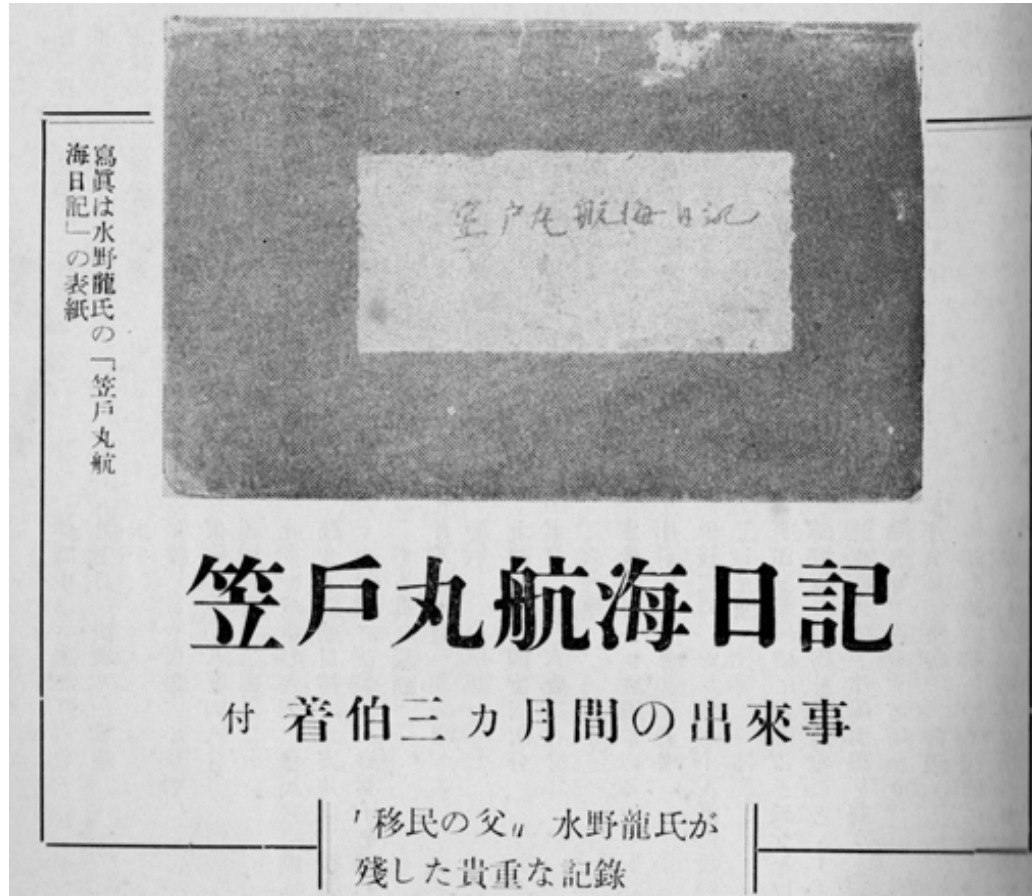
【毎日新聞】

第一回伯刺西爾移民を搭載せる東洋汽船会社の笠戸丸は、二十八日午後二時半伯國サントス港に向け神戸港を出帆したり、渡航移民は七百八十三名にして其の内訳左の如し、熊本県五十八人、鹿児島県百七十二人、沖縄県三百二十七人、山口県三十人、高知県十四人、愛媛県二十一人、広島県四十二人、福岡県七十七人、宮崎県十人、新潟県九人、その他三人、尚今後皇国植民会社の手によりて九千人を渡航せしむる予定にして、今回は移民監督保護のため法学士上塚周平氏一行中に加わり居れり、又横濱駐在伯刺西爾国代理領事サントスシルバ氏も横濱より来りて種々斡旋したり。

【朝日新聞】

北米移民の頓挫が端なくも此処に好機を与え皇國移民会杜の手によりて募集せられたる第一回巴西移民七百八十三名は二十八日午後二時神戸出港東洋汽船会社の笠戸丸に塔じて一万八千里外なる南米巴西に輸送せられたり、今回の移民は、さきと同園政府に於て移民法改正の結果、特殊の待遇を与えられ移住者は必ず一家族の者に限られたる代り、一名に対しては航海費用百六十五円の内百円の補充金を与えられ（内四十円は償却の義務あるを以つて結局六十円の補助）六箇月間同国政府命令の下にサンパウロ州に於て、労働したる後同州鉄道沿線に於て一家族に十町歩の土地を与えられ此処に一の殖民地を作る事をはかるの組織なり、應募者の國別は沖縄三百二十七名を最とし、鹿児島は百七十八名、熊本七十八名、福島七十七名、廣島四十二名、山口三十名、愛媛二十一名、高知十四名、宮城十名、新潟九名、東京三名なりと、何分一家を挙げて移住するもの多き事なれば服装の如き、男女とも大部分洋装しその携帯品の如きも好く整頓して従来移民の比にあらず、惟うに彼地に到着の上は此の積の労働者として十分なる好評を博し得べけんか、同船の航海日数は五十三日にして道中新嘉坡及び喜望峰に寄港し炭水を補充する外、何処にも立ち寄らず目的地に直航すべしとなり、神戸出港の際は神戸及び横濱駐

在の同国領事来船して此を視察し、大いに満足の意を表し居れり。



笠戸丸航海日記

付 着伯三カ月間の出来事

“移民の父” 水野龍氏が残した貴重な記録

四月廿八日 晴 火曜

午後五時五五分出帆

四月廿九日 晴 水曜

正午

北緯 三二度二五分

東経 一三二度四五分

一九五浬

四月卅日 晴 木曜

午前十時左舷に「スワ嶋」を眺めて進航す。(スワ嶋とは
諏訪瀬嶋)

正午

北緯 二九度五八分

東経 一二九度

二四七浬 夕刻少雨

五月一日 朝大雨後晴 金曜

正午

北緯 二五度五五分

東経 一二五度〇五分

二四三浬

五月二日 曇天 土曜

正午

北緯 二六度三一分

東経 一二二度一三分

二二二浬 此夜八時より、TURN・ABANT (廻船

燈）の燈台を見る。

五月三日 快晴 日曜

正午

北緯 二三度三〇分

東経 一一七度四八分

二五八浬

此の正午兄弟嶋を見る。午后三時三〇分ラバ嶋を見る。
是より後数日間嶋、岬を見ることなしと云う。

五月四日 快晴 月曜

正午

北緯 一九度三八分

東経 一一五度一四分

二七二浬

此日いよいよ暑気甚し。

五月五日 快晴 火曜

正午

北緯 一五度三三分

東経 一一三度〇五分

二七四浬

此夜熱度高く寢所に苦しむ者多し。

五月六日 快晴 水曜

正午

北緯 一度四七分

東経 一一度〇九分

二五二哩

此夜火夫暴語を發し警戒する所あり。
亦閑中の一事なり。

五月七日 快晴 木曜

正午

北緯 八度一五分

東経 一〇八度四八分

二五四哩

此夜警戒中の火夫、移民共に動揺すと

註Ⅱ 下級船員特に火夫共は、夜間移民の部屋にしのび、
婦女子を襲わんとする爲の騒動。

五月八日 雨 金曜

正午

北緯 四度三七分

東経 一〇六度二五分

二六〇哩

年後六時より風雨つゐる。

五月九日 快晴 土曜

午後二時、シンガポール港に投錨す。

二七五哩

明日早天棧橋に着すると云うを以て郵便電報の事務を明日のこととす。

此夜亦火夫、片岡治義を襲うと云う風聞あり、警戒する所あり。

五月十日 快晴 日曜

年前七時運航を始め棧橋に着す。上塚代理人上陸、郵便電話の事を辨せんとす。日曜日の爲、一切辨する事を得ず

三井物産会社店員に托す。

年後三時拔錨ケープタウンに向う、暑氣意外に甚しからず病氣幸に少し。

五月十一日 快晴 月曜

正午

北緯 二度五五分

東経 一〇一度

二〇一哩

五月十二日 快晴 火曜

正午

北緯 五度二一分

東経 九七度〇三分

二五〇哩

五月十三日 大風雨 水曜

正午

北緯 五度三〇分

東経 九四度二五分

二〇〇哩

五月十四日 半晴 木曜

正午

北緯 三度二二分

東経 九一度四六分

二〇二哩

シユウ雨時にあり、波高く船酔に苦しむ。

五月十五日 曇 金曜

正午

北緯 一度二五分

東経 八九度二四分

一八四哩

五月十六日 晴 土曜

正午

南緯 ○度四四分

東経 八六度四〇分

二〇四哩

十三日以来南風、船動揺甚し、船酔多し。

五月十七日 時々シユウ雨 日曜

正午

南緯 二度五九分

東経 八三度五六分

二二二哩

五月十八日 晴 月曜

正午

南緯 五度五五分

東経 八〇度五六分

二三三哩

涼風此の日より起る、動揺少く暖し。

五月十九日 晴 火曜

正午

南緯 七度二一分

東經 七五度六九分

二五三哩

五月廿日 半雨 水曜

正午

南緯 九度五四分

東經 七三度六九分

二五七哩

五月廿一日 快晴 木曜

正午

南緯 一二度〇八分

東經 六九度四〇分

二六一哩

五月廿二日 快晴 金曜

正午

南緯 一四度一五分

東經 六六度一一分

二四〇哩

五月廿三日 快晴 土曜

正午

南緯 一六度四一分

東經 六二度二二分

二六五哩

五月廿四日 快晴 日曜

正午

南緯 一九度〇七分

東經 五八度二八分

二六四哩

午后英領マウリスタ島を見る。

五月廿五日 曇 月曜

朝佛領セントレウニオン島を視る。

圍的三〇哩、砂糖草物を産すと云う。

正午

南緯 二一度一一分

東經 五四度四〇分

二四八哩

五月廿六日 快晴 火曜

正午

南緯 二三度四六分

東経 五〇度四三分
二五七浬

五月廿七日 晴 水曜
朝、マグカスカル嶋を見る。

正午
南緯 二八度五二分
東経 四六度三一分
二七一浬

五月廿八日 快晴 木曜
正午

南緯 二七度四二分
東経 四二度一二分
二五六浬

此夜大野基尚の妻、居をうつすこと五時間。

註Ⅱ基尚の妻、大野松子船中に於ける五時間の行方不明は同居者仁平高の妻松子に依って船中に知らされ大騒ぎとなった。

併し彼女は某上級船室に居た事が判った。

五月廿九日 晴微風 金曜
正午

南緯 二九度二三分
東経 三八度
二四三哩

五月卅日 快晴 土曜
正午

南緯 三一度〇四分
東経 三四度 二三〇哩

五月卅一日 晴風 日曜

正午

南緯 三三度〇四分
東経 二九度一三分
二七二哩

比の夜燈台を見る。

六月一日 快晴 月曜

此朝より亜弗利加大陸を見る。

正午

南緯 三四度二四分
東経 二四分一二分
二七〇哩

六月二日 快風 火曜

正午

南緯 二四度五二分

東経 一九度三七分

二三〇哩

午後十時、ケープタウン着、港外投錨

一〇七哩

六月三日 雨 水曜

午前七時進行船梁内に入る。上陸市街を見る御門と稱する商店あり、之を訪問す。主人古谷某、常陸の人、英佛戦事の時より開店すと云う。主人帰国中同人妻及姪と若者二人あり。

夜古谷の妻及姪船中に来る。

六月四日 半晴 木曜

年前九時港外に用ず。

年後一時拔錨、波浪高く船動揺す。

六月五日 晴 金曜

正午

南緯 三一度四九分

東経 一四度一〇分

二四八哩

六月六日 晴 土曜

正午

南緯 三〇度二七分

東経 九度一七分

二六四哩

六月七日 半晴風 日曜

正午

南緯 二九度一四分

東経 四度三八分

二五二哩

六月八日 晴風 月曜

正午

南緯 二八度一〇分

東経 〇度三六分

二二二哩

此の時、船動揺甚しく棚士の物落つ。

六月九日 晴 火曜

正午

南緯 二七度二四分

西經 四度〇〇分
二四八浬

六月十日 晴 水曜
正午

南緯 二六度三六分
西經 八度四九分
二六二浬

六月十一日 晴穩波 木曜
正午

南緯 二五度五五分
西經 一三度四三分
二六七浬

六月十二日 晴 金曜
正午

南緯 二五度二〇分
西經 一八度三六分
二六六浬

六月十三日 半晴 土曜

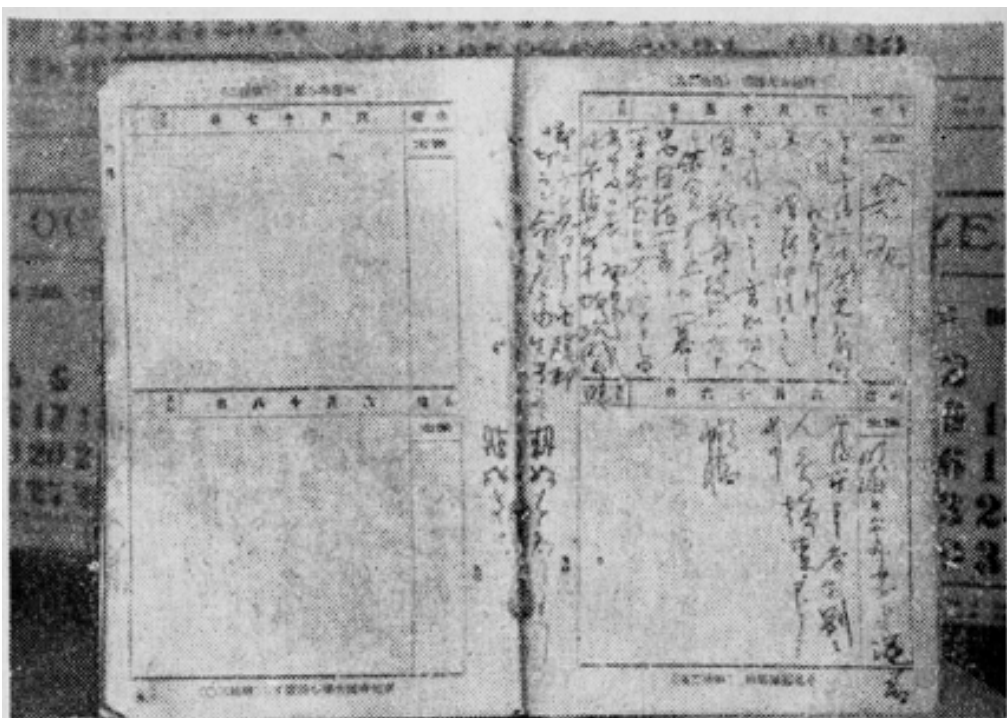
正午

南緯 二五度〇九分

西經 二三度三〇分

二六六哩

六月十四日 晴 日曜



正午

南緯 二四度五七分

西經 二八度二七分

二六四哩

六月十五日 快晴 月曜

正午

南緯 二四度四六分

西經 三三度〇八分

二六〇哩

此夜????? (ママ) の催あり、此深更悪火夫我を襲

わんとして上級火夫の爲め遮ぎられ遂に上級火夫を刺す。

六月十六日 快晴 火曜

正午

南緯 二四度〇九分

西經 三七度四八分

二五五哩

六月十七日 晴 水曜

正午

南緯 二四度〇八分

西經 四二度二〇分

二四九 湮

サントスへ入港

六月十八日 晴 木曜

此朝九時、サントス入港、午後五時船染着、航程二二〇
湮 総湮一万二千湮

六月十九日 晴 金曜

此朝移民三時半離床、五時喫食、七時發、サンパウロ収
容所に向う

皆の動揺なく、亦一人の病者なし

煙火荷物をリオ廻船の手續を済し

午後四時三十分發にてサンパウロに向う。

午後六時三十分着、グランデ・ホテルに投ず。

三浦通訳官（荒次郎）及煙火三人同行す。

（三原万次郎Ⅱ水野妾腹の児。柏木某Ⅱ玉屋花火職人。松

田宇一Ⅱ水野家書生、リオ郊外にて健在）

藤崎商会後藤武夫氏来り迎え、亦同行す。夜内田公使に
發電す。又本社に發電す。

六月廿日 晴 土曜

此日聖州州統領移民収容所を視る。

前大統領ポチリヨ及ベント・ブエノ亦来所す。移民静肅、

皆の不都合なし。

六月廿一日 晴 日曜

此日収容所を視る。船員、パーサー（布施謙蔵）機関長来る（飯嶋巽）同道

収容所を視察、皆完備に驚く。

六月廿二日 晴 月曜

午後収容所を視る。船員逃亡者四人来所す。皆係に托し帰り電報す。夜機関 長飯嶋氏、金澤一郎氏（外国語学校先生 船側の通訳）と来市す。

六月廿三日 晴 火曜

午前収容所に至る。

船員逃亡者を船員に戒附す。午後大統領に会見す。

六月廿四日 晴 水曜

午後聖州州統領邸を問う。又収容所を視る。

六月廿五日 晴 木曜

午後聖州商務省にて次の珈琲の件を寫（ママ）す。

六月廿六日 晴 金曜

註Ⅱ当日は熊本県人が市内見物をしている。

六月廿七日 晴 土曜

午前収容所に至る。年後聖州省出張珈琲契約調即す。Ⅱ

（注、此の時の通訳は後藤 武夫氏であった。）

夜日本に發電す。

六月廿八日 晴 日曜

収容所を視る。

此夕刻、三原万次郎以下四人「リオ」に行く。

六月廿九日 晴 祭日 月曜

午後収容所を視る。

コメルシオ新聞社の写真帥来る。

六月卅日 晴 火曜

午後聖商務省出所、次官及工商官長と面会、珈琲契約清本を交附す。

珈琲販売人来る。

七月一日 晴 水曜

午前珈琲販売所をみる。

午後収容所に至る。

聖州州統領閣下に上塚氏を紹介す。

七月二日 晴 木曜

石井書記と通訳来所あり。

本社に発信す。

七月三日 晴 金曜

ブラジル（？）会社に上塚代理人を同行す。

聖州省にて鈴木（貞次郎）移契を更新す

此夜片岡一家（片岡治義、妻秀於、子 光章）其の外三人を率いてリオに向う

七月四日 晴 土曜

朝八時リオに着す。先着の（？）モン氏出迎う。

此夜モン氏リオ統領に面会して得る所あり。

七月五日 晴 日曜

朝六時三十分ペトロポリスにモン氏同行す公使は大に移民の事に満足す。

亦リオ州植民の事に就て託す所あり、明日馬場書記生をリオ市に下す事を約す。

夕刻リオ市に下る。

夜（不明）来り博覧会の景況を話す。

七月六日 晴 月曜

年後馬場書記生公使の命により通辯のため来る。

年前モンテイロと馬場書記生とを伴いニチロイにリオ州統領を問うて（不明）日伯通商の事を談ず。

三浦通訳官の書に接す。

七月七日 晴 火曜

午後博覧会場に至り煙火工場をみる。

岩永、北原、上原と会見す。

夜に入り帰省す。モンテイロはニテロイに至る。

高橋書記生の書に接す中に岩本の書あり、又土塚宛の書あり。

七月八日 晴 水曜

此夜宮崎信造氏来る。公使との約束の如く雇入れるものなり、三浦通訳官に書面を發す。

七月九日 雨 木曜

午前博覧会に至る、三原の宿所に至りみる。

此日より宮崎、三原の宿舎に入る。

煙火のプログラムを作る。

七月十日 晴 金曜

午後モンテイロと花火の打合せをなす 成川満幸、林竹太郎の書に接す。陶器の事に関し外人の照介に接す、東野、林竹太郎、山口伝太郎・加藤通訳（順之助）古谷きん子に發状。

耕地で移民騒ぐ

七月十一日 晴 土曜

上塚代理人の書あり、急ぎ来聖をうながし来る。其の夜考える所ありて書面を發す。

註Ⅱ六月二十九日通訳加藤順之助に引率された移民、福島、熊本、廣島県人 五十二家族二百十名はりベロン・プレート駅頭にて耕主より樂隊をもつて歓迎されヅモント耕地に入植した。

就働への準備の日を経て七月六日仕事始めと成り、珈琲採集にとりかゝつたが、移民会社の日本に於ける宣伝とは似もつかぬ収入賃金に移民達は激昂し新主及通訳に対しての紛争事件を起すに至った。

第一回移民熊本県人橋口重正氏日記によると、三人家族にて、七月六日珈琲（コツコ）摘高四キログラムとあり、その後も三キロ、三キロ半とある。

「移民会社の宣伝のごとく、一日賃金三人家族にて九円より十円が約束されぬ限り働かぬ。水野、上塚の嘘つき奴一日

一円にも足らぬ収入で、一人百五十円以上の旅費を拂って知られ他国に来る者があるか」と・総罷業に人つた移民達の状況は加藤順之明通訳より上塚周平代理人へ。リオ市の水野代に刻々と報ぜられはじめた時である。

七月十二日 晴 日曜

成川、山林技師来る。アペニード・ホテルに送る。

上塚代理人の電報あり、三浦通訳官に発信す。此朝水嶋（？）一郎氏を訪う。

七月十三日 晴（満月） 月曜

午前博覧会場に至り、煙火をしかけ来る。

夜リオ州大統領子女の誕生と云うに依り祝す。嬢は松の花籠を飾り、夫人は 扇子を持ち、書記官長はシロネクタイを着け居り、満足の意を表わす。

十一時帰省。

七月十四日 晴 火曜

無事

夜水嶋、田中両氏来る。

七月十五日 晴 水曜

本社及藤崎商会に発状。午後成川技師来訪共に博覧会場

をみる。夜西村まん子及隈部三郎氏に發状す。

七月十六日 雨 木曜

午後博覽会に至る。

夜日伯商會員及田中氏來訪、三原、田中と共に夕飯を喫す。

七月十七日 半晴 金曜

此日、片岡を博覽会場に移らしむ、田中氏より金三百ミルレースを借る。

藤崎商店の書に接す。

七月十八日 雨 土曜

午前上塚氏より電報あり、ヅモント耕地破裂す。通訳一人直ちに派出す可しと。八時夜行にて宮崎信造で派出す。

此の夜三浦氏（荒次郎）帰市の旨後藤氏より電報に接す。

夜由中氏（良作）來訪。

相つぐ耕地の紛糾

七月十九日 晴 日曜

午前八時三浦氏サンパウロより来る。

移民の事情詳説す。

上塚氏に一書を發す。

直後上塚氏の書に接す。

林竹太郎氏の書に接す。

神谷氏（忠雄）の来伯に就て云う処あり。博覧会場で昼食す。

午後三浦氏を宿に訪いて更に移民の状態を詳聞す。
モンテイロに電報す。

註Ⅱヅモント耕地紛争問題はいよいよ悪化し、鎮撫に出かけた上塚周平氏が「しばらくの辛抱を」と天地に両手をついて沈静を求めたが移民の会社に対する憤慨はおさまらなかつた。

八月一日には数回目のヅモント耕地訪問を行い。過激派の家長連を集めて説得に務めたが「コノ嘘つき奴」とばかり上塚周平氏の顔面に唾を吐きかける者まで出る仕末であつた。（八月二日）

七月廿日 晴 月曜

午前十一時半、三浦氏を宿に訪ねモンテイロを待つ、氏来らず。四時に至り宿所に至る。モン氏に宿中なり。

三浦五人にて晩食。

七月廿一日 晴 火曜

午前八時セントラル発にて三浦氏帰館す（ペトロポリス）
九玉を（吉造）随行せしめ、急に入用の金を借受ける事とする。

午后出て博覧会場に至らんとする。途猿橋氏と会す。日く「内田、船局長及神谷忠雄氏も来る」と。

ホテル・エストランジエロに両氏を訪ね談す。夜八時九玉ペトロポリスより帰る。

三浦氏より一コント五百ミル借り来る

註Ⅱこの時は、移民配耕六耕地の中、グワクパラ耕地（通訳は平野運平氏）以外の五耕地に紛争事件が起っていた加えて神戸出帆前移民より会社に貸付けた金の支払の請求の聲も激しかった

水野も煙火により、金を調達しようとしたが、対政府請負の花火打上げは九月七日の独立記念日であり、纏った金を得るにはかなりの期間を要するために公使館より借金に及んだものである

七月廿二日 晴 水曜 内田公使（定槌）来り出迎う。

上塚代理人に六百ミルレースを電送す

上塚、三浦氏の通信に接す。

七月廿三日 晴 木曜

午前公使を問う。又神谷氏に会して千五百円の借用を依頼す。此時上塚代理人聖市より来る。

事情せまるものがあり、夕刻の汽車にて帰聖す。

七月廿四日 晴 金曜

十一時ブローカーの店にモンテイロ氏と共に至るも、成らず。三時重ねて問う成らず。

上塚代理人へ電報し又書面を發す。

（花火買込みの為にブローカーを問う）

夜神谷氏ペトロポリスより来り訪う。

七月廿五日 晴 土曜

内田船局長来訪、神谷氏を伴う。

藤崎商会（サンパウロ）に電報、内田局長の出迎えを托す。

十一時ブローカーをモンテイロ氏と共に訪う話成らず。上塚代理人に電報す。且つ内田氏の事を報ず。上塚代理人の書来る。誠に察する処あり。

家信あり、六月六日東京に大雹降ると最大なるもの径四吋。

家信を發す。

安田喜十郎氏の書至る三浦氏サンパウロに向う為リオ市に下る旨の返電あり即中央停車場に至り待つ、三浦氏至る夜十時三浦氏来る、モンテイロ不在。

七月廿六日 晴 日曜

年前七時十分發車にて内田船局長サンパウロに向う。即中央停車場におくる

細谷忠雄氏と相携えて博覧会を視る。

途中エストランジエイロに寄り将来の方法を談す。十二時に至る。

午後三時三浦氏いたる。

ヅモントに書面を發し移民の状態を問う。公使の命に依る。

他五耕地亦同じく書面を發する事をモン氏に托す。

三浦氏と夜食して別る。

七月廿七日 晴 月曜

午前九時公證役場にいたる。モンミカエルト珈琲契約に就き契約す。

夜三浦氏モン氏といたる。

此夜深更上塚氏の電報至る。日く「ヅモント耕地にある加藤より（順之助）もう我慢が出来ぬ。アス来い、との電あり、あす是非金おくれ」と云う。

実に断腸の思いあり。

七月廿八日 晴 火曜

上塚氏に發電す。

而、見込立たず、止むなくば公使に乞うて外務省より積金を取るの外なし、只なお前途賢考せよ。と尚書面を以て電文の意を明す。午後本社より電報至る。日く「五千円送

る。保護金、積立何日返すか」と云う。

依て、直に此電文上塚氏に發す。又三浦氏に通ず。

此夜深更上塚氏より電報あり要件あり

「リオに行く」と。

七月廿九日 晴 水曜

朝八時上塚氏至る。ズモント移民の旨将来を談ず。

上塚氏と博覧会場を視る。上塚氏ペトロポリスに至る。

公使に移民の状態を話す事とす。

四時プライニヤ發。

本社に發電送金を促す。

夜田中氏來訪（良作）

七月卅日 晴 木曜

午前神谷氏ペトロポリスより至る。共に昼食す。

モン氏と博覧会委員を訪う。

本社・藤崎、三浦氏に發信す。

ブエノスアイレス安田商店に發電、内田舵局長の出發出迎方を報す。三浦代の書あり又馬場氏の書に接す。

此夕上塚氏ペトロポリスより帰り、直に聖市に向う。今後の策に就き相談する処あり。

田中、三原共に來り夕餐を共にし別る

七月卅一日 晴 金曜
公使館に煙火製造所の人名を届出す。

八月一日 晴 土曜
年前神谷ペトロポリスより至る。聖州に向う途中なりと。
午後博覧会場に至る。夕、モンテイロと三浦氏宿を訪う。
勝之を伴う。(柏木?)

八月二日 晴 日曜
早天 神谷氏の聖州に至るを送る。
上塚代理人外五通訳に神谷氏の巡遊を報ず。別に上塚氏に
は電報を發す。
有川(新吉)より大工の事を相談す。

八月三日 半晴 月曜
午後山県勇三郎氏を訪う。夕刻博覧会委員長を訪うて初
めて会見す。
ヅモントの書至る。

八月四日 半晴 火曜
ヅモントの書を公使に送る。
モン氏と銀行に至り金十コントを取る。
博覧会場に至る。勝之、町田来る。町田と共に帰る。

五時本社及内山氏へ発信、又上塚氏に発電、経過を問う。

八月五日 晴 水曜

午前十時有川を伴って郵便局に至り、
二コント上塚代理人へ為替を送る。

宿舎をルア・ダ・グロリア十番に移る

本社の書至る（二通）

八月六日 晴 木曜

此の日、博覧会場に於て英國煙火と讃をなすと聞き、俄
かに二十余發を試む

八月七日 晴 金曜

モン、三原とプログラムの打合せをなす。山縣も来訪。
午後博覧会場を視る。

八月八日 晴 土曜

朝上塚代理人の電報に接す。ズモント耕地事件につき余
の来聖を促し来る。

午後五時来電、明朝出發すべきを報ず
夜三浦氏を訪う。氏に顛末を話し後去る。又公使へ書面
にて其旨報ず。

八月九日 晴 日曜

午前七時十分發の汽車にて聖市に向う
夕六時着聖、後藤（武夫）佐藤（徳治）上塚周平、香山
六郎の諸氏と会す。

夜上塚氏とヅモントその後の策を談ず。

八月十日 晴 月曜

朝ヅモント支配人デビー氏を訪ねて打合せなす移民に書
を發し右の成立を報ず。

此夕八時ノルテ停車場發、リオに帰る

八月十一日 晴 火曜

朝八時リオ着、伊丹少佐中央停車場に待つ、公使の依頼
に依る。

是より相携えてプライニヤに至り公使の来るを待つて同
車、ホテルに入る。

博覧会場に至る。

此夕公使とペトロポリスに至る事を約す。

ブエノス・アイレス安田、古川の書至る。

マカニの安田の書至る。（良一）

土井の書至る。

高橋書記生の書至る。

午後五時、セントラル發ペトロポリスに向う。

公使四時にて帰館しあり、此夜公使館に宿す。

八月十二日 晴 水曜

公使三浦通訳官とヅモント耕地の策を談じ、三浦通訳官
派出の事に決す。

四時發して三浦氏と共にリオに下る。

三原万次郎、九玉吉造、有川新造来る

八月十三日 晴 木曜

午後八時發にて三浦通訳官と共にサンパウロに向う。

八月十四日 晴 金曜

午前八時サンパウロ着ソブラ検査官を訪う。不在。

八月十五日 晴 土曜

此日大臣不在のため、空しく一日を過ごす。

八月十六日 晴 日曜

午後ボスケ・ダ・サウデ公園に散歩す

夜宮崎信造ズモント耕地より帰る。

神谷忠雄亦同耕地より帰り来り訪う。

註Ⅱ宮崎信造氏が上塚氏の代理として八月十五日でヅモン
ト耕地に行き、移民よりの預り金を支払い帰聖した。

八月十七日 晴 月曜

午前ソブラ検査官を訪い、ヅモントより帰聖、移民の前
後策を談ず。

八月十八日 晴 火曜

前夜ソブラー氏来訪、鉄道工夫を、
五十人官設鉄道へ供する口ありと告ぐ

午後二時出て聖州大統領を訪う。恰も神谷忠雄氏亦訪問
中なりし。ヅモント耕地日本移民中五十人を鉄道工夫とし
他十家族移転せしめるの一策を話す。

遂にデビー氏を電招し、決定する事となる。珈琲保證金
来年四月中頃迄の事を話す。承諾を得たり。

八月十九日 晴 水曜

内田定槌公使に本日迄の経過を報ず。

八月廿日 半雨 木曜

午前ソブラー氏を訪ねて移民将来の事を談じり又珈琲保
証金廻附と清書の起案を托す。中食を共にして別る。

午後二時聖工務省の出張次官及アゼンシャ所長鉄道技師
と協談する処あり。

夜、神谷、後藤来訪、深更に及ぶ。

(二十余家族が退耕)

八月廿一日 半晴 金曜

年後一時・聖州省出所・デビー氏と次官と協定する処あり、一應耕地に至り廿余家族を出す事とし、出發を土曜とすべきや、將又日曜日とすべきやは收容所長に協議して報告を得る事として退出す。

夜收容所長來訪、日曜日出發と決す。

(水野氏一行移民引取りに出發の意)

夜演戲を視る。

八月廿二日 半晴 土曜

午前九時半上塚代理人來り日く「カーナイン耕地に在る沖繩移民總代昨夜來り 預金を請求すと、依て一コント五百ミルレースを返附する事とす。

此日年後二時神谷氏サントスに至る。

此タデビー氏を訪う。

八月廿三日 晴 日曜

午前五時四十五分發にてルス停車場發

三浦通訳官、收容所長・上塚代理人、宮崎信造通訳、デビー及監督ダリー諸

氏と共にヅモント耕地に向う。午後六時四十分着、デ
ビー氏住宅に宿す。

八月廿四日 晴 月曜

ヅキント在移民中百廿八人を分離する事と決定す。

八月廿五日 晴 火曜

午前五時百廿余人の移民を載せヅモントを發す。午後七
時聖市に着す。收容所長、三浦通訳官、加藤通訳同伴す。
グランデ。ホテルに宿す。夜有川新吉を電招す。

八月廿六日 晴 水曜

有川出發の電報あり、大野通訳（基尚）よりイツー移民
（フロレスタ）の小変を報じ来る。電令する処あり。
此日收容所にヅモント帰來移民の対策調査を為して夜八時
と成る。

上塚代理人ヅキントより帰聖。

有川新吉通訳リオより來聖。

此夜逃亡移民を上塚氏の宿所に集めて説諭する処あり。
（註Ⅱ廿六日夜の集合に当り、水野氏は「君達の様な契約
を果し得ぬ退耕者に対しては、日本にある身元保証人より
一人当り六十円の契約違反の損害を取る」とどなりつけた
といわれる。

これに対して、家長連は口をそろえて「日本で宣伝された様に一人当り一日賃金二円五十銭から三円の処を与えて下されるなら、努めて契約違反はしない。違反をして居るのはそちらだ」と逆に反撥したと伝えられている。

上塚周平氏は常に「スマンスマン、辛抱してくれ許してくれ」と頭で下げて決して怒った顔は見せなかったそうである。当時一円換算一ミル五百レース程度であった。」

八月廿七日 晴 木曜

移民収容所に至り耕地又は鉄道工夫志望者の区別をなす。三浦通訳官亦大に援助せらる。

夜、上塚、加藤・有川と会し明日の打合せをなす。

八月廿八日 半晴 金曜

午前八時より収容所に出て鉄道人夫契約の条件を確定す。

午後四時帰宿す。

三浦万次郎より送金を促し来る。

夜有川新吉来る。

八月廿九日 半晴 土曜

午前十時三原への為替二百ミルレースを送る。其の旨電報す。

食後収容所に至る。鉄道人夫の契約を終る。午後三時帰

宿。

鈴木（貞次郎）三原万次郎に書面を發す。

夜、三浦通訳官、上塚代理人、後藤武夫、有川新吉、加藤順之助と演技を觀る。

八月卅日 半晴 日曜

此日雹降る。

イツーの耕地書記来り沖縄移民の当病院患者を見舞う。
懇切を極む。

此夜成川技師来聖。

八月卅一日 晴 月曜

此日、終日收容所に消す（ママ）。

（鐵道工夫として四十二人出發）

九月一日 晴 火曜

此朝鐵道工夫となるもの四十二人作業地に出發す。

九月二日 晴 水曜

此日收容所に至り工夫明朝出發の事に決したる事を告げ
歸る。

此夕發車の汽中にてリオに歸る。

熊本移民耕地に就を拒むにあり、三浦通訳官、成川、小林技帥懇切説諭により、ようやく無事なるを得たり。

九月三日 晴 木曜

午前八時「リオ」に着す。此日恰も煙火の初日に当る。公使夫人及伊丹少佐とリオ市に下りて在り、往訪、聖市の事情を述べ、館員派遣を謝す。煙火成績可也、安慰する処あり。

(以上)

笠戸丸二船員の脱走

海中に空ダル抱えて飛び込む

あすはあすの風が吹く―と世界を股に流れ歩くマドロス気質の天野某は一日本船に乗組んでいたが、シンガポールで脱船した。ちょうどそのころブラジル移民を乗せた笠戸丸が一九〇八年五月十日シンガポールに寄港したとするや彼はコツソリと同船に忍びこんだ。すぐ発見されたが、船員同志の仁義というか彼は船倉にかくしてもらった。

シンガポールを出帆してから三日後にこの密航事件が舶長に知られた。"船中には遊んでいる人間は置けない"と

いう意見で天野は火夫の仕事を与えられた。

かくして笠戸丸は憧れのサントス港に到着したが、脱船癖？の天野はここでも脱走、サンパウロ移民収容所に逃れたが、追跡する高級船員のために捕えられてしまった。

そうして天野を乗せた笠戸丸は帰路リオ・デ・ジャネイロに寄港したが、当時リオでは沖に停泊した港のちらちらとまたたく灯をみてまたむらむらと脱船の気が起きてきた。

こんどは同志がいた。天野は水夫の根岸誠一と夜間脱船を決行空だるを抱えて海にとびこんだ。七月六日のことだった。グワナバラ湾は一五〇二年アメリコ・ヴェスブシオが発見した時は、湾口を河口と見誤りリオ・デ・ジャネイロと名づけたほど潮流のはげしいところであるが、兩人はそんなことは御存知ない。一生懸命に陸に向つて泳いだが湾外へと流されるばかり、ついに溺死一步前でブラジル水上警察の巡視艇に救助された。ブラジル官憲はこの不正入国者を保護して一まず笠戸丸移民のいるサンパウロ市へ送りとどけた

その後の二人は怎么样了か？八月二十五日ヅモント耕地から引上げてきた広島県人来原夫妻はサンパウロ移民収容所で働くこの二人をみて再会のなつかしさを語り合ったという。

その後天野某は便船を利用して再び船乗りとなりブラジルを去つたといわれる。

一方根岸誠一もいまだにその消息は判らない。

笠戸丸船員のその後

笠戸丸乗組船員で日本で生存している人で現在判明しているのは一等航海士村尾武（神戸市）、事務員長谷川長和（神戸市）同？、大原政蔵（横濱市）の三氏。故人となった人は船長A・G・ステーブソン氏（英人）、機関長飯島巽氏、事務長布施謙蔵氏、船医草間某氏、通訳金澤一郎氏、火夫長横山清蔵氏（一説では賄長ともいわれるが、船中における傷害事件の犠牲となって死亡・サントス基地十五番に塊葬）ブラジルで生存判明している人では△高級船員付ボーイ福原庄五郎さんがリオ日本公使館の使用人として上陸、現在六十八才でリオ市に住んでいる（新潟県入）△水夫八木伊勢吉さん、サントスで脱船しパラナ川マンドブリリールで七十七で健在（鹿児島県人△水夫根岸誠一さんリオで脱船上陸以来生死不明、生きておれば六十八才になる。

△火夫天野某さんリオで脱船、一九〇八年八月にサンパウロ移民収容所で炊事の手伝いをしていたが、生死不明。

△火夫ヨツイ某、火夫長を殺害、サントスで脱船七月二十

二日にゴザを抱えて移民収容所に姿を見せた『どうするつもりか』とたずねた香山六郎氏に『なんとかありますよ』と平然としていた。その後の消息は不明。

悲しき恋も乗せて・・・

笠戸丸サントスに着く

第一回移民を乗せた笠戸丸は感激と興奮のうちにサントスに着いた。その出発から到着までには船中でいろいろな出来事があった。笠戸丸を出迎えた先駆者の一人が描く当時の模様。

鈴木貞次郎

供託金が足らず

移民の所持金拝借

笠戸丸が日本を出発するために色々な困難があった。第一に法令による外務省に供託する十万円の金が纏まらなかった。四苦八苦の末八万円だけ金策して、これ以上どう

にもならないと石井通商局長に泣き付いて漸く勘弁してもらったのはよかったが、神戸を出帆する雑用の金に行きつまった。然し窮すれば通ずで思案の果てに気付いたのは移民の持参金を借り出すことであつた

「船中に金を持って居ることは危険だから移民会社に預けたまえ。サントス着と同時に払い戻してやる」

成程これは理屈である。沖縄・鹿児島、口の三県の移民達から合計七千六百七十五円の預金せしむることに成功した。

神戸―サントス間の航海が約二カ月間を要するので、その期間に留守役の土井権太等が金策をして送金するという予定であつた。

かくて多難な皇国殖民会社の移民七百四十一名を載せた笠戸丸が神戸を出発したのが、明治四十一年四月二十八日午後六時に五分足りない黄昏近い海湾の水波に摩耶の山影がちらちらする頃であつた

笠戸丸は日露戦役当時バルチック艦隊所属の病院船カザリン號（六千噸）である。この対島大海戦の記念品を東洋汽船会社が海軍省より払下げたものであつた

その頃の日本人の航海技術が未だ世界に認識せられて居なかつたので、海外航路に使用される船舶の大部分が外国人の船長であつた。笠戸丸も又お多分にもれず船長は英人A・G・Stevensであつた。

チップが貰えず

下級船員不穩

日本が見えなくなる頃から船内に何となし不穩な空氣が漂い出した。それも移民側からでなく、下級船員達によつてかもされる風であつた。

水野龍は既述の如く、辛じて笠戸丸を神戸から出帆させた位であるから懷中殆んど無一物といつてよかつた。従つて下級船員に対する心付をすることは不可能であつた。これは欲せざるにあらずり、まことに余儀ない窮境にあつたわけである

しかしその頃は未だこういう人達に一杯買うという習慣があつたのであろう。水野の懷工合などは彼等の関する処でなく金一封さえ頂戴すれば満足なのである。

彼等は不平満々として水野の周辺に注意の眼を見はつていた。

恰もよし、たそがれ染めて来ると、判を押した様に甲板の手摺に悄然と倚りかゝっている一女性があつた。彼女の眼は何時も盛り上つては消え行く海波をじつと魅れる様に見つめている。時としてすゝり泣く様な音も聞えてくるのである。

一体この女性はどんな深い悲しみを持っているのである

う？ 海員達は『これだ』と手を打って喜んだ。まもなく笠戸丸の隅々迄こんな噂が拡ろまった。

『あの一等室にいる二人の女は水野がシンガポールに着くと売り飛ばしてしまうんだ。かあいそうじゃないか あんなにして毎日泣いている女を見たまえ』

といいふれたことである。又こうも噂をした。

『水野は移民屋だからね。お前等もいつて見ればブラジルに売られて行くんだ。移民屋などは血も涙もない動物さ金にさえなればいゝんだ』

こういう故意による宣伝は、その眞偽は別として笠戸丸八百移民の噂の種子となり、不安の念を起さしむるに充分の効果があつた。

仁平夫人の悲戀

意中の人 香山青年

一等室にいる女性は何れもシベリア經由でブラジルに先行した通訳の妻君達であつた。一人は松子といつて大野基尚夫人、もう一人は綱子と呼ばれ仁平高夫人であつた。何れも新婚一カ月位でまだ恍惚として美しい夢の連続を追う人達でなければならぬ筈である。しかし人間の運命は必ずしも定規で割りきってしまうことは不可能である。二人の女性の内の仁平綱子夫人こそその割りきれない不幸な

運命を持つ一人であつた。まさしく、毎夕甲板の手摺に寄りかゝつて泣きぬれている女性がそれであつた。

綱子の姉は教育家で本所区選出の市會議員に嫁していた。彼女はこの姉の家から女学校に通学していた。多分虎の門の女学校でもあつたろう。通学のその日その日にどうしても日比谷公園を横ぎらなければならなかつたのである。

或日彼女は音楽堂前のベンチに腰掛けている一人の青年を発見した。色の浅黒い如何にも男らしい青年だとは思つたが

その日はただ軽い気分で見過ぎしたが、何時も彼女の通る時分に、彼の青年は同じベンチに腰掛けて、大方はうち向きがちにしていたが、時としてうつろな顔をしてじつと大空を眺めている時であつた。

『彼の青年も私の様に孤独な人であろう』

綱子はこう思うと、段々心に一種の魅きつけられるものを感じ出した。若し彼の青年をベンチの上に発見しない日などは、何ともいいしれぬ物足りなさを感じて終日憂鬱で気が晴れなかつた。

これが恋というものでもあろう？、綱子は自問したが、いや口もきいたこともない、素性も名も解らない青年に對して恋するわけがない、と否定して見ても、何かしら心の奥底に恋だ恋だと私語する様なものを感じた。

時は矢の様に流れて、彼の青年がベンチの上に腰掛けて

居ない日がつづいた。

昨日も今日も、又明日も発見することが出来ないだろうと思ふと気が狂いそうな淋しい遣瀨ない日々であつた。彼女はひそかに出来る丈の手をつくして青年の行衛を探つた。彼はただ海外に待つたという漠然たるものであつた。

とかくする内に彼女に結婚問題が起つた。相手は南米ブラジルに移民の通訳として行く外語出身の仁平高という青年であつた。彼女には何時迄も姉の家に厄介になつて居られないという事情もあつたし、失恋の傷手に対するヤケ半分の気分はこの見合結婚を急速に進行させたのであつた。

あわたゞしい新婚生活も一カ月たらずで、夫仁平はシベリア經由で渡伯し綱子はその後を追うて移民船笠戸丸に乗船すべく神戸にやつて来た。

何という皮肉な運命であらう。彼女は忘れんとして一日も忘るゝことの出来なかつた日比谷公園のベンチに腰掛けていた青年を集合した移民の中に発見したのである。彼は海外に行つた筈でないかと彼女は自らの眼を疑つた。その太い眉、その輝いた眼、その引きしまった唇、まさしく彼の青年と瓜二つである。それは誰あらう香山六郎その人であつた。小説より奇なる現実を体験して彼女は只々呆然たる外なかつた。

どうにもならない後悔丈に、悲しみが一層深刻に彼女を責めた。

かくて彼女は甲板の手摺に身をもたせながら、遣瀬ない
煩悩に泣きくずれて自らの身をさいなむのであった。それ
がせめてもの慰めでもあり、生きる希望の灯でもあった。

移民たちの“夢”

金の成る木『珈琲』

別に颱風もなく支那海の波も穏かであったが、笠戸丸は
内面に不穩の気をはらみつゝシンガポールの沖合に碇泊し
たのは五月十日であった。移民屋の水野に売りとばされる
はずの大野松子と仁平つな子の二人は上陸もせず、依然と
して航海をつゞけるのを見た移民達は初めて海員達のうそ
八百な宣伝であつた事をさとつた。

移民達は移民募集人の宣伝を信じて、誰れも彼も皆大き
な夢に酔っていた。その或者は五年稼いで五万円持つて戻
るといえば、他の一人は、いや俺は十年居つて十万円儲け
る迄は帰らないと頑張つた。

もうそうした大金を握つた様な風である聖州新報の「在伯
且本移植民廿五周年記念鑑」に熊本県人藤本末人は

『此柳行李に一杯紙幣を入れて、故郷に戻つて見たい』

と蚕棚の様なベッドに寝そべりながら呟いたと書いてい
る。今日の人から見ればまことに阿呆らしい甘い夢である
が、彼等八百人の移民の夫々に描く珈琲は金のなる木で一

日に五円、十円という金が転がり込んで来るということは現実性のある夢であつた。一步一步というよりも一波一波といった方が適切である。彼等は夢の國ブラジルに近づいて行くのである。

高桑勢人はその頃日本に流行つたラツパ節を作つた。

チエテ河畔秋更けて

今宵も出て来し弦月に

影と二人でたたずみつ

故郷偲べば蟲の聲

トコトツトツト

もう一つ

涼風通う珈琲園

昼の疲労をやすらえば

遠の笛の聲床しくも

月さえ出て来る夕かな

トコトツトツト

香山公孫樹（六郎）も負けては居なかつた。

流千里のアマゾンの

岸の大木を伐り払い

筏造りて日の丸立てゝ

隅田川まで流したい

トコトツトツト

これを唄って、移民達は笠戸丸甲板の上に月夜となく暗夜となく熊本は熊本ので、福島は福島の御国風の踊をおどった。まことに笠戸丸の前途は洋々として大平の氣にあふれていた。

水野氏への反感が

殺人事件を起こす

これに反して海員達の水野龍に対する悪気流が一層激しくなつて行つた。人一倍苦勞し、旅もした水野に海員達のことした眞意を察知し得ない訳でないが、無い袖はふれないという諺の如く、どうにもならない事であつた。六月四日ケープタウンを出港した頃から海員達はますます無遠慮に反抗気分を示し、甲板の上にあるサロンの高窓から

『おい、お前は移民の血を吸う畜生だ！』

と叫んで椅子に腰掛けている水野の坊主頭に青痰を吐きかける者があつた。笠戸丸が刻々とブラジルに近付いて行くことは益々水野に対する海員達のデモンストレーションが激化することであつた。

笠戸丸がサントスに最早三日を余すに過ぎない六月十六

日夜のことであつた。

海員達は無難な航海を祝う様な意味で酒宴を開いた。海員と喧嘩はつきものである。泥酔の結果刃傷事件を起すに至つた香山六郎の『移民四十年史』によると、機関部員の酒癖の悪い一火夫が短刀で火夫長の脾臓を突いたというこゝとなつてゐる。二人の姓名も喧嘩の原因も書いていない。解らないのであろう。当時私のきいた事は全然これと違つてゐる。まさかこの様な出来事を私の手で書く様な場合があろうとは夢にも思い及ばなかつたことでもあり、移民収容所の仕事で早朝から深夜迄忙殺されていた時なので深くきゝたゞすことが出来なかつたので、私は必らずしも私の頭にある聞きかじりがたゞしいとは主張しないが、記憶にある丈のことを書いて見る。

海員達の酒宴が酣なるに従つて水野を遣つつけろという気声が高まり、酒癖の悪い水夫（か火夫かは判然しない）が猛然として立ち上り、甲板に飛び出して一等客のサロンの梯子段に下りかゝつた所をコック長か、何んでも料理の方に関係のある一人が大手を広げて止めた処を刺されたということであつた。今日になつて見れば当時の船長は英人のことであり布施事務長も故人となつてしまつた後の事で笠戸丸の航海日記なども発見されないし、氣の毒にも殺された人も、殺した者も、何の原因で発生したのかも、判然と知る由もない。香山六郎の『移民四十年史』の如くし

て起った刃傷沙汰とせば、さほどのこともないが、私の聞き知っている事が真相とせば、移民史上の一挿話として聞き捨てにならない事である私は何とかして其の殺された人の名だけでも判然させ度いものと、わざわざサントスに行つて二日がかりで探索した。

被害者がサンタ・カーザで亡くなったというので、先ずサンタ・カーザに行つたが、その索引が年代によらず姓名のABC順になっているということ、姓名の解らない限り五十年間の死亡者の内からその人を発見することは数日を要するから不可能といつてよいことであつた。一日本人の死亡者を探すためにその様なことはいうべくして望む能わざることであろう。諦めきれない私は犯罪事件であるから或は水上警察に何等かの記録がありはしまいかと、行つて見たが、それも無駄足に終つた。最後に或いは当時の新聞記事になつている様なこともあり得ると、トリブナ社を尋ねたが、その頃の新聞は三十年革命で焼かれてしまつて無いが“Humanitaria dos Empregados Mercios”はあるだろうとのことで、そこに行つたら新聞はあつたが、刃傷事件の記事などは一行も発見されなかつた色々考え抜いた挙句、再びサンダ・カーザに行つて当時死亡者のあつた場合に登記するカルトリーオ（登記役場）の名を聞き取つて、そこに行つて見た。オフィシアルのドクトル・ジヨゼー・カント氏

に逢って事情を話し、漸く見当つて、死亡証明書を書いてもらった。それによると職業は『移民四十年史』の水夫でなく *Despenseiro* つまり舵の医療部員となっている。姓名は S・YAKAYAMA とある。Y でなく N だろう。日本の名に ヤカヤマ など、いうものがあり得ないから ナカヤマ だろうから、よく見てくれといったが Y に相違ない。死亡したのが 千九百八年六月二十二日午後十時、死因は心臓麻痺、五十五歳、死んだ場所が サンタ・カーザでなく 笠戸丸船内となっている。

死亡証明を書いた医師の名は ドクトル・ルイス・デ・フアリア である。

この刃傷事件の起つたのは サントスを去る 七百マイル位の海上であつたので、恐らく警察権が船長にあつた事でもあり最初の日本移民に対する好意が、ブラジル側の官権者を動かして事件を余り表面に出さず、笠戸丸布施事務長からの袖の下などの効果もあつて、今日から真相を探ぐり出せない様なことになってしまったのは悲しむべき事といつてよい。恐らく何人もこの事件をこれ以上に探索することは不可能であろう。

「日の丸」への感激

笠戸丸到着す

色々な悲喜劇があつたにせよ、笠戸丸は一人の死亡者も出さず千九百八年六月十八日午前九時半サントス港内に入つて埠頭前に仮泊した。

笠戸丸の着伯を予定してペトロポリスの日本公使館からサンパウロに来ていた三浦象次郎通訳官と私とは移民収容所への打電によると笠戸丸のサントス入港を知り、ルース停車場から汽車に乗った。

同行者に皇国植民会社代理人ラファエル・モンテローと藤崎商店員後藤武夫があつた。四人の胸に第一回移民を迎えるに就ての色々口に出していえない違つた思いは我達を無口にした。二時間余の汽車の走るのがじれつたい程遅かつた。サントスに着くと走る様に埠頭にかけて付けた

待望の日本移民船笠戸丸！、Jこんな平凡な言葉ではないつくせない様な風情をもつて私達は埠頭前の静かな海上を見つめた。

居る、居る、笠戸丸は日章旗を船尾に翻して、赤く染めか六月の夕映えの下に仮泊していた。快適な汐風が私達の心か撫でるように笠戸丸の方から吹いて来たそれは日本のほのかな香をふくんでいるような潮のかおりであつた。何もかも夢であり夢中であつた。四人は舳に乗つて笠戸丸に漕ぎ付けた。

三浦通訳官と私は別状なく笠戸丸に上船することが出来たがり モンテローと後藤とは一旦拒否されたが、しばらく

くして上船を許された。その交渉のもどかしさ腹だたしさ、私達を迎えんとする水野、上塚を取り巻いて群集している移民達は好奇の眼を輝かしている。そのごたごたした騒ぎの内に突入して行く私は汗を流していた。

金のなる木の珈琲園を眼前にして八百の移民達は皆興奮のルツボのなかに陶醉しているのである。サン・ジョンの爆竹がぼんぼんと空に快よい爆発の音を立てゝいる。無数の風船がゆらりゆらりと山の方へ市街の上を笠戸丸の上を吹き流されて行く、六月はブラジルの祭月でこうした習慣があることを知る由もない移民達は感嘆して大空を見上げてブラジル国民が彼等を歓迎していると思っている。

万歳！ 万歳！

笠戸丸が動き出して第十四號岩壁に横着けになったのは、まさに五時半で、新月が山の上に化粧した舞姫の眉の様にかゝっていた。（終り）

“生ける移民史”

鈴木貞次郎民の横顔（コラム）

“生ける移民史”である。笠戸丸第一回移民より三年前の一九〇五年（明治三十八年）十二月チリー渡航を目指して米舶グレンファーク號で出發した（民間人としてチリー渡航の旅券を下付されたのは同氏が最初）。海外に出た動機は失恋だと伝えられている。船中ブラジル移民契約のため渡伯中の水野龍氏と相識りブラジル行きに変更し、水野氏とともにチリー滞在一カ月にしてペルーからロバの背にまたがって雪のアンデスを越えアルゼンチンを経由、翌年三月ブラジルに着いた。着伯後は杉村公使、三浦荒次郎通訳官の斡旋でリベロン・プレート駅チビリツサ耕地に“日本移民の見本”として入耕、日本移民がコーヒー園の労働に適することを身をもって示し、その体験とコーヒー耕地の実情報告は日本移民誇入の貴重な資料となった。

第一回移民のサン・マルチンニヨ耕地（パウリスタ線マルチンニヨ・プラード駅）に配耕された組の通訳をつとめた。一九一一年、農相ペードロ・トノード氏の紹介でアマゾン州知事ロドルフォ・ミランダ氏を訪れ、日本人植民地をつくる目的でアマゾン河を遡航した日本人がアマゾンに足跡を印した最初である。その紀行記『アマゾン河を下航し

て』は東西朝日新聞に掲載され、日本におけるアマゾン認識が高まり、同紙の通信員に指名された。また聖州における馬鈴薯栽培の先駆者として知られている。モロンビー寺院の所有地を借り受け、馬鈴薯を栽培しサンパウロ市まで馬に積んで売りに出たが、これが後年馬鈴薯の産地となりコチア産業組合が生れる基となった。

一九一八年上塚周平氏の片腕となってイタコロミ―植民地の建設に当り、邦人移民をコロノから地主への独立の道を開きノロエステ線開拓に大きな功績を残した。現在サンパウロ市に居住。

蘭栽培を楽しんでいる。八十歳。「移民の草分け」「埋もれゆく拓人の足跡」などの著書がある。―



（写真はイタコロミ―植民地建設当時のもの）

六月十八日笠戸丸サントス入港

憧れのブラジルに第一歩

Ⅱサン・ジョンの花火を〃歓迎〃と感違い……Ⅱ

その日空は晴れ渡っていた。明治四十一年六月十八日午前九時半第一回移民をのせた笠戸丸はサントス港内に静かに仮泊した。検疫も至極寛大で全部通過した。サンパウロからは日本公使館の三浦荒次郎通訳官と聖州移民収容所日本人書記鈴木貞次郎、皇国殖民会社サントス代理人モンテイロ、民間人代表として藤崎商店員後藤武雄の四氏が移民出迎えのためハシケで乗りつけた。その日午後五時半。船はサントス岸壁に横づけされ翌十九日午前七時下船が始された。日本家族農業移民がはじめてブラジルの土を踏んだのだ。一同はそこに待機していた列車に乗込まされサンパウロの移民収容所へと向った。日本移民が汽車の窓から振る日の丸とブラジルの小旗は見物のブラジル人群衆を喜ばせた。

「一行を乗せた列車はやがてサンパウロ市へと發車した。列車の窓からみる眺望、峰から峰へのつらなり、瀧もみえた。深い谷、濃緑中に点々として黄、白、紫の花が咲いている景色は、エストランジエイロの旅愁を忘れさせた……」
こう第一回移民の香山六郎は「移民四十年史」の中で述べ

ている。

やがて列車はサンパウロ州立移民收容所の特別引込線へ入り一同は降りた。出迎えの收容所長、殖民局長などに混って日本人通訳五名もいた。收容所の大食堂で二回にわたって昼食が出されたが、バカニリヤウとバクチンエアの煮たものであった。"日本移民への特別ご馳走だよ"と移民の草分鈴木貞次郎さんの話であった。コーヒーとは苦いものだ……と日本移民たちは初めて知って苦笑し合った。收容所の二階のハシゴ段下に獣のように汚れ、疲れて寝そべっている幾組かの外人家族の群がいた、黒髪の美少女もいたがなんと気の毒なほど汚れ疲れている人だろうと、日本移民たちはささやき合った。「これが南欧移民だよ」と通訳の一人が説明した。

サン・ジョンの季節でパーンパーンと花火が夜となく昼となく絶間なく收容所の周囲の空にあがっていた。バロン（紙風船）もフワリフワリと空に流れていた。日本移民たちはサン・ジョン祭りのことなど知らないのです、これは俺らを歓迎してくれているのだと思ひ込んでいたという。

收容所の廊下で大入道のよりか黒人掃除夫が通るたびに日本婦人たちは、肩をすぼめてよけて通っていた。朝になるとニワトリの鳴き声が聞えてきたが、ブラジルのにニワトリも日本語で鳴いてるぞ……と日本移民にとっては見るもの聞くものが珍らしかった。水洗便所もはじめてお目にか

かったものの一つだった。

六月二十二日、移民の荷物検査があつたが、燃えるような緋絹の長ジユバンが柳行李の底からとびだして、税関吏に異国のエロティシズムを感じさせた。

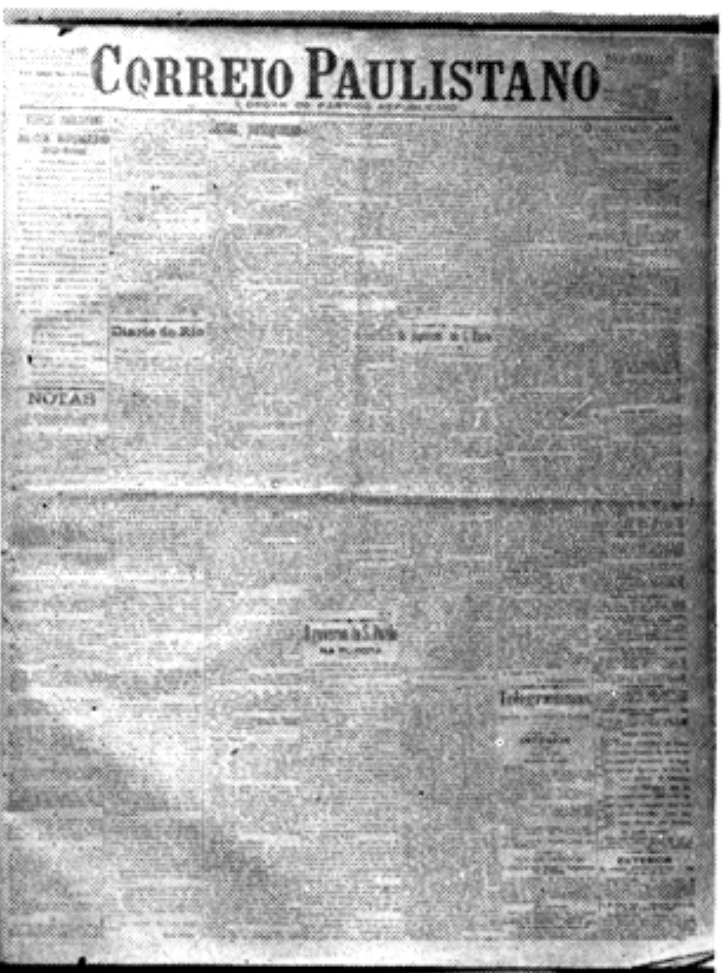
藝妓の肖像色つきの絹ハンカチが税関吏の手からヒラヒラとそのポケットに舞い込んでいった。彼らは至極朗らかでその検査ぶりもまた寛大だった。二十三日も移民の荷物検査が行われたが、南欧移民の荷物検査などには税関吏が立合うことなどほとんどないそうである。それほど日本移民は物持ちだと伯人の収容研員や税関吏を驚ろかした。

二十四日午前は細雨があり、雹も降った。午後一時から沖縄県人たちが外出を許され、耕地行きの買物に出かけた。

二十五日には沖縄県移民とコーヒー園耕主との間に就働契約が取りかわされた。この日鹿児島、愛媛、山口、新潟各県人たちが、二十六日には熊本、広島、宮城各県と東京府の人たちが市内へ外出を許され買物や見物に出かけた。

市街をぞろぞろ歩く日本婦人や子供の一団を市民が珍らしがつてラルゴ・ダ・セでは取りかこまれ二時間以上も身動きが出来ぬほどだったという。（「移民四十年史」より）

当つた五十年前の“予言”
日本移民ベタほめの伯字紙



笠戸丸第一回移民の到着を報じた当時の
コレイオ・パウリスターノ紙

第一回移民たちが入った移民収容所には農務長官カンジツ
ド・ロドリゲス氏をはじめ新聞記者や耕主たちの訪問で
通訳はてんでこ舞いであつた。

ブラジル人はこの新来の日本移民に対し非常に好感的であつた。と同時に日露戦争で世界の大軍国ロシアを破つた東洋の一小国日本からの移民というので、多分に好奇心も手伝っていた。

ブラジルで古い歴史を誇るコレイオ・パウリスターノ紙は六月二十五日の紙上で、この第一回移民のことを詳細に報じ、"清潔で秩序正しい移民"とほめちぎっている。

以下はコレイオ・パウリスターノ紙の記事問答であるが、この記事を書いたソブラード記者はその最後を「サンパウロの産業は、この日本移民によつて遺憾なく開發され将来当州一の産業は日本人によつて築きあげられるだろう」と結んでいたが、五十年後の今日、日本移民がサンパウロ州の産業に大きな貢献をしている事実をみると、このソブラード記者の"予言"は當つたといえよう。

整然たる秩序

第一回日本移民を輸送する笠戸丸はさる十八日サントス港に着いた。同船は神戸を出帆し、シンガポール、ケープタウンの二港に寄港し五十二日の航海を経て無事サントスに到着したものだ。その移民総数は七百八十一名で皇国殖民会社がサンパウロ州政府と契約した三千名のうちの初航海移民である。これら七百八十一名の移民は百六十五家族よ

りなり、一家族平均四名半に当り、単独移民は僅かに三十七名に過ぎない。小児および老人の数もまた甚だ少なく三才以下八名、三才以上六才まで四名、六才以上十二才まで四名、十二才以上の者七百六十五名ありこれらの者は農夫らしき頑丈な手もち明らかに労働に慣れたものであることを示している。

前記移民会社が勧誘した契約移民のほか十二才以上の者十一名、六才未満の小児一名合計十二名の自由渡航者があり、これらの者はいずれも旅費を自弁して渡伯したものである。会社勧誘移民七百八十一名中読み書き出来るもの五百三十二名あり総数の六割八歩を示し、二百四十名九は無学だと稱するが、全く文字を解せぬというのではなく、多少の読書力をもっているので結局眞の文盲者は全数の一割にも達していない。

これら移民は、東京、沖縄、愛媛、山口、広島、高知、新潟、福島、鹿児島、熊本、宮城の一府十県から募集されたもので、そのうち沖縄、鹿児島、熊本および福島の一府三県が多数の移民を出している。

いま移民総数についてみると、労働に適せぬ者が十六名あるが、これは僅かに全数の二歩に当り、しかもこの最少なる労働不能者は老人、または不具者ではなくやがて成人の後にはみんな一人前の農民となるべき小児なのである。

移民は十九日午後二時上陸し、同日サンパウロに到着した

が、彼らを輸送した笠戸丸の船室およびその他諸般の設備を見るとみなよく清潔を保っていた。これによって汽船会社が日本人労働者に対する待遇法の一般をうかがうことが出来た。

それだから日本船の三等船室は太平洋を往復する欧州船の一等船室よりも清潔だと評する者さえサントスで見受けられた

もしこれを聞いて疑いを抱く者があるだろうが、これは決して皮相の観察ではないことは次の事実を一読すれば容易にうなすくことが出来るだろう。

移民は移民収容所に入るに当り、秩序整然として列車から下り、少しも混雑の模様なく、またその車中を検査したらツバを吐いてある跡も一つもなく、果物の残存などの散乱したのも皆無で、観察者をして不快な感を起させるようなことは一つもなかった。

胸に動章つけて

かくて特別列車でサントスからサンパウロまで四時間の旅行をなした後、移民はよく静しゆくを保って列車から出て移民収容所の大食堂に入って食事についたが一時に入ることが出来なかったので残りの者は静かに廊下で交替を待っていた。

移民は男女とも洋服にして男子は鳥打帽その他種々なる帽子を冠り、女子は上衣とサイヤと連続した洋服を着て胴締めを用い、極めて簡単なる婦人帽をかぶり、装飾のある留針（ピン）でこれをおさえていた。美事にくしけづつた毛髪は、かつて見本画でみた婦人を想起させた。ただ絵画と異なる点は、大きなクシを用いていなかったことである。男女いずれも安價なる靴をはき、靴下を用いていた。彼らの中には三個の動苺をおびた者が一名見受けられたが、その一個は金製で、日露戦役の動功によって授けられたものだという。

（コレイオパウリスターノの記事）



また真鍮の頭をつけた竹軸の小旗をたずさえた者が多数い

たが、この旗は二個を一對として、その一つは日の丸で、他は黄緑色のブラジル国旗で、これらの移民はわが国民に対し敬意を表せんがため、日本において作つたものを携えてきたものである。なんと優美で高尚な心であろうか。

男女とも清潔な服装移民の着用した洋服はみな日本の大工場で作つたものだというが、洋服は一般に日本国中に普及しているようで、しかもその洋服はすべて移民が自費で購入したもので見るからに心地よき新調服の揃いである。また婦人は綿製の手袋を用いていた。移民は食堂に交替して食事を終え約一時間の後に各自に定められた室および寢室を見るべく食堂を出たが、驚くことには彼らの去つた後には一つのタバコの喫いながらもツバもなかった。もし他国移民ならば、たちまちにしてその居所はタバコのカラやツバでもつて不潔化したであらう。清潔と不潔との実に雲泥の差であるといえる。

移民は秩序正しく食事を終つたが、中には一時間あまりも食事が遅れた者もあつたが、いささかも喧騒したり不満の色もなく発着者の食事が終るのむ待っていた

移民到着の翌日種痘を行つたが、これまた規律整然として少しも臆え、もしくは忌避する様子なく種痘を受けた。このように一時に多数の種痘をするに当つて何ら騒がしくなく静しゆくに経つたことはいままで聞かなかつたことである。殊に彼らの多くは既に日本において再三種痘を経たる

者である。彼らは喜んで当国の食物を食べ、しかも胃腸をこわした者もなく、ただ感冒が原因で頭痛する者が十数名出たに過ぎない。

小粒だががん健な体躯

日本移民は概して頭が大きく体躯偉なるも脚短かく、十四歳前後の日本人は当国の八才前後の体格で、日本人の身長は、当国人の身長低い者にも及ばないが、往々にして当国人の中背のものよりも高いものがある。特に我々の注意をひいたのは彼らは肥ってはいないが、頑強な肉付きと強健な骨格と広い胸をもっていることで、こういったならば驚く人があるかも知れないが、これはウソではない。日本人は男女とも頭髮は眞黒で婦人においては殊にそれが特長である。

男子は頭髮を短かく刈り込み、中央又は一方より分け、ていねいにくしけずり、しかもその襟飾及び皮の厚い手とその対照を失っていない。彼らは熱心に我が国語を学ぼうとしており、又食堂では一粒の米、一滴の汁をも床の上に落したのも認めざるほど用意周到にしており食堂の床は食後でも依然として清潔を保ち食前と少しもちがわない。もし、まれに紙片やマッチのカラが散乱しているとすればそれは、収容所の給仕たちの所為で日本移民がしたものではない。

実に静肅なる彼らは好ましき良民だといえよう。

妻を信用する日本人

また夫が妻を信用することは我々の予想意外、で夫が熱心にポルトガル語の練習するのを妨げないようにと、妻は夫に代って日本貨を伯貨に両替えする。その美德はうらやましい。まして各自で十、二十、三十、四十、五十もしくは百に近い日本貨幣を妻に携帯させていることなど。

移民はしばしば風呂に入るので身体は甚だ清潔である。また清潔な衣服を着て、歯磨粉、揚子、舌搔き、クシ、カミソリなどを所持しており、ヒゲをそるには石鹼を用いずにとただ水をもって南部をしめすのを見た。日本移民の携帯手荷物は決して少くない。約八百名の人数で一千百個に達し、その多くは柳行李またはズツクの行李で一見労働者の行李とは思えない我国の労働者が用いるブリキ箱、コモ包みの荷物と比較するとき雲泥の差があるこれらの行李の中には歯磨粉、罐詰、食物調理用、醤油、薬草、被服、木枕、その他日用品、防寒用フトン、大工道具、一、二冊の書籍、書簡用箋入箱、スズジ箱、ハシ、扁平な小サジなどを収め、日本着としてはわずかに一小児の模様染めのキモノをみただけである。

手荷物はこのように多数であつたのに拘らす関税を課すよ

うなものは皆無で税関吏は二日にわたり検査を行ったが、少しも税関規定に反することは発見できなかったという。また税関吏の語るところによると、このように多数の移民がよく秩序正しく静かにその手荷物の検査を受け一人として隠すものがなかったことは、いまだかつて見なかったところである。

これら移民の清潔なことは既に述べた通りであるが、移民でこのように清潔で規律正しいものは未曾有のことである。従順なること半群の如く。やがてサンパウロ州の富源は彼らによって遺憾なく開發され、将来当州一の産業は日本人に負うところ大なるべし。

日本人種はブラジル人と大いに異っているが、決して伯人に劣れる人種ではない私はいまここに日本人に対する觀察を紀したに過ぎないが、彼らの活動如何はまだ知るに由なく、いま数えて論及することが出来ないのでさらに後日、この点については報道するであらう。

（終り）

希望に胸ふくらせて

コーヒー耕地へ移民出発

サンパウロ収容所生活ともいよいよサヨナラして移民たちはコーヒー耕地へ出発することとなった。ところが移民が出発する時になって移民会社側と移民との間に最初のゴタゴタが起きた。神戸で移民会社へ預けた金を渡せと移民たちが請求した。会社側は、その金はまだ日本から送金に着いていないから支払えないとつつぱねた。この会社側の態度で移民たちに不満の声が起り、殊に沖縄県民には一層不安がただよった。

沖縄移民代表の城間眞次郎氏は或朝、移民収容所に出張してきた水野社長の胸に突っかかっていった。水野社長は城間氏をつきとばしてそばの事務室へ避難した。この不穏の空気を心配した上塚周平代理人は、城間氏の前に頭を下げ「おれの首を切ってくれ」と差のべた。この上塚氏の態度には、さすがいきまいた城間氏もうつむいて、その場を立去った。結局、日本から金が届くまで待つより方法はない、と移民たちは会社代理人と妥協せざるを得なかった（香山六郎氏編「移民四十年史」より）

このような紛糾的一幕もあつたが、六月二十七日午前四時、沖縄移民の約半数は嶺昌通訳に伴われてカナン耕地へと汽

車で出発した。残り半分は同日少し遅れて大野基尚通訳に伴われてフロレス耕地へと出発した。同日午後九時には、熊本、福島、広島、宮城、東京各出身移民とゾーモント英人経営コーヒー耕主との間に労働契約が署名された。

二十八日午前五時には鹿児島、高知、新潟出身者たちが鈴木貞次郎、平野運平両通訳につれられてサン・マルチンニオ耕地およびグワタパラ耕地へと向った。

二十九日午前四時半発の汽車で熊本、福島、広島、宮城、東京の移民は加藤順之助通訳が案内してゾーモント耕地へ出発した。

リベロン・プレート駅ではこれら移民を音楽隊で迎えた。七月六日最後の移民たち山口、愛媛県出身者が仁平高通訳がつれてゾブラード耕地へと去った。

かくして六月十九日、笠戸丸が着いてから十六日目、第一回移民はそれぞれ耕地へ去った。配耕地へ出発の朝の移民たちの顔はさながらピクニックにでも行くような朗らかさで希望に満ちていた。

各耕地配耕、県別家族数および人員、通訳氏名

一、カナーン耕地 FAZ・CHANN

モジアナ線カナーン駅

通訳 嶺 昌（郡馬県）

移民一行は六月廿七日午前四時収容所出發

二十四家族 百五十二名（男一二八名、女二四名）全部沖

縄県人



嶺 昌

二、フロレスタ耕地 FAZ・FORESTA

イツエンセ線イツー駅

通訳 大野 基尚（大分県）

移民一行は六月廿七日午前四時収容所出發

二十三家族 百七十三名（男一四八名、女二五名）全部沖

縄県人 大野

三、



二才耕地

FAZ・SMARTI

N H O

パウリスタ線サン・マルチンニオ・プラード駅

通譯 鈴木貞次郎（山形県）

移民一行廿八日収容所出發

二十七家族 百〇一名（男七四名、女二七名）全部鹿児島人



鈴木貞次郎

四、グワタパラ耕地 F A Z ・ G U A T A P A R A
パ線グワタパラ駅

通訳 平野 運平（静岡）

移民一行廿八日午前五時収容所出發

二十三家族 八十八名（男六二名、女二六名）

鹿児島県 十八家族 六十七名（男四六名）

高知県 二家族 十二名（男一〇名）

新潟県 三家族 九名（男六名）



平野通平

五、ズモント耕地 F A Z ・ D U M O N T

モジアナ線ズモント駅

通訳 加藤順之助（茨木）

移民一行六月廿九日午前五時半収容所出發

五十二家族 二百十名（男一四四名、女六六名）

福島県 二十一家族 七十七名（男五三名）

熊本県 十九家族 七十八名（男五〇名）

広島県 九家族 四十二名（男三二名）

宮城県 二家族 十名（男七名）

東京府 一家族 三名（男二名）



加藤順之助

六、リブラード耕地 F A Z ・ S O B R A D O

ソロ線トレゼ・デ・マイ才駅

通訳 仁平 高（秋出）

移民一行七月六日収容所出發

十五家族 四十九名（男三〇名、女一九名）

山口県 九家族 二十八名（男一六名）

愛媛県 六家族 二十一名（男一四名）



配耕されたる家族 百六十四家族

配耕されたる人員 七百七十三名（男五八六名）

サンパウロに残留した家族 三家族 十八名（男一五名）

内 訳

兵庫県 鞍谷半三郎、妻イノ、父誠一郎、構成家族飯田又一

高知県 片岡治義、妻秀於、子光章

独身青年 長野鹿次、森勝利

鹿児島県 池上二次郎、妻美禰

独身青年 原口貞助、鮫島直哉

山形県 高桑治兵衛（鈴木貞次郎の血縁者）

長野県 矢崎節夫（アルゼンチン行旅券）

熊本県 香山六郎（ペルー行旅券）
山口県 沖川祐吉、松田宇一

各県人別家族数及び人員（男女別）

県名	家族数	男	女	合計人員	単独渡航者
兵庫	一	三	一	四	一
沖繩	四七	二七六	四九	三二五	一
山形	〇	一	〇	一	一
鹿児島	四六	一二三	四九	一七二	一九
福島	二一	五三	二四	七七	一
熊本	一九	五一	二八	七九	二
広島	九	三二	一〇	四二	一二
山口	九	一八	一二	三〇	一
長野	〇	一	〇	一	一
愛媛	六	一四	七	二一	一
新潟	三	六	三	九	〇
高知	三	一四	三	一七	二
宮城	二	七	三	一〇	四
東京	一	二	一	三	〇
合計	一六七	六〇一	一九〇	七九一	四六名

― 第一回移民 ― こぼれ話を拾う

移民周旋屋が大散財

Ⅱ 芸者をあげてああコリヤコリヤⅡ

第一回移民の香山六郎氏（元聖州新報社長）は皇国殖民会社代理人上塚周平氏と知合って同殖民会社の書記として渡伯した人。その当時ペルー国のゴム山に働く日本独身移民三百名の募集をしていた明治移民会社に應募していた香山六郎氏の旅券はペルー行きとなっていた。笠戸丸もこのペルー移民を最初に送り次にブラジル移民の輸送をするこ
とになっていたが、それではブラジルにおけるコーヒーの採取期に遅れるというので皇国殖民会社の申出でブラジル側を先にすることになったもの。

香山氏はブラジルでもペルーでもどちらでもよかったのである。要は海外に出たい一心だったので、先發のブラジル移民に合流しり旅券も変更され第一回笠戸丸移民の一人としてその人生航路の船出をしたという。

香山氏が乗船するため神戸にやってきた時、引率者一行は吉野屋旅館に本部を置いて、各元方から参集する移民を整理し、なお各県の移民募集代理人の報告と渡航者引渡し事務をやっていた

移民周旋屋である各県の代理人に、各県移民代表からその費用が手渡され代理人から皇国殖民会社払い込まれることになっていた。香山六郎、高桑治兵衛両氏が上塚周平氏の命でその清算に当たっていたが、収拾のつかない乱脈な清算報告で、勘定も合わねば金も足りないという有様だった。一生懸命に事務をとっているその隣室では各県代理人一行は芸者を呼んで大散財を夜に昼について展開、アーコリヤコリヤと踊り唄うという騒ぎで隣りの事務をとっている部屋を震動させ続けたという。

芸者や仲居連が事務部屋に現われて、

「あなた方は眞面目に働いているのに何という不眞面目な代理人さんたちでしょう」と、彼らの乱痴気ぶりに面をそむけていたほどの醜態ぶりであったというから、移民の中に二回も旅費を支払ったもの、預けた金を持逃げされる者、先祖代々の田畑を売って作った旅費を失って渡伯を断念する者が続出したのもうなずかれるわけだ。香山氏は、代理人の名は記憶より消えているが、鹿児島県は有川某、沖縄は林貞之助（平良松太郎さんの話）の二人だったという。このような裏話もあって、さて乗船してみると、移民名簿も應募申込み書類もないというでたらめさで、取締事務に大変な不便を感じたので、香山六郎氏が命ぜられて名簿をつくることになった。

そこで移民たちに旅券の提出を求めたが、これがまた誤解

のタネとなり問題を起した。沖縄出身者が、『殖民会社の奴等はいままでにも我々を何度もだまし金を盗んでいたが、こんどは俺たちの旅券を捲きあげて再度の金を要求する手段に違いない』と騒ぎ出して旅券提出を拒むものなどテンヤワンヤ：ようやく説得して了解させたという（香山六郎氏談。

付Ⅱ沖縄県人有銘兼徳（あるめけんとか）さんの話にも『恨みの記憶』として移民会社が沖縄県人から規定以上の旅費をとり、なお預金五十円（当時としては大金）まで巻きあげられたとある。

船中の殺人事件

Ⅱ 水野龍氏の身替りとなった火夫長Ⅱ

笠戸丸第一回移民がいよいよ待望のブラジルにあと三日したら着くというとき、船内で殺人事件がもち上った。火夫の一人が火夫長をフアツカで刺したのである。この事件は水野龍氏の航海日記の中にも次のように書いている

六月十五日 月曜日 快晴、この深更、悪火夫我を襲わんとして上級火夫のため遮ぎられ遂に上級火夫を刺す。さらに第一回移民橋口重正氏（故人）の日記中にもこの日の

模様が書かれている。

六月十五日、月曜日、快晴、本日午後二時より鹿児島県人団の社会行列あり、甚だ滑稽なる行列なりし、午後八時高知県人団は歌舞伎芝居あり

佐倉そう五郎一幕も忠臣蔵一幕。一等客室にも芝居ありし由。(不明)と最も面白かりし由、午後十時半頃汽関部にケンカありし由、腹部を切られ命も危き由、朝始めて知りたりでは、この殺人事件は何が原因で起きたのであろうか。

水野龍氏の日記の「我を襲わんとして：」とあるように水野龍氏に対する反感からだった。その間の事情を当時の生存者の記憶から引きだすと、第一の原因に移民側と下級船員との間に不和の気分が生じていたことで、それはお客である移民が八百名近くも乗船したため船員の居室が極度に狭められた不満を抱いていた。

その上永い航海中旺盛な精力をもてあましていた船員が特に理性に乏しい下級船員が移民の娘や人妻を問わず接近して時々暴々しい行為に及ぶため、家長やその他の男子たちは船員から女性を遠ざけ警戒し、夜間は女たちが甲板に出ることを禁じていたほどであった

船員中でも火夫たちはこれが不満で、

「おれたちをバカにしている」と移民を憎み、ひいては引率者である水野、上塚両氏に対して反抗態度を示し、仕事の休息時間になると一等船室に近づいて、二人を殺してやる

と騒ぎたてるほどであった。こういう気分をさらにあふりたてたものにもう一つの原因がある。笠戸丸にはシベリア鉄道でブラジルに先發した通訳の大野基尚、仁平高両氏の妻二名（大野松子・仁平綱子）が乗っていた。仁平綱子さんは香山六郎氏と恋仲となったが、ブラジルに夫が待っている人妻としての悩みに日夜船室で泣き暮れていた。この妻を船員が丸窓から眺めて「一等船客の水野と上塚は二名の女を監禁してもてあそんでいる。女たちはそれを悲しんで泣いている。多分ブラジルに連れて行き奴隷にでも売るんだろう」というウワサを流したため、下級船員たちは「ヤロー、ひどいことをする。彼らに人妻を自由にさせるくらいなら、俺たちで奪い、助けてやろう」と騒ぎ出す仕未であった。そのため水野、上塚両氏は上級船員からも身辺の危険を注意されており、「もし俺たちが殺されるようなことがあった場合倉は、移民を無事にブラジルに送り、各配耕地に落着けるよう努力してもらいたい」と香山、高桑両氏らに遺言していたほどだった（香山六郎氏談）。

かくして事件の十五日が来た。いよいよあと三日でサントスに着くというので、船中ではお別れの催しがあり、演芸会の開催や、御馳走が沢山ふるまわれた。移民たちも酔っってしまった。そのうちに一人の火夫が「移民の女を権勢をもって独占する水野を殺す」と立上ったので火夫長がこれをなだめたところ、いきなり水夫用のフアツカで火夫長の

腹をつきさし重傷を負わせた。

その模様を笠戸丸渡航者福原庄五郎さん（笠戸丸士官付ボーイであつたが、帰途リオに寄港した際下船し駐伯日本大使館の傭人となつた。現在リオ市ルア・ドス・アンドラーデ九六番居住、伯人婦人と結婚三女がある。六十八歳）の話によると、刺された火夫長は飯食直後だったので傷口から食べたものが出て惨憺たる有様だった。

この殺傷事件で水夫間に不穏の空気がみなぎつたので士官たちがピストルを持出し鎮撫につとめ一時はおさまつたが、火夫側は満足せず、その夜八時頃二名の水夫が日本刀を持って二等運転士の部屋を襲つた。一名が士官を呼びだし、出てくるところを斬りつけるつもりであつたが、振りかぶつた日本刀の先が戸口の上に引つかかり、士官は危く助かつたという。

この殺人犯人の火夫の名は、第一回移民来原又吉氏の話では「ヨツイ某」となっており、香山六郎氏によると「関某」だという。

この事件は一九〇八年六月十九日（金曜日）発行のサンパウロ市コレイオ・パウリスターノ紙に次のように簡単に報道されている

Santos

Imigrantes Japoneses | ○ Va
por Kasado Maru | Tentativa
de assassinar a bordo.
Entrou hoje neste porto o va
apor Kasado Maru, trazendo
os primeiros imigrantes Japa
poneses que eram esperados
odia 24. Comandante do vap
or Japonês entregou a policia
o foguete de bordo JORO
LICILIZO que no dia 15 do
corrente, em alto mar, esfa
queou o seu compnheiro

MAKAKUMA TUPUMAGA;

刺された火夫長横山清蔵はサントス着後サンタ・カーザで
死亡、サントス墓地五十番に埋葬された。日本へは心臓マ
ヒによる死亡と報告されている。

（この死亡証明書を書いた医師の名はドートル・ルイス・
デ・フアリア氏、一九〇八年六月二十二日午後十時死亡、心
臓マヒ、五十五歳 || 鈴木貞次郎氏の話）

なお、犯人の関某は早速監禁されたが仲間の援助でサント
スで脱船逃亡、その後行方は判らない。
伯国沿岸五百哩以上離れた海上で起きたこの事件に伯国官
憲はあまり関心をもたなかったようだ。
そして五十年の歳月はすべてを忘却の彼方へと押しやつて
しまった。

配耕地別移民氏名

▲印は家長 ◆印はその妻 ※印は現在生存者

〔一〕カナーン耕地 (二四家族 一五二名)

県名	郡名	姓名	
沖縄	中頭	玉城 仁王	▲
同	同	同 カマ	◆
同	同	屋 宣加那	
同	同	新 屋 亀	
同	同	金 城 武一	

同 同

同 同

同	宮	同	翁	澤	銘	同	外	嘉	新	仁	※	玉	同	大	※	新	末	金	島	同	吳	又	玉
同	里		長	岷	苝		山	牛	川	念	仲	那		城	名	城	吉	城	袋		屋	吉	那
ウ	盛	仁	三		直	カ	加	加	善	仁			ナ	仁	釜	尚	徳	睦	五	ウ	仁		覇
ト	秀	要	良	蒲	通	メ	真	那	助	牛	蒲	亀	ベ	牛	助	助	兵	仁	郎	ト	和	亀	太



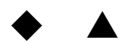
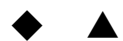
（名嘉文五郎）



同 同

同 同

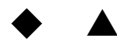
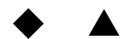
同	※ 比嘉	新垣	同	同	同	同	比嘉	※ 古波蔵	※ 城間	※ 安里	古波蔵	同	佐久間	喜屋武	亀山	神田	天願	※ 同	田場	崎間	松本	渡久地	澤岬
カ			同	三	加	カ			鍋	宇		カ		加	朝			ウ	蒲			政	太
メ	牛	山	亀	良	那一	マ	山	亀	喜	志	亀	メ	亀	那	伸	蒲	蒲	シ	戸	亀	松	人	郎



同 同

同 同

同	新垣	同	同	喜屋武	同	同	比嘉	同	新垣	同	比嘉	同	新垣	比嘉	同	同	同	同	新垣	同	同	同	同
カマ	亀	蒲	亀三	蒲	加那志	マツ	松助	蒲	蒲戸	山	松	カメジヤ	松	牛	蒲	松	亀	カメジヤ	蒲戸	蒲戸	宗疋	蒲盛	蒲



同 同

同 同

						※				※					※								
同	高	石	金	同	島	池	比	山	大	宮	島	同	宮	大	玉	※	比	同	新	山	宮	新	城
江	洲	原	城		袋	原	嘉	入	城	城	袋	カ	里	城	城	同	嘉	里	内	城	垣	間	
義	義	昌		カ		次		端	朝	伊	利	マ	龜		加	徳	光	カ		次	善	宇	
延	勝	三	徳	マ	蒲	郎	蒲	立	義	八	孝	ト		龜	那	松	永	マ	樽	樽	郎	良	志



同 同

同 同

宮城松助	新垣松数	兼城松	宮城加那	儀保マカト	儀保蒲	伊波加那	伊波加那	當間嗣亀	大城松	※同カメ (中宗根姓)	島袋三良	島袋徳	伊波亀	同ナベイ	島袋松	同牛	同蒲	仲宗根蒲	同ツル	吉元三良	高江洲義好	島袋利蔵	池原文鳳
				◆	▲						▲		◆	▲					◆	▲			

同 同

同 同

前	吉	※ 栄門	※ 同	※ 平安	城 間	※ 宮平	同	同	金 城	山 田	※ 仲宗根	古 謝	饒 波	同	崎 山	知 念	奥 間	同	同	知 念	同	中 宗根	平 戸
川	濱		カ メイ	名 次郎	米 蔵			カ マド	太 二	三 良	蒲 助	三 良	必 達	カ メ	並 吉		政 延		武 太		カ メ	牛	山 戸
益	那	松				松	亀											蒲	太	浦			



同

同

古謝國禎

〔二〕フロレスタ耕地（二三家族 一七三名）

県名

郡名

姓名

沖縄

島尻

同

同

城間

眞次郎

同

同

同

カメ

同

同

※同

鉄夫

同

同

神里

妻平

同

同

大城

武一

同

同

※比嘉

仲直

同

同

※城間

佐一郎

同

同

同

カメ

同

同

長嶺

加那

同

同

瑞慶覧

長義

同

同

上原

山

同

同

金城

由三郎

同

同

同

カメサ

同

同

※同

ウシ

同

同

同

代三郎

同

同

大城

俊一郎

同

同

※金城

善助

同

同

同

才サ

同

同

同

才サ



同 同

同 同

大	同	新	赤	興	※金	※興	同	金	仲	(赤嶺供儀身代り渡航)	仲	※	金	同	金	大	宮	大	宮	※新	儀	同	大
城		垣	嶺	座	城	座		城	座		村	同	城		城	城	城	城	垣	保		城	
亀	マ	茂	蒲	音	儀	敬	カ	彦	健		渠	山	庄	カ	万	照	真	幸	栄	美	蒲	實	判
三	カ	一		六	平	三	メ	助	徳		孫	戸	内	マ	助	太	吉	樽	良	三	太	太	四
郎	ト					郎					徳			ト		郎				郎	(イツパチ)	郎	郎
	◆	▲					◆	▲						◆	▲								

まことに珍妙な日本語チャンポンのブラジル語だが、彼

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
外	※	※	新	大		大	赤		※	知	具	大		嘉		玉
間	同	大	垣	田	同	城	嶺	同	外	念	志	田	同	数	同	城
長	カ	幸	カ		良	宗	喜	ミ		次	章	向	カ	亀	真	禮
信	メ	喜	マ	亀	宗	人	佐	ト	亀	郎	七	雪	メ	一	吾	平
	◆	▲						◆	▲				◆	▲		

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同

沖繩

[illegible]

島尻

金	新	安	伊	新		知	照	知		大	仲		宮		照	宮	儀	新	外		同	同	大		金	大	宜	新	大	大
城	里	谷	良	皆	里	同	念	屋	念	同	本	同	同	城	同	屋	城	間	垣	間	同	同	城	同	城	城	保	垣	城	城
孝	南	興	成	三	五	松	堅	南	立	德	恭	真	誠	カ	堅	仲	眞	平	蒲	龜	文	蒲	盛	盛	保	弘	蒲	加		
八	吉	元	貞	良	郎	八	仁	德	藏	郎	光	翁	樹	孝	マ	喜	盛	享	太	戶	代	卜	戶	四	吉	吉	齋	龜	戶	那

[illegible]

沖繩

國頭

比嘉永那松

同同嘉

神山眞永

宮里德助

岸本富一

宮平松吉

同同カメ

比嘉善太郎

山城武太郎

比嘉松助

玉山登嘉

山城保太郎

山城利三郎

宮城宗貞

嘉陽マス

同同源

比嘉梅助

同同秀吉

島袋徳次

宮城善五郎

松田貞七

〔三〕サン・マルチンニオ耕地

(二七家族 一〇一名)

縣名

郡名

姓名

鹿兒島

指宿

湯通堂松五郎

同同タヤ

上敷領龜藏吉



[illegible]

鹿兒島

川邊



森 辛七 ◆

生存申請は生家今給黎姓)

今給黎 矢市（イキレ）

森 末次郎

同マツ
奇著次郎

安田徳次

同
サ
工

同豐次

浦地長之助

寺田 善之助

寺田善之助
長谷川善之助

長谷川善之助
原之助

同
トキヨ

石井淨水

松山榮次郎

同
三
拔

同青一

安達熊太郎

同 カメラツ

喜之助
金四郎

金匹郎
金工

鮫 同
島 庄 吉

川 魚
原 喜
五 郎

同
賤
吉

同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同同

揖
？ ？ ？ 同

宿

[illegible]

獨身者
同 同 同 同

獨身者

? ? ? ? ? ? ?
 3月

竹	上	松	宮	柳	前	永	野
内	村	元	田	村	原	田	村
製	喜	熊	勝	矢	藤		盛
裘	一	武	衛	吉	次	一	二
次	郎				郎		
郎							

同 同 同 同 同 同 同

縣名

擗宿

姓名

同同同同同同同同同同同同 同同同同同同同

川
同同同同同 同同同同同 同同同同同

（現在大森家に養子縁組）
松山 新之助 ▲

同

川	同	小	同	同	同	松	濱	田	永	清	同	同
畑	カ子	牧	齊	カ	與	山	崎	中	山	水	同	同
徳之助	佐四郎	造	ル	一	吉	(現在大森 新之助)	當五郎	岩次郎	吉左衛門	直吉	トメ	佐吉

◆ ▲ ◆ ▲ ◆ ▲ ◆ ▲ (組) ◆ ▲ ◆ ▲

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

第一回移民のアルバイト 日伯混合語でけっこう商売できる。

グアタパラ耕地に配属された第一回移民の元気な若い連中は、いまでいうところのアルバイトを考えついた。

ブラジル人がやっているところのポルコ（豚）の去勢である。

こんなことはちよつと器用なにほんじんなら誰でもできる仕事である。

かれらは日曜日や休日を利用しては付近のブラジル人をたずねては、「ポルコの去勢はありますか？」という注文をとった。そしてこういった。

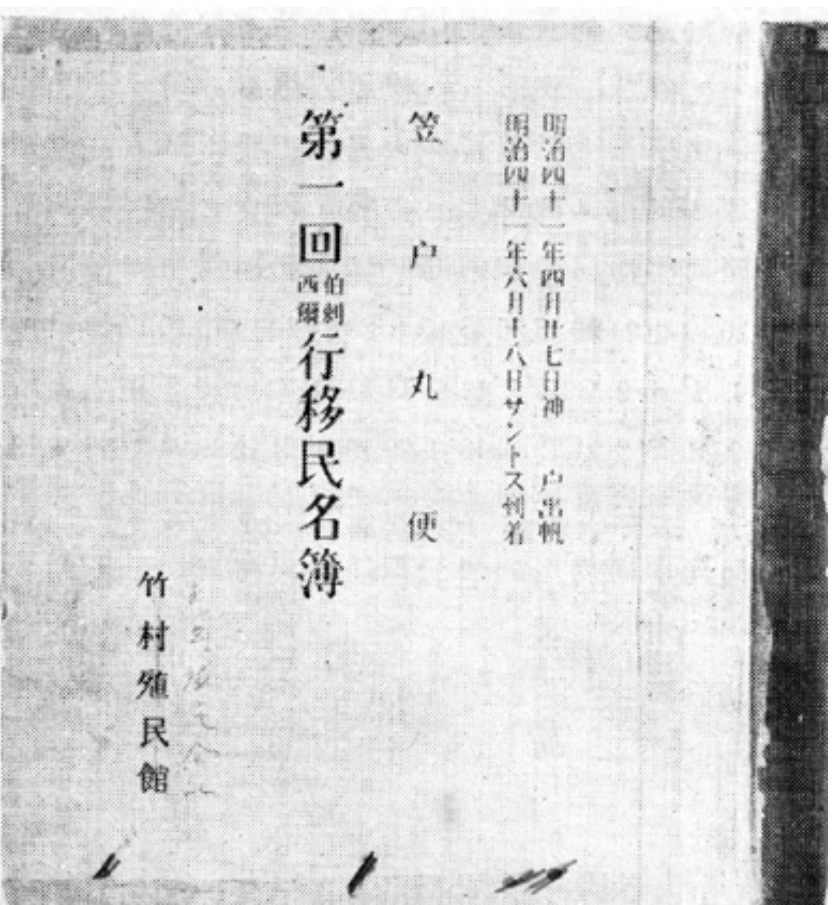
「ヨウ、グアタパラ、ノエメジコ、カッパード、ノエ、シュノール、テン、ポルコか、ノンテンか、テンならテンとフアーラ、パラミン」

らの言わんとするところは「私はグワタパラ耕地にいるポ
ルコの去勢の技術者ですが、あなたのところではポルコを
飼っていますか、もし飼っているなら、去勢させて下さい」
というのである。

ところが、どうみたところで相手が判りつこもなさそう
な、こんな〃日伯混合語〃で結構通じたというのだから不
思議である。

一心岩をも通すという通り、真剣な初期移民たちの態度に、
相手の伯人たちも〃カン〃を働かせてくれたのだろう。

「笠戸丸第一回移民名簿」



写真はサンパウロ総領事館に保管されている

「笠戸丸第一回移民名簿」

各縣人別代表者名

▲カッコ内は當時の年	熊本佐藤 田次(33)
齡、※印は現在生存者	同 藤本 末人(36)
沖繩	同 山中助次郎(18)
※與那嶺仁五郎(21)	廣島 中村 直松(32)
鹿兒島	山口 寶來 虎助(36)
同 原 源八(31)	愛媛 宮内 長藏(27)
同 西牟田實(25)	新潟 西村 市平(28)
福島	高知 長野 鹿次(40)
同 星 清藏(30)	宮城 目黒 靜(31)
熊本	佐伯國次郎(43)
中村 半次(32)	東京※茨木友次郎(22)

福島縣

姓名	年令	家族關係	本籍地
安田 俊平	明治22・11・8	家長	安達郡本宮町南町
同 コノ	26・11・10	妻	同
松本 源八	16・9・10	妻姉婿	同郡玉井村
武田 茂吉	明治20・1・3	家長	同郡玉井村字東町
同 タツ	22・7・15	妻	同
伊藤 茂左エ門	17・3・20	從兄	同
野内 寅治	23・12・1	從弟	同郡本宮町
根本 清五郎	7・12・17	從兄	同 平井

[illegible]

同	同	畠	鎌	同	同	星	佐	菅	同	高	字	釘	同	佐	穴	同	三	橋	同	渡	同	同	同	同	本	同	三	平	同	渡	同
		田				藤	野			橋	見	本		伯	戸		浦	本		邊					多		浦	儀		邊	
ハ	セ	喜	信	喜	ノ	清	善	忠	ス	正			ト	國	源	ケ	今	善	ト	又	留	ク	キ		チ	喜	ケ	七	喜		
ツ	キ	十	郎	六	イ	藏	明	七	エ	次	基	賢	キ	次	郎	助	サ	勇	ミ	吉	藏	ミ	ク	門	エ	馬	祐	サ	助	八	
同	明	慶	明	同	同	明	同	同	同	同	同	同	明	慶	同	同	明	同	同	明	同	同	同	同	明	同	同	同	同	明	
40	18	3	20	26	9	11	18	22	23	22	21	25	1	3	21	20	15	5	2	20	23	14	40	17	15	5	15	24	20	19	21
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
1	8	3	12	10	3	2	4	2	10	2	9	4	1	1	11	12	5	8	3	4	12	2	8	6	2	2	1	12	1	4	
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.
28	11	7	13	27	17	21	6	2	22	14	25	1	3	8	4	1	18	18	27	12	19	22	17	27	7	17	2	10	1	11	
娘	妻	家	獨	弟	妻	家	從	從	妻	家	從	妻	妻	家	甥	妻	家	妹	妻	家	從	右	妻	從	妻	家	妹	妻	家	從	
同	同	伊	双	同	同	田	同	同	同	安	相	甥	同	相	同	同	同	同	同	安	同	同	同	同	同	安	同	同	同	同	安
		達	葉	同	同	村	同	同	同	達	馬	双	同	馬	同	同	同	同	同	達	同	同	同	同	同	達	同	同	同	同	達
		郡	郡	同	同	郡	同	同	同	郡	郡	葉	同	郡	同	同	同	同	同	郡	同	同	同	同	同	郡	同	同	同	同	郡
		湯	幾	同	同	小	同	同	同	石	小	幾	同	小	同	同	同	同	同	石	同	同	同	同	同	新	同	同	同	同	石
		野	世	同	同	泉	同	同	同	井	高	世	同	高	同	同	同	同	同	井	同	同	同	同	同	殿	同	同	同	同	井
		村	橋	同	同	村	同	同	同	村	町	橋	同	町	同	同	同	同	同	村	同	同	同	同	同	字	大	同	同	同	村
		北	村	同	同	北	同	同	同	平	南	村	同	南	同	同	同	同	同	鈴	同	同	同	同	東	蓋	同	同	同	同	平
		穴	同	同	同	小	同	同	同	石	高	高	同	高	同	同	同	同	同	石	同	同	同	同	新	同	同	同	同	同	石
		原	同	同	同	泉	同	同	同	高	高	村	同	高	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	殿	同	同	同	同	同	同

同	同	畠	鎌	同	同	星	佐	菅	同	高	字	釘	同	佐	穴	同	三	橋	同	渡	同	同	同	本	同	三	平	同	渡	同	
		田				藤	野			橋	見	本		伯	戸		浦	本		邊				多		浦	儀		邊		
ハ	セ	喜	信	喜	ノ	清	善	忠	ス	正			ト	國	源	ケ	今	善	ト	又	留	ク	キ	多	チ	喜	ケ	七	喜		
ツ	キ	十	一	六	イ	藏	明	七	エ	次	基	賢	キ	次	郎	助	サ	勇	ミ	吉	藏	ミ	ク	丈	和	祐	サ	之	八		
同	明	慶	明	同	同	明	同	同	同	同	同	同	明	慶	同	同	明	同	同	明	同	同	同	同	明	同	同	同	明		
40	18	3	20	26	9	11	18	22	23	22	21	25	1	3	21	20	15	5	2	20	23	14	40	17	15	5	15	24	20	19	21
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	
1	8	3	12	10	3	2	4	2	10	2	9	4	1	1	11	12	5	8	3	4	12	2	8	6	2	2	1	12	1	4	
.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	.	
28	11	7	13	27	17	21	6	2	22	14	25	1	3	8	4	1	18	18	27	12	19	22	17	27	7	17	2	10	1	11	
娘	妻	家	獨	弟	妻	家	從	從	妻	家	從	妻	妻	家	甥	妻	家	妹	妻	家	從	右	妻	從	妻	家	妹	妻	家	從	
同	同	長	身	同	同	長	兄	弟	同	長	弟	弟	同	長	同	同	長	婿	同	長	兄	娘	同	同	同	長	同	同	同	弟	
		伊	双	同	同	田	同	同	同	安	相	双	同	相	同	同	同	同	同	安	同	同	同	同	安	同	同	同	同	安	
		達	葉	同	同	村	同	同	同	達	馬	葉	同	馬	同	同	同	同	同	達	同	同	同	同	達	同	同	同	同	達	
		郡	郡	同	同	郡	同	同	同	郡	郡	郡	同	郡	同	同	同	同	同	郡	同	同	同	同	郡	同	同	同	同	郡	
		湯	幾	同	同	小	同	同	同	石	小	幾	同	小	同	同	同	同	同	石	同	同	同	同	新	同	同	同	同	石	
		野	世	同	同	泉	同	同	同	井	高	世	同	高	同	同	同	同	同	井	同	同	同	同	殿	同	同	同	同	井	
		村	橋	同	同	村	同	同	同	村	町	橋	同	町	同	同	同	同	同	村	同	同	同	同	字	同	同	同	同	村	
		北	村	同	同	北	同	同	同	平	南	村	同	南	同	同	同	同	同	鈴	同	同	同	東	大	同	同	同	同	平	
		穴	原	同	同	小	同	同	同	石	高	村	同	高	同	同	同	同	石	同	同	同	同	新	蓋	同	同	同	同	石	

熊本縣

合計 二二家族 七七名（男五三、女二四）

以上

渡邊長四郎 明治7・1・5 家長北會津郡町北村

同	同
ト	力
メ	同
8	3
7	2
7	9
妻	男
同	同

山	同
本	
青五郎	吉之助
月台	同
8・7・7	13・2・9
家	甥
又	同
裏	
郡	
青三	
村	
比久	
呆	

只口野不義清
助良司明
21・1
8・7
1・2
從弟又
司郎變
幾世喬君
北村月
幾久保
世保

同利助同
162
・
2
・
9
從兄同

同
ウメノ
同
16
・
11
・
20 右妻
同

[illegible]

大村 千太郎 明治5・8・1 家長 飽託郡城山村

同
サ
力
同
10
・
4
・
10
妻
同

同
男
男
同
240
2
27
子
同

泰西	本島	末仁	人作	明同	512	215	妻從弟	同	包氏	戎山	村
----	----	----	----	----	-----	-----	-----	---	----	----	---

	妻	8・4・23	司 明治
本	家長會計	5・1・5	同
末			同
人			同
藤			同
司			同

出口
伊三
次
同日
22 8
・
3
・
2 2
從三
弟
同日

中川仁藏
明治1・11・12
家長飽託

同
卜
キ
同
7・9・1
妻
同

同
五百樹
同
33 · 4 ·
527
子
同

同 宮 部
、彌
、平
同 同
5 10
、 4
、 4
4 15
至 妻
同 弟
同 同

同	同
シ	1
ズ	
エ	ノ
同	同
9	15
・	・
4	5
・	・
7	14
ト	姪
ハ	
良	同
司	

西同
村
光
次
明
5
3
3
21
家長
鮑
託
郡
城
山
村

同
キ
ヨ
同
11
・
2
・
23
妻
同

同
コ
ト
同
35・9・25
一女同

同
卜
毛
同
37
3
18
二女
同

同
ト
ミ
同
39
・
10
・
6
三女
同

山	勇	永	同	同	同	同	中	木	同	同	上	坂	松	同	中	松	櫻	同	井	東	佐	同	東	井	同	森	佐	元	同	島
中	田						野	島			田	本	岡		村	本	本		手		藤			上		川	方	田		村
助	豐	呈	彦	テ	秀	エ	勝	儀	ミ	ジ	豐	榮	甚	カ	半	惣	源	ツ	喜	秀	信	ミ	松	美	ミ	卯	傳	勘	タ	七
次	吉	三	太	ル	雄	ト	治	男	ト	ユ	吉	八	郎	ユ	次	作	藏	ギ	平	雄	次	ツ	郎	喜	カ	八	助	ユ	藏	
明	同	同	同	同	同	同	明	同	同	同	明	同	同	同	明	慶	同	同	明	同	同	同	明	同	同	明	同	同	同	明
治	18	25	9	27	40	5	3	23	23	18	14	8	18	10	9	2	26	11	13	26	8	16	13	27	18	12	25	20	13	14
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
1	8	10	12	12	2	2	2	4	3	8	12	4	1	3	7	12	2	9	5	11	2	1	4	6	7	3	9	1	9	7
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
15	25	5	3	24	3	13	18	5	2	2	10	1	4	3	10	23	20	24	10	8	18	5	20	25	10	11	30	15	3	24
家	同	從	弟	娘	二	妻	家	妻	妹	妻	家	從	從	妻	家	妻	妻	妻	家	甥	從	妻	家	從	妻	家	甥	從	妻	家
長	同	弟	同	同	男	同	長	ノ	甥	同	長	弟	弟	同	長	從	從	同	長	兄	同	同	長	妹	同	長	甥	弟	同	長
同	同	同	同	同	同	同	八	代	郡	龍	峰	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
村	同	有	佐	村			村				村				村				村			村			村				村	

合計 一九家族 七八名 (男五〇、女二八)

以上

宮崎	同	松永	宮本	堀田	同	濱田	村崎	同	同	橋口	同	同	中島	同	同	上田	中田	中田	同	同	光永	岩尾	前田	同	岩岡	同	豊島	同
万作	ツネ	二	久記	徳平	トヨ	太作	豊重	敏信	タニ	重正	爲次	モセ	勘五郎主	ミチ	卯次郎	ユキ	佐市	三利	ユキ	清吉	朝平	三平	ツル	和作	芳太郎	清太郎	ミドリ	
同	同	同	明治	同	同	明治	同	同	同	明治	同	同	明治	同	明治	慶應	同	同	同	同	明治	同	同	明治	同	同	同	同
25	15	17	19	23	20	15	27	36	15	15	10	15	13	22	7	3	19	22	40	13	11	25	25	22	20	26	25	23
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
1	8	5	1	1	1	5	7	8	7	3	8	10	3	10	7	4	12	2	1	8	6	4	8	6	1	3	7	9
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
11	18	7	25	17	28	14	10	2	5	27	17	18	1	22	3	12	26	3	10	25	8	1	15	18	18	25	27	1
妻弟	妻	家長	獨身者	妻弟	妻	家長	妻弟	子	妻	家長	兄	妻	家長	子	妻	家長	妹	妹婿	三男	妻	家長	同	從弟	妻	家長	弟	弟	妻
同	同	同	飽託郡城山村	同	同	玉名郡横島村	同	同	同	天草郡深海村	同	同	鹿本郡廣見村	同	同	玉名郡大原村	同	同	同	同	八代郡龍峰村	同	同	同	同	同	同	同
沖新村		同	同	同													同	同	同									

宮城縣

姓	名	年	齡	家族	本	籍	地
山田	實藏	明治	29	弟	山縣郡都谷村		
田尻	龜太郎	同	22	從弟	同		
小下	仁藏	慶應	1	家長	安佐郡小河内村		
同	ナカ	明治	6	妻	同		
小下	序三郎	同	23	甥	同		
昌田	傳之助	明治	12	家長	安藝郡畑賀村		
同	ナナヨ	同	23	妻	同		
今田	軍司	同	28	妻甥	同		
池田	彌市	明治	19	家長	山縣郡都谷村		
同	アサノ	同	22	妻	同		
兒玉	良一	同	28	從弟	同		
笹谷	松太郎	同	20	同	同		
植木	玉市	明治	18	獨身者	不明		
楠木	登一	同	9	同	同		
合計	九家族	四二名	(男三二名、女一〇名)				

姓	名	年	齡	家族	本	籍	地
遠藤	豐之助	明治	17	家長	伊貝郡館矢間村		
同	キヨス	同	22	妻	同		
同	ユキ	同	28	妹	同		
目黒	ヨソジ	明治	10	家長	同		
同	同	同	9	妻	同		
同	連治	同	22	從弟	同		
大和	安之助	明治	18	獨身者	不明		
深町	千代藏	同	17	同	同		
相澤	直藏	同	3	同	同		
工藤	文太郎	同	22	同	同		
合計	二家族	一〇名	(男七名、女三名)				

茨木	友次郎	明治19・12・18	家長	東京市本所區
同	千ヨ	同	妻	同
同	信太郎	同	弟	同
合計	一家族	27・4・11	三名(男二名、女一名)	

姓	名	年	齡	家	族	本	籍	地
玉城	仁王	明治	15	8	3	妻	同	家長中頭郡西原村
同	カマ	同	21	3	5	妻	同	家長中頭郡西原村
屋宜	加那	同	5	8	3	從兄	同	
新垣	龜那	同	25	10	6	從弟	同	
金城	武一	同	11	3	15	從兄	同	
玉那	武太	同	22	1	17	妻從弟	同	
又吉	龜和	同	14	6	23	妻從兄	同	
吳屋	仁	明治	14	3	5	家長中頭郡西原村		
同	ウ	同	15	9	20	妻	同	
島袋	五郎	同	15	8	6	從弟	同	
金城	陸仁	同	16	8	5	妻從弟	同	
末吉	德兵衛	同	6	6	4	從兄	同	
新嘉	尙助	同	10	11	7	同	同	
大名	釜助	同	19	2	3	弟名嘉文五郎身代り渡航		
大城	ナ	明治	14	10	5	家長中頭郡西原村		
同	ベ	同	12	5	25	妻	同	
玉那	龜	同	20	1	5	妻從弟	同	
仲宗根	蒲	同	24	12	7	同	同	
知念	仁	同	17	5	6	從弟	同	
新川	善助	同	22	12	22	妻從弟	同	
嘉牛	加那	同	22	8	5	從弟	同	

[illegible]

山宮新城同新同同喜屋武同同比同新同比同新比同同同同新同同同同比同比新	内城垣間垣																														
次善字カ																															
樽郎良志マ	龜	蒲	三	蒲	加那志	マ	松	蒲	戸	山	松	カメジヤ	松	牛	蒲	松	龜	カメジヤ	戸	戸	正	盛	蒲	メ	牛	山					
同同同同同	明治	同	同	同	同	同	明治	同	同	同	同	同	明治	同	同	同	同	明治	同	同	同	同	同	同	同	明治					
1 24 5 18 20 22 10 22 5 24 24 21 12 19 22 13 24 23 15 23 24 22 18 15 8 24 13 22 17 14 22																															
・ ・ ・ ・ ・																															
8 8 7 9 3 2 9 11 8 12 12 12 9 6 6 6 2 1 10 12 3 6 10 5 10 7 8 12 10 2 8																															
・ ・ ・ ・ ・																															
10 18 3 6 4 5 10 10 8 4 19 12 7 6 1 6 18 6 8 13 18 2 23 25 5 27 10 6 10 3 3																															
從兄	從弟	同	從兄	妻	家長	同	同	妻從兄	從弟	妻	家長	同	同	同	從兄	妻	家長	同	同	同	從弟	妻	家長	從兄	從弟	從兄	弟	妻	家長	從弟	
同	同	同	同	同	中頭郡中城村	同	同	同	同	同	中頭郡中城村	同	同	同	同	同	中頭郡中城村	同	同	同	同	同	中頭郡中城村	同	同	同	同	同	同	中頭郡中城村	

伊波	同	島袋	同	同	仲宗根	同	吉元	高江洲	島袋原	池原	同	高江洲	石原	金城	同	島袋原	池原	比嘉	山人端	大山城	宮城	島袋	同	宮里	大城	玉城	比嘉	比嘉	同	新里	
ナベ						ツ	三	義	利	文	義	義	昌	カ	次	立	朝	伊	利	カ			加	德	光	カ					
龜イ	松	牛	蒲	蒲	ル	良	好	藏	鳳	廷	勝	三	德	マ	蒲	郎	蒲	仁	義	八	孝	ト	龜	龜	那	松	永	マ	樽		
同	同	明治	同	同	同	明治	同	同	同	同	同	同	同	同	明治	同	同	同	同	同	同	同	明治	同	同	同	同	同	同	明治	
19	7	5	25	14	25	12	13	3	26	7	5	12	22	22	24	15	24	15	8	6	22	22	10	7	1	25	24	14	12	6	
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	
11	5	4	7	2	1	6	9	7	3	2	9	2	8	2	5	8	11	11	2	10	11	3	11	3	2	7	8	1	1	2	
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	
28	4	8	20	15	20	30	15	20	13	18	6	22	10	10	15	25	7	10	3	20	1	10	12	8	2	25	13	3	5	10	
從弟	妻	家長	同	同	從弟	妻	家長	伯父	從弟	從兄	伯父	叔父	同	從弟	妻	家長	甥	從弟	叔父	妻	從兄	同	從弟	妻	家長	同	同	同	從弟	妻	家長
同	同	中頭郡美里村	同	同	同	同	中頭郡美里村	同	同	同	同	同	同	同	同	中頭郡美里村	同	同	同	同	同	同	同	中頭郡美里村	同	同	同	同	同	中頭郡中城村	

宮平	同	同	金城	山田	仲宗根	古謝	饒波	同	崎山	知念	奧間	同	同	知念	同	中宗根	平戸	宮城	新垣	兼城	宮城	同	儀保	伊波	伊波	當間	大城	同	島袋	島袋
			カ太	三	蒲	三	必	カ	並	政	武	カ		山	松	松	加	マ	加	加	嗣	カ	三							
松龜	下	二	良	助	良	達	メ	吉	松	廷	蒲	太	蒲	メ	牛	戸	助	數	松	那	ト	蒲	那	那	龜	松	メ	良	德	
同	同	同	明治	同	同	同	同	明治	同	同	同	同	同	同	明治	同	明治	慶應	同	同	同	明治	同	同	同	同	同	同	同	明治
22	22	19	22	13	18	8	6	14	22	20	12	25	7	24	13	14	19	13	3	25	19	11	5	21	11	16	18	2	1	10
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
9	5	12	10	8	3	11	6	8	12	7	12	6	5	11	1	11	10	3	11	1	3	12	6	12	11	5	2	1	11	3
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
11	15	6	12	4	5	20	8	4	20	3	29	1	13	23	21	13	3	8	3	10	12	8	16	23	12	17	10	5	10	8
同	妻從弟	同	家長	同	同	從兄	妻從兄	妻	家長	從弟	叔父	從弟	叔父	從弟	妻	家長	同	妻從弟	妻叔父	從弟	妻從弟	妻	家長	同	同	同	從弟	妻	家長	妻從弟
同	同	同	中頭郡北谷村	同	同	同	同	同	中頭郡北谷村	同	同	同	同	同	同	中頭郡美里村	同	同	同	同	同	同	中頭郡美里村	同	同	同	同	同	同	中頭郡美里村

[illegible]

新垣	太田	同	大城	赤嶺	同	外間	知念	具志	大田	同	嘉數	同	玉城	大城	同	新垣	赤嶺	興座	金城	同	金城	仲村	仲村	同	同	同	同	金城	大城	宮城
カマ	宗人	良宗	喜佐	ミト	次郎	章七	向雪	カメ	龜一	眞吾	禮平	龜三	マカ	茂一	音六	義平	敬三	カメ	彦助	健德	孫德	山戸	庄内	カマ	萬助	照太郎	眞吉			
同	同	同	同	同	明治	同	同	同	同	明治	同	同	同	明治	同	同	同	同	明治	同	同	同	同	同	同	明治	同	明治		
23	17	1	15	15	22	22	23	24	14	19	7	10	17	16	14	13	23	6	26	18	21	22	5	18	26	3	12	14	25	15
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
2	3	6	6	9	7	5	1	7	8	4	3	2	10	6	1	2	5	5	2	3	12	11	10	12	11	8	8	8	12	10
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
5	5	8	3	11	13	28	3	21	10	14	27	20	20	10	17	10	9	10	4	5	20	3	17	13	16	4	5	14	3	5
從妹	妻從兄	從兄	妻從兄	從兄	妻	家長	同	同	從弟	妻	家長	從兄	同	從弟	妻	家長	從弟	妻從兄	從弟	妻	家長	從弟	同	妻從弟	兄	妻	家長	妻從弟	妻兄	妻兄
同	同	同	同	同	同	島尻郡豐見城村	同	同	同	同	島尻郡眞和志村	同	同	同	同	島尻郡南風原村	同	同	同	同	同	島尻郡南風原村	同	赤嶺供儀身代り渡伯	同	同	同	島尻郡南風原村	同	島尻郡南風原村

與那嶺	新里	仲村	松田	仲村	島袋	仲宗根	同	同	同	仲里	吉濱	上江沼	宮城	同	盛吉	同	同	石川	同	有銘	宜名眞	同	知念	仲村	同	同	同	同	金城	新里	安谷
仁五郎	新清	善篤	太郎	善三郎	幸助	宗忠	新志	新忠	ウシ	新三	智昌	智武	保守	カメ	智珍	賀名	逢吾	百歳	兼順	兼徳	邑一	ナベ	三良	常昌	加麻	基吉	カマ	孝八	南吉	屋興元	
明治20	同25	同14	同13	同20	同10	同18	同23	同23	同19	明治17	同22	同17	同9	同16	明治13	同18	同23	同10	同24	同19	同10	同21	明治17	同23	明治27	文久1	同18	明治19	同14	明治23	
・1	・1	・4	・6	・1	・3	・3	・11	・7	・3	・9	・5	・11	・9	・7	・10	・3	・10	・9	・1	・5	・2	・8	・6	・2	・?	・3	・9	・3	・12	・3	
21	25	4	6	24	14	19	10	6	15	2	18	12	1	14	14	10	18	14	1	23	2	22	18	18	3	6	9	19	17		
家長國頭郡今歸仁村	妻從弟同	妻叔父同	妻從兄同	妻從弟同	妻從兄同	妻叔父同	妻從弟同	從弟同	妻同	家長國頭郡今歸仁村	妻從弟同	從兄同	從兄同	妻同	家長島尻郡具志川村	同	從弟同	從兄同	妻從弟同	妻從兄同	從兄同	妻同	家長那覇區西一三八九番	從弟同	?	父同	妻同	家長島尻郡玉城村	從兄同	從弟島尻郡大里村	
																									知念次良身代り渡航						

同山入	山上間	比嘉里	山	同玉城	大城	同宮城	玉井城	仲井間	玉城	同	同	仲程	同	座霸	安慶名	知念	具志堅	仲地	金城	同	同	山	島袋	上原	津波	平良	與那嶺			
ウ端川	靜吉	久一	要四郎	平七郎	源次郎	孫四郎	ナベ	幸四郎	仙三郎	宗昌	傳吉	清四郎	清太郎	仙五郎	ウ憲	政憲	ト之助	善吉	甚八	双三郎	甚三郎	タマ	梶一郎	榮一	直松	新次郎	松六郎	カマダ		
同明治	同	同	同	同	同	同	同	明治	同	同	同	同	同	同	同	明治	同	同	同	同	同	明治	同	同	同	同	同	明治		
23	22	26	19	15	12	7	23	13	13	23	22	14	22	22	23	25	23	17	25	1	2	20	15	24	9	7	19	13	13	23
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	
7	8	8	10	7	7	12	10	7	1	8	3	3	6	8	10	3	11	1	10	7	10	11	10	6	3	2	2	1	12	10
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
14	4	16	17	9	28	28	28	15	10	1	20	15	4	10	12	20	11	28	5	5	10	10	18	1	5	7	3	22	29	3
妻同	家長國頭郡名護村	妻從弟同	同	從弟同	同	從兄同	甥同	妻同	家長國頭郡羽地村	同	妻從兄同	妻叔父同	同	同	妻從兄同	妻同	家長國頭郡本部村	從弟同	妻從弟同	同	從兄同	從弟同	妻從兄同	妻同	家長國頭郡本部村	同	從兄弟同	妻從兄同	從兄同	妻國頭郡今歸村

[illegible]

[illegible]

愛媛縣

姓名	年齡	家族關係	本籍地
池田 榮太郎	明治12・8・10	家長伊豫郡上瀧村	
同 ミヤノ	同 1・1・9	妻同	
宮内 長藏	同 14・1・7	妻兄同	
岡田 善太郎	同 1・5・27	家長溫泉郡古三津村	
同 タキ	同 1・6・2	妻同	
同 アサキ	同 15・3・4	妻ノ妹同	
同 貞文	同 17・11・1	長女ノ夫ノ弟同	
橋本 重左衛門	明治12・5・24	家長伊豫郡上瀧村	
同 タカノ	同 26・1・15	妻同	
東野 綱吉	同 16・9・1	妻ノ兄同	
同 音市	同 23・4・5	同	
近藤 林次	明治13・2・9	家長松山市	
同 タケ	同 12・6・6	妻同	
同 常吉	同 19・2・27	養子同	
宮田 儀三郎	慶應2・7・3	家長喜多村天神村	
同 ハナヨ	明治7・8・16	妻同	
同 我 稔	同 25・8・7	甥同	
芳 德太郎	明治11・12・15	家長喜多村内子町	
同 トミエ	同 13・12・3	妻同	
同 松衛	同 9・9・3	妹婿同	
石川 好三郎	明治13・12・6	獨身者?	
合計	六家族 男一四名 女七名	二一名	

鹿兒島縣

川畑 德之助
 明治15・11・6
 家長 掛宿郡エイ娃村別府

川畑	小牧	同	同	同	松山	同	同	濱崎	同	同	田中	同	永山	清水	同	同	同	上井	同	森	同	上塘	西	西	鹽原	有	同	同	中
カ子キク	齊造	カ一ル	與一	豐吉	新之助	シメ	彌吉	當五郎	トセ	岩次郎	定之助	キク	吉左衛門	直吉	トメ	佐吉	ヒロ	仁志	敏哉	トエ	才次	吉太郎	キノ	與四郎	藤太郎	梅鶴	權四郎	健	
明治21	明治17	明治15	明治23	明治24	明治12	明治12	明治24	明治1	明治9	明治15	明治15	明治23	明治20	明治22	明治22	明治23	明治17	明治22	明治14	明治15	明治19	明治22	明治20	明治23	明治24	明治23	明治24	明治3	明治25
・1	・7	・3	・1	・5	・8	・8	・2	・8	・9	・4	・10	・5	・3	・12	・8	・9	・2	・12	・7	・9	・3	・6	・9	・4	・9	・4	・6	・11	・6
・11	・5	・15	・7	・4	・2	・18	・11	・26	・14	・4	・5	・14	・16	・18	・22	・8	・10	・2	・4	・17	・10	・14	・15	・23	・9	・17	・2	・25	
妻	養子	家長	甥	從弟	妻	妻	養子	家長	妻	甥	家長	妻	妻從弟	家長	妻	養子	家長	妻	妻從兄	家長	妻	妻從弟	家長	妻	從弟	家長	妻	兄	甥
揖宿郡エイ娃村別府	同	揖宿郡エイ娃村別府	同	現在養子縁組大森姓	同郡同村同字	同	同郡同村同字	同郡同村同字	同	同	川邊郡西加世田村	同	川邊郡西南方村	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同郡同村	同	同	川邊郡川邊村	同	同	同

柿木	同	本坊	同	柿木	宇都	田實	橋口	南興	加藤	同	同	同	貴島	大原	同	同	同	末永	同	同	牧之段	同	同	同	同	川床	同	同	松山
榮	ス	清吉	ミツ	三四郎	愛助	五左衛門	七兵衛	興右衛門	圭助	明次	カル	ソデ	七郎	藤右衛門	サエ	廣	ミツ	傳次郎	ツタ	愛熊	太吉	イセマツ	榮二	エダ	榮吉	末太郎	ソメ	盛吉	
同	同	明治	同	同	明治	慶應	同	明治	同	同	同	同	明治	同	同	同	明治	同	同	明治	同	同	同	同	明治	同	同	明治	
25	16	12	18	3	3	1	10	16	18	23	40	9	8	6	40	38	13	13	27	22	20	27	35	19	3	21	12	22	
•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	
12	3	7	4	7	5	3	12	4	12	4	3	11	12	7	9	1	4	1	1	7	7	12	3	8	11	12	2	6	
•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	•	
19	28	8	3	10	9	6	4	10	19	8	25	8	7	7	10	31	23	1	31	24	27	27	15	15	3	28	2	7	8
妻甥	妻	家長	妻	家長	同	同	同	獨身者	妻弟	甥	三女	妻	家長	妻從兄	長女	長男	妻	家長	妻弟	妻	家長	甥	右長男	右妻	弟	妻	家長	?	妻
同	同	川邊郡加世田村	同	川邊郡加世田村	同	川邊郡東加世田村	?	?	同	同	同	同	川邊郡加世田村	同	同	同	川邊郡加世田村	同	同	同	川邊郡加世田村	同	同	同	同	川邊郡加世田村	同	同	川邊郡西南方村

出原	同	有村	同	湯通堂	同	同	同	上敷領	湯ノ口	同	同	王子田	同	上川路	西牟田	同	同	同	山下	隈元	同	山上	山形	同	同	濱田	同	同	桑原	同	篠原	石井
正藏	チヨグサ	榮	立衛	松五郎	タヤ	傳藏	龜吉	市	ヨシ	八郎	政吉	計佐松	喜八	實	ノキ	秀雄	一雄	維高	モイ	武次	元吉	セイ	淺吉	長次郎	ナカ	計佐次郎	伊左衛門	サワ	清藏	愛之助		
明治13	同21	同26	同23	明治21	同21	同23	同22	明治22	同20	同26	明治13	同17	同22	明治16	同19	同24	同24	同19	明治16	同15	同19	明治12	同18	同25	明治15	同19	同24	明治13	同22	同26	明治8	
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	
12	2	1	9	12	7	4	8	8	9	2	2	3	11	5	11	6	14	15	2	9	5	8	11	4	1	12	10	2	9	5	8	
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	
18	31	27	23	8	3	15	1	1	14	12	2	5	6	14	15	1	30	8	18	26	1	15	7	1	24	14	20	27	21	7		
家長	妻	妻從兄	同	家長	妻	義弟	同	同	家長	妻	弟	妻	弟	家長	妻	養子	從弟	家長	妻	從弟	家長	妻	從弟	家長	妻	從弟	家長	妻	妻	妻	家長	
川邊郡加世田村	同	同	同	指宿郡指宿村	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	肝屬郡牛根村	同	同	同	同	同	同	同	同	同	川邊郡東南方村	同	同	川邊郡西南方村	

[illegible]

川原	鮫島	同	瀬戸上村	小同	安同	同	松山	石井	同	原長谷	寺田	同	蒲地	同	同	安田崎	岩崎	同	森今給黎	同	森	同	池上	同	本多	茶屋政雄				
喜五郎	庄吉	キエ	金四郎	喜之助	カメマツ	熊太郎	青一	三拔	榮次郎	淨水	トキヨ	源之助	善之助	善之助	ミサ	長之助	豊次	サエ	徳次郎	喜次郎	マソ	末次郎	矢市	キセ	友衛	金之助	恒則	ツヨ	誠二	政雄
明治19	同4	同19	明治16	同22	同20	明治15	同22	同25	明治17	同25	同21	明治17	同26	同15	同21	明治20	同24	同26	明治22	同22	同25	明治20	同25	同20	明治23	同11	同25	同17	同15	明治26
・12	・2	・12	・6	・11	・9	・11	・12	・3	・4	・4	・8	・3	・5	・12	・11	・11	・12	・4	・8	・9	・4	・9	・3	・11	・2	・1	・6	・11	・3	・9
12	1	10	10	4	8	3	12	6	15	29	25	2	11	1	20	2	15	12	22	3	17	10	1	24	8	10	8	11	12	12
獨身者	叔父同	妻同	家長同	從弟同	妻同	家長同	叔父同	妻同	家長同	從弟同	妻同	家長同	妻ノ弟兄同	妻從兄同	妻同	家長同	弟同	妻同	家長同	妻兄同	妻同	家長川邊郡西南方村	妻ノ弟兄同	妻同	家長同	同從兄同	妻弟同	妻同	家長同	弟川邊郡東南方村

女四九名

家族關係
本籍地

妻	從弟	從兄	同	家長	妻
妻	香美郡擇須村	高知市細工町	香美郡夜須村	長岡郡十市村	同
妻	香美郡夜須村	高岡郡宇佐村			

妻	家長	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	獨身者	右ノ弟
同	川邊郡東南方村	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	擇宿郡指定村
				川邊郡加世田村	川邊郡西南方村	？	？	？	？	？	？		

鍋島	喜代重	明治22	11	7	從弟	長岡市十市村
同寅義	同	25	1	14	右ノ弟	同
谷岡	庄太郎	同	13	10	從弟	高知市八丁目屋敷
長野	鹿次	明治1	12	12	獨身者	土佐郡江ノ口町
森勝利	同	25	5	7	同	高知市帶屋町
合計		25	5	7	同	高知市帶屋町
男一二名		2	1	1	女二名	2

新潟縣

菅原	雄次	明治17	6	7	家長	北蒲原郡乙村
同マチ	同	22	10	15	妻	同
同定三郎	同	20	2	?	弟	同
同榮太郎	同	12	5	?	家長	北蒲原郡中浦村
同タカ	同	17	11	?	妻	同
同拙郎	同	26	6	?	甥	同
同市平	同	13	9	?	家長	北蒲原郡築地村
同マール	同	15	9	?	妻	同
同新井	同	18	1	?	妻弟	同
合計		18	1	1	同	同
男六名		3	1	1	女三名	2
三家族		9	1	1	九名	2

自由移民

鞍谷	半三郎	明治16	10	1	家長	兵庫縣明石郡平野村
同イノ	同	30	5	2	妻	同
同誠一郎	同	安政5	2	1	父	同
同又義	同	?	?	?	?	同
同治	同	12	1	10	家長	高知縣高岡郡高岡村
同秀於	同	?	?	?	妻	同

片岡	光章	明治30・1・1子	高知縣高岡郡高岡村
高桑	治兵衛	同10・1・1	獨身者鈴木貞次郎ノ親戚
矢崎	節夫	明治22・1・25	獨身者長野縣諏訪郡四賀村
香山	六郎	明治19・1・2	獨身者熊本縣飽託郡春竹村
合計		二家族 一〇名	
男		七名	
女		三名	

その他の移民關係者及便乗者

水野	龍	移民引率者	高知縣高岡郡佐川町
上塚	周平	移民總監督	熊本縣下益城郡杉上
大野	松子	先發移民通譯の妻	大分縣
仁平	ツナ子	同	秋田縣
三原	万次郎	水野妾腹の子	東京
柏木	某	玉屋花火職人	水野同伴者
瀧波文平	商店主	ウルグワイ行旅行者	
安田商店主	他傭員二名	アルゼンチン行	
金澤一郎		外國語学校先生(下船せず)	
笠戸丸乗船者		總合計	八〇二名

クローズ・アップ

通訳五人男の横顔

平野 運平

すぐれた指導力 二十二歳で耕地副支配人

静岡県出身、榛葉（シンバ）健蔵氏の次男として生れたが、その後叔母方の養嗣子となって平野姓を名乗った。

大正八年（一九一九）氏が三十三歳の年、猛威をふるったスペインカゼの犠牲となり、同年二月六日ノロエステ線カフエーランジャ駅（旧名プレジデンテ・ペンナ）平野植民地において死去した。

一九〇八年、水野龍氏第一回ブラジル移民輸送にあたり募集された通訳としてシベリア経由で笠戸丸に先發、同年五月中旬サントスに着いた。

六月十八日笠戸丸がサントスに移民を乗せて入港するや、同月二十八日までサンパウロ移民收容所にあつて、移民配耕地の決定と、自己の受持場所の指令を待っていた。

受持ち耕地はパウリスタ線グワタパラ駅グワクパラ耕地と定まり、鹿児島県人十八家族六十七名（男四六）高知県

人二家族十二名（男一〇）新潟県人三家族九名（男六）合計二十三家族八十八名を引率し、二十八日午前五時の汽車で移民収容所を出發した。

出發当初はパ組サン・マルチンニオ・プラード駅サン・マルチンニオ耕地配耕の鹿児島県人二十七家族一〇一名（男七四）も引率し、平野氏がその仕事をする事に成っていたが、両耕地の位置は二十余キロメートルも隔り、両所を兼ねることは不可能となり、山形県人鈴木貞次郎氏がサン・マルチンニオ耕地通訳に赴任した。

移民者耕地六カ所中何一つの紛争事件を起さなかったのはこのグワタパラ耕地のみであった。

その時の平野氏は若冠二十二歳であつたが、才能ある人事統制手腕を耕地支配人ジョゼー・サルトリオ氏より認められ、間もなく同耕地傭員就働者数百家族を統率する副支配人に抜擢された。

温和で寛容な裡に、勇氣と情熱を持つ氏の指導力は、内外人十余名の現場小監督を手足の如く駆使していた。

大小さまざまな問題を起し、水野龍、上塚周平両氏をしで血涙をしばらしめた五耕地五通訳にいわせると、

「平野運平が所属したグワタパラ耕地支配人は、大変な好紳士であり、日本移民には絶対的な優遇を惜しまず。務めて果実の多い珈琲園を与える等、その待遇振りは、他の無理解な耕地支配人とは比較にならなかった。

決して平野運平君の人望手腕のしからしむるところではない。君の姓名の如く運が良かったのだ」

と、論じているが、氏の徳望高い人格は氏の生涯を通じての足跡に貫徹している

平野運平氏を知る今日の生存者はその人柄を口を揃えて賞讃してやまない。

初期日本移民通訳中の第一人者であつた事は間違いはないであろう。

笠戸丸移民輸送総監督上塚周平氏の同県人として、また学識ある者として上塚氏の事務を常に補佐していた第一回移民生存者香山六郎氏の当時の追想談をあげてみよう。談話中僕とあるは香山六郎氏のことである。

「僕は笠戸丸で、平野運平さんはシベリア鉄道で一足先に来ておられたから移民収容所で逢つた時は「知らぬ人」で、その時の運平さんと僕との間に語る様な追憶談のある筈もないが、只一つ印象的なものが残っている。

収容所に於ての通訳連は、ぞくにいう指導者ヅラをして威張り散らしていた。

特に加藤順之助等は帽子をアミダにかぶり、赤いネクタイを結んで、肩をいからせ濶歩していたが、運平さんはいつも隅の方で謙遜的にシヨンボリしていた。

その運平さんが耕地に入るや、決してシヨンボリとも謙遜もせず、常に堂々と移民の先頭に立ってその福祉増進の

為に働いている。

“能ある鷹は爪を隠す”というのはこの様な人というのであろう。

第二回移民が来た時、僕はジャタイ耕地に通訳として就任した（一九一〇年）

大野基尚通訳兼監督が居た所であつたが紛争事件を起し、その責を負って離職したところに僕が行つたのである。

運平さんの居るグワタパラとジャタイ耕地は原始林を四十キロメートルもはなれた遠隔の地にあつたが、僕の新任を知つて、或る日、トロールを仕立てゝ見舞に来てくれた。その前にピンガがウンガラホン汽車便で送り届けられていたので運平さんの来る事は予想していたが僕は大いに喜び氏を迎えた。

耕地の目ぼしい日本人家長連を呼びガラホンを抜き、飲めや唄えやの大騒ぎをやり、遠来の客に感謝の意を表した。その時運平さんは“移民が騒ぐのには困るのう、苦勞をするのう。しかしお互いに日本の為を思い辛抱をしよう”と僕を慰めてくれた。

その時・こんな小事件もあつた。
飲むほどに、喰うほどに上機嫌に成つた。運平さんが、其所に落ちていた果物の皮、多分ミカンの皮と想うが、手にとってエイ…とばかり投げた。

昔のコロニヤは長屋式の建物で、天井が張っていない。

壁の上を通り越して隣家に飛込んだ。

運悪くもその家の家長福岡県人馬見塚竹義君の顔にあたった。

この馬見塚君は苦味ばしつた伊達男で柔道二段という強者、カンカンになって怒り、壁越しに怒鳴り出した。

僕は早速“これは間違つて出来た事でまことに申訳がない”と、あやまつたが運平さんも僕と前後して“コリヤすまんことをした。僕が悪かつたから許してくれ”と、酔つて居ても少しも取乱すこともなく謝罪していた。運平さんのこの時の態度は側の見る目も実に立派であつた。

大農場の副支配人たる運平さんの態度に馬見塚とて、何の不服もなく不愉快な問題も起らずに済んだ。

この様に運平さんは、何時でも自分の非を認め頭を下げることの出来る人であつた。

馬見塚君もジャダイ耕地を出てから、聖市郊外タイパスでバタチンニヤ栽培をはじめた日本人馬鈴薯栽培界の先駆者である。

従来ブラジルで栽培されていた退化バタチンニヤに改良を加え、良質な種子の産出に成功、ビラ・ジユケリーに播かれる種子の提供者と成つた」

（香山六郎氏談）

このように平野運平氏は母國政府と何等関係なく、独力で、在留日本人農家を糾合して植民地を建設した。

ブラジルにおける邦人植民地創設の先駆者である。

同氏の行動は常に入植者と共に生活しその労苦を共にしたところに大いに意義があり、土地ブローカー的な安逸収益的な意志は微塵もなかった。

平野植民地に一九一五年八月三日グワタパラ耕地就働の選抜家族中の七名を組織し、先發隊として入り、後続者への収容所の設備をほどこし、同年末八十二家族を入植させた。

翌年一月上旬よりマレッタ患者の発生を見たが、無経験者の日本人はその予防法を知らず、病魔は兇暴な勢で蔓延して僅かの期間に死者六十余名を算するという悲惨な様相を呈した。

この時の平野氏の憔悴苦慮は筆舌に盡しがたいものであった。

平野植民地の窮状に松村貞雄総領事は戸田善雄医師を派してその施療にあたらせたが、齒医者に關係していたと、云う程度の医術では、悪疫の猛威を防ぐ事は出来なかった。

運平氏は出聖して、松村貞雄総領事に再度の救援を求めた。

総領事は自己の囊中より七コントを貸予した、運平氏は欣喜雀躍し、その金でマレッタ用キニネを買入れ病魔に斃れ行くものを救った。

この借財は氏の存命中には返済するに至らなかった。

平野植民地開拓二十周年に当り、祖人運平氏の負った舊債を返済すべく、植民者一同、伯貸十コントを集め、日本に余生を送る松村菊子末亡人に贈ろうとしたが刀自はこれを辞退して「このお金を受取るは亡夫の遺志にも反すると思うし植民地の為に、有意義に使用して頂きたい」との返信を寄せられた。

感激した植民者は、伯國名産のメノウ石を記念として刀自に送り、松村奨学資金基金で設けて故人の美德をのこすことになった。

このように平野運平氏に関連する美談は限りがなく、氏の人格振りがハウフツとして現われている。

氏の墓碑銘「平野運平之墓」の字は堀口久万一公使が書いた。

後年開拓犠牲者の為に鎮魂碑を建設された際は、特命全權大使正四位勲一等有吉明氏が平野運平氏、松村貞雄氏の為に碑文を草した。

鎮魂碑之銘

平野植民地内

平野植民地ハ伯國ニ於ケル我植民地ノコウ矢ニシテ静岡県人平町運平君ヲ以テ之ガ創始者トス。

君夙ニ海上万里開拓ノ志ヲ懷キ東京外國語学校ニ学ビ明治四十一年第一回移民通訳トシテ、グワタパラ耕地ニ入り勤

勉努力躍進副支配人トナル、君慨然想ニラク邦人将来ノ發展須ク土地ヲ求メテ獨立スルニアリト、之ヲ聖州総領事松村貞雄君ニ諮ル、同君大ニ之ニ賛同シ後援ヲ約ス。

君於茲万難ヲ耕シ事ニ當リ、大正四年土地ヲ選定シ、敢然職ヲ離シ八月三日壯者七名ト共ニ黄昏密林ヲ排シテ現場ニ入ル、即チ現植民地也。

初年入植者八十二家族セツ風沐雨同心協力開拓ニ従フ然モ不幸マラリアノ厄有リ医薬不続死者六十余名慘状言語ニ絶シ資金亦窮乏ス、救ヲ松村君ニ求ム君ジョウ底ヲ拂テ之ヲ援助シ、漸ク一時ヲ凌グ更　旱魃、蝗軍ノ災アリ、平野君苦心慘憺以チ難関ヲ突破シ得タルモ健康為ニ損フ。

タマタマ大正八年グリツペ流行ニ遭イ二月遂ニ之ニ斃ル、松村君帰朝中卒然トシテ逝キ植民者為ニ其ノ柱石ト思フ人ヲ失ウ、其悲嘆知ル可キ也。

爾来同人互ニ相バイマシ能ク其ノ遺志ヲ継ギ、拮据經營今ヤ其基礎漸ク定マラントシ而シテ植民地建設比隣ニ行ハレ故人ノ理想茲ニ漸ク達成ヲ見ルニ至ラントス。

植民地内平野、松村両君ノ穂ヲ慕ウモノ一碑ヲ建テ其遺業ヲ伝エ、併セテ犠牲者ノ英靈ヲ弔ハントシ余ニ囑スルニ碑文ヲ以テス松村君ハ余ノ舊友ニシテ生前其知遇ニ浴ス依テ拒ム可キニアラズ即チ不文ヲ傾ミズ事歴ノ一端ヲ序シ是等諸子ノ誠意ノ一端ニ資セントスルモノ也。

加藤順之助

悲惨な死遂ぐ

茨木県出身、東京外語スペイン語科出身。モジアナ線ヅモント駅ヅモント耕地に赴任した。

再発は六月廿九日で同日午後八時リベイロン・プレート駅に着いた。

耕主から楽隊をもつて歓迎されて入植したが、サン・マルチンニオ耕地と共に最も険悪な紛争事件を起こした所である。

引率家族は五十二家族、二百十名（男一四〇）この五人通訳中最も大家族を割当てられた不運の人である。

福島県二十一家族七十七名（男五三）

熊本県十九家族七十八名（男五〇）、広島県九家族四十二名（男三二）、宮城県二家族十名（男七）、東京府一家族三名（男二）に依り編成されていた。

移民たちの反撥と耕主側の態度に耐えかね移民総大退耕の八月二十五日に先立ち通訳を離職しサンパウロに帰った。

耕地就働わすか一カ月余りの間に独身者食堂の娘ジヨゼフィーナさんと甘い恋をさゝやいたというローマンスもある。

る。

しかし加藤順之助氏は感情家で、病的な潔癖家でイコジ
な点が多かった。

その性格が禍いしてか、後年リンス管内奥地の日本人農
家の一室で、誰の介抱を受ける事も無く悲惨な死をとげた。

一九一九年当時は伯刺西爾時報編集部に勤めていた。

語学の天才で、通訳五人男中の第一人者であった。

加藤氏を知る人にして現在彼を褒める人に逢わないこと
は遺憾である。

賭博が好きで、ビシヨ賭けは日常の仕事であった。

生涯独身を続け、淋しい放浪生活を続けて肺を患ってい
たが、これが命とりとなった。

仁 平 高

好かれた人柄

秋田県出身、東京外国語学校スペイン語科卒業。

笠戸丸第一回移民の通訳として移民より先行し、シベリ
ア鉄道経由でブラジルに渡った。

五人中の大野基尚氏と共に妻帯者で、綱子夫人は笠戸丸
で来伯した。

仁平氏はソロカバナ線トレゼ・デ・マイオ駅ソブラード

耕地附となり、山口県人九家族二十八名（男一六）愛媛県人六家族二十一名（男一四）合計十五家族、四十九名を引率して七月六日收容所を出發した。

夫人とは着耕後数日を経て離縁することになり、移民の就働状態視察に来た上塚周平、水野龍。三浦荒次郎諸氏に依頼して出聖させたが、夫人は離婚後聖市で家庭奉公に住込んでいたが、後に日本に歸った。

船中において夫人をめぐる噂が離婚の原因となったといわれる。

仁平高氏は大変親切な男で、人好きのする気質を持っていたが、ソブラード耕地通訳としての就任期間は短かった。

通訳一名の月額二百ミルレースの負擔に耐えかねた耕主より「僅かな日本移民に通訳の必要なし」と、解職になり、サンパウロ市に歸っていた。

その時は、香山六郎氏とタバチンゲラ街で一部屋を借り同居していた。

仁平は仕事にも行かず、毎日ゴロゴロしていたが、ジヨーガ・デ・ビシヨに當った運のあった日は必ずパステスを二ツ香山六郎氏の寢台の上に置く習慣を欠かさなかったという。（香山六郎氏談）

ヅモント耕地を逃げ出して来た熊本県人藤本未人氏の大工職場に助手として朝はやくから、夜おそくまで働いて帰

る香山氏に与えるささやかな彼の友情であつた。

一九一〇年六月二十八日サントスに日本移民第二陣が着いてからのちに耕地通訳になつていた香山六郎氏がカンピーナスちかくのジョアキン・エンジヨ駅ガリローバ耕地で通訳をした時代のはなしである。

香山氏の話によるとこの耕地に配耕された新移民、富山県上新川郡出身青木吉太郎さんの娘にミヨ子さんという素晴らしい美人がおつた。

仁平高氏はこの娘さんに懸想して一生懸命に熱をあげた。香山六郎氏に対して仁平氏は「コラ香山・・・、貴様は笠戸丸船中でオレの女房をモノにして楽しんだか知らないが、今度のこの娘は貴様にはとらせぬぞ：」と何時もおどしていたが、遂に目的を達し夫婦となつた。

一九〇九年当時は海興の青柳郁太郎氏の通訳として植民地建設の候補地物色の衝にあたり、イグアツペ植民地に白羽の矢をたてしめた、後年肺を病み、日本に帰つたが一九一八年三月東京において死亡した。

大 野 基 尚

ヒゲで移民威壓

大分県出身。夫人松子さんは笠戸丸に乗込み、シベリア鉄道で先発した夫とサンパウロで落合つた。

五人の通訳中でも“策士形”といわれた。

しかし、大野氏のポリチケーロぶりは何時も“下手”がつきまとい、すぐハゲて行くのが落であった。

心の配りも当を得た処もあり、自己の堂々たる体軀に似合ったヒゲをたくわえていた。

ロヒゲ、アゴヒゲは偉い人が生やすものと考えていた日本人の通念にも即應していたし、なお当時はポルトガル系ブラジル人などヒゲ流布時代でもあった。

大野氏のヒゲはその山高帽と共に充分に移民を威圧する道具のようでもあった

現在は郷里大分県大野郡大野町の町長の要職にあり健在である。

通訳として勤めた耕地はイツーエンセ線イツー駅リロレストタ耕地で、沖縄県二十三家族百七十三名（男一四八）を引率し廿七日に収容所を出発している。

嶺 昌

ブラジル語講義録出版

群馬県出身、東京外語スペイン語科卒業“五人男”と同じく笠戸丸より前にシベリア鉄道經由渡伯した。

配耕所属地はモジアナ線カナーン駅カナーン耕地で、沖

縄県二十四家族百五十二名（男一二八）を引率して耕地に入った。

氏も移民対耕主の間にあってその調停に苦しんだ沖縄移民を勧誘した移民周旋屋が調子のよい宣伝をした崇りが嶺氏の肩に覆いかぶさったものであった。

日頃身の危険を感じてスペイン式の長いピストルを二挺携帯していたが、使用するような事件は起らなかった。

一九一二年にブラジル語講義録を出版し、後輩への良き指導書とならしめた。

一九一九年当時、伯刺西爾時報紙面のブラジル語講義欄に才腕をふるった。

サントスの副領事に任せられたが、同地におい病歿した。古い人たちの話によると実に「ヒョウタンなまず」式で、要領の得ぬ態度を示す性格であったが、その反面確実に要領をつかんでいるという型の人であったそうだ。



笠戸丸第一回移民”側面史”

日本の花火にビツクリ

ブラジル開港100年記念博飾る

ブラジル開港百年祭に日本の花火が打ちあげられ、その見事さにブラジル人をビツクリさせ、すっかり面目をほどこしたのは笠戸丸第一回移民渡伯の副産物だった。

ブラジルの歴史をみると欧州を席捲したナポレオンの侵略を受けたポルトガルのドン・ジョン摂政はドナマリア女王から王族一同を引つれブラジルへ避難し、一月二十四日バイヤに到着した。ここに一カ月滞在してリオに移ったが、ここでポルトガル仮政府を組織してリオで首都の宣言を行うと同じにいままで本國政府に隷属していたブラジル貿易も自由的になり一月二十四日國王、入伯日をもつてブラジルの各港は開放される旨世界に宣言した。そのちょうど百年を記念して一九〇八年に開港百年祭が一カ年にわたって行われリオのポン・デ・アスーカル付近で博覧会などが賑やかに催された。祭典の中心は九月七日の独立記念日であった。花火打上げはこの九月三日からはじめられたが、この初日には内田定槌公使夫妻や武官の伊丹少佐らもペトロポリスから来て、見物した。博覧会に打上げられた日本の花

火は水野龍氏が笠戸丸第一回契約移民と一しよにつれてきた三原万次郎、柏木某（花火職人）松田宇一（助手）の三人によって打上げられたもので、この花火は玉屋のもの、この時第一回移民より二カ月早く来伯した山県勇三郎氏が鍵屋の花火で参加している。

ブラジルの空を色どつた日本独特の花火は観衆の好評を博し 同じく参加した英国の花火はどうてい日本側の足元にも及ばなかった。



写真は水野龍氏（中央）に連れられて渡伯、リオのブラジル開港百年記念博覧会で日本の花火を打上げた三原万次郎さん（当時二十七歳）と妻トヨ子さん（左〓当時二十七歳、渡伯せず）

“移民争議”各耕地で起る

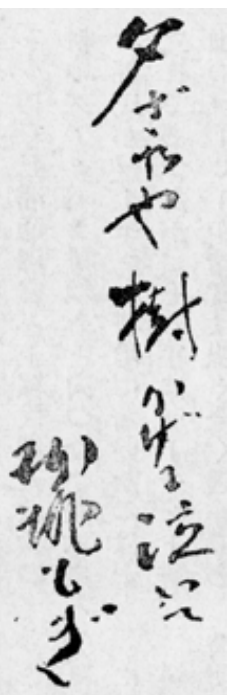
(コラム)

『第一回移民が配耕された年はコーヒーが不作で各新地ともコーヒー結実が少なく。採収賃が唯一の収入源であったコロノ生活にとってこれは大打撃であった。移民たちの苦労も深刻化し、こういうことが配耕間もない各耕地で“移民争議”が起る原因となった。水野龍氏とともに“移民の父”といわれている上塚周平氏は瓢骨と号し俳句をよくしたが、その当時の様子を

『夕ざれや樹かげに泣いて珈琲もぎ』

と詠み、こう説明を加えている。

「その当時珈琲採収賃一俵五百レース也、三人家族にて僅かに二俵を出でず」(カットの俳句は上塚周平氏の筆になるもの)』



戦後日本から来た移民をめぐって退耕や脱耕事件がよく問題となるが、これは何も目新しい事件でもない。第一回移民など配耕一カ月あまりで紛争を起して退耕している。いくなれば退耕事件は “笠戸丸以来” 移民にはつきものだ、ということになる。

トップ切ったゾーモント耕地の紛争

第一回移民たちを六つの耕地にそれぞれ配耕させた後、移民会社代理人の土塚周平氏は日本公使館の三浦通訳官とそれら各耕地を巡ってサンパウロに帰って来たが、移民回会社の事務所の机にホホ杖をついたなりガツカリしていた。それは移民がサントスに着いてから一カ月あまりの七月十四日のことであつた。書記の香山六郎氏が「耕地の様子はどうでした？」と聞くと

「移民たちはみんな食えぬと騒いでいた、コーヒーが少しもなっていないので、一日三人家族で働いて一俵半か、二俵しか穫れない。あれでは全く食って行けぬ、みんなの不平も無理もない——」

上塚周平氏の面持ちは暗かった。それから四日目、ゾーモント耕地から四名の独身青少年がサンパウロに出てきてブラス駅に着いたものの行先もなく迷っていると藤崎商店に

知らせがあつた。これらは日本人の耕地逃亡第一号で間崎三三一、大藤栄太郎、須山勘一、山野政一の四名だった。上塚代理人が説諭して、とにかく耕地へ帰らせたが、当時十六歳の山野政一少年は帰耕後発熱して病床についてしまった。耕地の医者はエキリだと診断、八月五日に遂に死亡した。第一回移民配耕後初めての死亡者である。

ゾーモント耕地に配耕された移民はリベロン・プレート駅に着いた時は音楽隊で歓迎を受けたほどだったが、耕地の移民の宿舎があまりにひどいので、第一印象を悪くした。移民たちが案内された長屋は、土間に枯草が薄く敷いてあつただけで寝台もない

「俺たちは馬じゃない」という不平が移民の間に起つた。それでも一同は汽車旅行の疲れで、その夜は枯草の上に寝た。翌朝通訳の加藤順之助氏が耕地の監督と一しよに、移民たちの仕事を協議するためコロニアを巡ってきたとき、熊本県の或る青年は、その長屋の枯草の上に四つばいになってヒヒーン、ヒヒーンと馬の鳴き声を真似ねて、跳ねまわつてみせた

一同はドツと笑ったが、加藤通訳にはそのユーモアが解らなかつたらしく、結局移民たちを叱りつけ、かえって怒らしてしまった。

六月二十九日入耕後、七月五日まで、各家族は家屋の決定寝台作り、仕事の準備を終えて六日からコーヒー採取を

始めたが、一家族三人で僅かに四十五キロにしかならず、移民たちの心には不安の念が高まって行つた。

その三日目に三浦通訳官と上塚移民会社代理人とが、加藤通訳の案内で耕地に姿をあらわしたのである。三浦通訳官の計らいで耕主はその翌日から日本移民をいままでより結実の多い畑に移したが、一家族一俵半位の採取高ではどうにもならなかった。さすがの上塚氏もまああとなだめるより仕方がなく、サン・マルチンニヨ耕地へと去つた。この耕地では一家族三俵ぐらいの成績であつた。ゾーモント耕地の移民たちの不平からくる不穏な様相を“移民の草分け”鈴木貞次郎通訳に話して至急にゾーモント耕地に行き移民たちをなだめてくれと依頼した。

そうして三浦通訳官と上塚代理人は次の耕地グアタパラ耕地へと向つた。鈴木貞次郎氏がゾーキント耕地に着いたのは十二日であつたが、その年はゾーモント耕地のコーヒーの結実が悪く全く凶作であつた。そこへもつて来て加藤通訳の傲慢な態度に対する不信と不満が火に油をそそぐような結果を招き、不平は爆発しており、鈴木通訳もどうにも手のつけようがなかった。

八月一日には耕主と移民収容所から移民が不穏の状態であるからの通知を受けて上塚代理人は宮崎信造通訳（日本公使邸にいた。東京外語生）を伴つてゾーモント耕地へ出張した。七日間滞在したが移民の不平はおさまるところか

高まる一方で手のつけようがなく、とにかく二人はサンパウロに引上げてきた。

八月十五日宮崎通訳は上塚氏の代理としてまた同耕地へ出發したが、それは移民会社が神戸で預金させた移民の一部預金払戻しのためであつた。翌日宮崎通訳は耕地を去つたが、その夜移民は各県代表者會議を開いて次のような二項を決議した。

①他のコーヒー結実多き耕地へ転耕さすこと。

②移民の要求を耕主側に通辯せず、移民に傲慢不その態度で臨む加藤通訳罷免の貫徹

公使館の三浦通訳官はサンパウロ市で水野皇國殖民会社社長、上塚代理人、宮崎通訳らと協議の上、ゾーモント耕地へ出張した。上塚代理人の温情主義、平身低頭して涙をうかべての願ひも、移民の強硬な態度の前には効果なく、遂に会社と移民の妥協は成立せず、三浦通訳官も移民と耕主側との“労資争議”の調停に努力したが、これも成功せず、結局五十二家族の移民は八月二十五日サンパウロ移民収容所へと引上げてしまった。

移民の紛糾原因

ゾーモント耕地の紛擾原因をみるとまず第一にコーヒーの結実が少かつたこと、さらに採取労働が不慣れで収入高

か予想の四分の一にも達しないためから生活費の不安、一日、一日と借金が増えてくることから、このままでいけば日本における渡航仕度金の高利が払えないという苦悩からだった。次に労働の過労と料理方法を知らぬためブラジルの気候に合った食滋をとることが出来ず、軽症患者が続出し家長は非常にあせり、それが家族にも反映するといった状態だった。その当時の日本移民の食事のやり方をみると、朝と昼はブラジル米を日本式に炊いてバカリヤオ一片を焼いて湯漬けで済ました。夕食は小麦粉ダンゴに豚の脂肪を一サジとかした副食物。蔬菜類も不足肉類も足らなかったという。これでは炎天の下で全身汗まみれになって働くコーヒー採取労働に耐えられるわけはなく、体は衰弱するばかりだったという。こういう生活環境が不慣れ、言語不通という状態では通訳が唯一の頼みの綱だったがその通訳自身あまり役に立たなかった。

当時のゾーキント耕地の物價は、精米（アグリア）一俵十九ミルレース、小麦粉一袋十三ミル九百レース、フェジョン一俵十六ミルレースであった。

東へ西へと分散

移民収容所へ引上げたゾーモント耕地日本移民は、改めて労働局において就働契約をして再出發した。五十二家族

中、独身者二十八名はサンパウロ、パラナ鉄道のフアシナ方面へ鉄道工夫として契約した。一行をリオ州マカエ植民地を飛び出て来た有川新吉氏が通訳の役を引受け引率していった。福島県、宮城県の十五家族は、目黒静氏（宮城県移民代表、ゾーモント耕地争議の主謀者の一人）が率いてソロカバナ線アグードス駅から四十キロ奥ビアード耕地へ向った。熊本県七家族、広島県二家族、合計九家族の移民はノロエステ線サン・ジョアキン駅耕地へ香山六郎氏が引率して入った。この九家族移民がノロエステ線における日本人植民地建設の草分けとなった。他の二十八家族中、四、三家族とそれぞれ分散してソブラード耕地やイタチーバ耕地などと契約したが、サンパウロ市にとどまって家庭奉公に、大工、ペンキ職人げ、などの職を求めれ家族もあつた。中には男子は荷物をかつぎ、婦人たちは子供を背負ってリオ・デ・ジャネイロ州のメスキック駅まで徒歩で移動した人たちもあつた。隣国アルゼンチンへ、サントス港から渡ったものも六、七家族あつた。当時サントス港からブエノス・アイレスまでの三等船賃は一人当り二十五ミルレースであつた。ノロエステ線に入つた九家族は次の人たちで、ノロエステ線地帯邦人の草分けとなつた。

△広島県

山田勘一、神田寅三、須山勘一

△熊本県

大村千太郎、宮部彌平、中川仁蔵、上田豊記、本島儀男、井手喜平、檉本源蔵、橋口重政、村崎豊重

サン・マルチニオ耕地でも争議勃發

ゾーモント耕地を引上げた移民の一部がノロエステ線へ新しき安往の地を求めて出発したのは九月三日だった。ちょうどここに移民の先駆者鈴木貞次郎氏が通訳をしていたサン・マルチニオ耕地の鹿兒島移民も動揺していると耕主から移民収容所長に電報が入った。これは直ちに州農務長官から在リオ帝國公使館へ転電された。

水野皇國殖民会社社長は三浦通訳官をわずらわしてサン・マルチニオ耕地へ出張した。

移民側の申出は『従来貸銀支払いは三カ月になっていたが、毎月払いにしてほしい、我々は日本出発の際に、船賃その他支度金もみな高利で借りてきている。一日も早くこれらの借金を返さねばならぬので気が気でない。三カ月まで待てないまた出来れば一家族に四、五百ミルの前借を要求する。大工の賃銀を五ミルに増やしてほしい』というのであった。

これに対して耕主側は『毎月払いは出来ぬが八月までの精算書は出来ているのでみせてもよい。食料品を供給するほ

か、一家族に対し二十乃至二十ミル位までの前貸はしてもよいが、四、五百ミルの前借金は到底出来ない』この双方の間に立って公使館の三浦通訳官と水野社長が調停に努めたが、移民側の主張貫徹の意志は強く遂に妥協の余地もなく、争議の主謀者原源八さん以下二十七人を耕地から追放した。追放された者のほとんどはサンパウロへ、また亜国へと新天地を求めていった者もある。

グワタパラ耕地の紛擾首謀者追放

サンマルチニオ耕地の争議が一段落して間もなくグワタパラ耕地の紛擾が起きた一種の争議の連鎖作用である。というのはサンマルチニオ耕地争議の首謀者が追放処分になったが、結果においては自由の身になったことになる。これをうらやんだ二、三の者が策動したのだが平野運平通訳は彼らの機先を制して無通告、即時退耕追放処分に出た。上井忠、西仁志両氏の構成家族で両氏は鹿児島県移民総代表者であつた。彼らもサンパウロへ出て、アルゼンチンへと渡っていった。アルゼンチンは笠戸丸第一回移民コーヒ―地耕地生活落伍者の転向更生地の観があつた。(香山六郎氏著『移民四十年史』による)

通訳にならぬ通訳

配耕された移民たちにはそれぞれ通訳がついて行った。ところが『通訳五人男』と通訳ぶりは滑稽千万であつた。フロレスク耕地で某沖縄県人が酢の必要にせまられ大野通澤を連れて耕地の売店に出かけた。流暢なるブラジル語で通訳は酢を求めた（移民にはそう見えたらしい）ところが店主はポカンとしている。大野通訳はスッパそうな顔をして顔の皮を縮めたり伸ばしたりして見せるが一向に通じない。出してくるのは酒やカルネ・セツカ、或いはサルジンニアの鹽漬といったものばかり。大野通訳、「ここには酢はないのだ」――移民は通訳がそういうのだから間違いないと思つて帰つた。後になつて判つたのだが、酢は大野通訳の目の前にずらりとならんでいたのだという。

耕地から移民の逃亡相つぐ

鉄路を沿って徒歩でサントスへ

カナーン耕地

逃げろ！逃げろ！

モジアナ線カナーン耕地に配耕された沖縄県出身の二十四家族移民は、その耕地のコーヒー結実が不良のため、これまた予想と違った。沖縄出身者は暑い気候にも粗食にも堪えたが、日本出発の際に負債となっていた渡航仕度費用を一日も早く郷里に送金したいという焦燥感にかられていた。耕地生活の前途に不安を抱きはじめて時に、彼らの脳裡に浮んできたのは、笠戸丸の入港したサントスの海の色であつた。青い海の色は故郷をしのばせた。そして港町はコーヒー耕地よりも賃銀が高かろうーと考えた。他の耕地に入った移民が要求貫徹のため労資闘争を展開していると、き彼らはそんな面倒くさい手数より一つそ逃げ出してしまえと耕地を脱走した。もちろん懷中は淋しいので、鉄道線路に沿って歩き出した。

夫婦して荷物を背負いながらサンパウロへそして憧れの港町サントスへと移動した。耕地の嶺通訳の知らせで十月二日三浦通訳官と上塚代理人が馳せつけたときには六家族は既に逃亡していた。残りの十八家族は一まず耕地に落ちついて就働したが、その後逃亡者はボツリボツリと絶えなかった。

最初に脱耕してサントスに移った六家族はシリア人の宿屋に泊りこんだが、もちろん宿賃もない、そこで、 R 支払不能通告 R をやった。

驚ろいたのは宿屋の親爺である。とにかくサンパウロの移民会社に掛け合うより方法はないと宿賃を請求した。移民会社も、怪しからんと移民を怒ってみてもラチがあかず、仕方なく宿賃一コント五百余ミルを支払って一應清算し、彼ら移民にサントス港の築港工事の土方の仕事を周旋した。この逃亡六家族が、今日サントスにおける沖縄系市民の始まりである。

フローレス耕地

金のある所探して

フローレス耕地に配耕された沖縄移民二十六家族（代表は沖縄移民総代表城間眞次郎氏）は眞剣に働いた。この耕

地は他の耕地よりコーヒーの実りもよかった。

しかし彼らは渡航費負債を年内に送金して決済せねばならないというので頑張ったが、その希望はとても達せられそうもない。彼らの就働契約期間は六カ月であつた。六カ月間になんとか甘いもうけは他にないかと気をあせつた。この“甘い儲け口”をさがして、彼らは耕地を逃亡した移民総代の城間眞次郎さんは、移民逃亡の原因をこう説明している。

渡航費の借金返済を急ぐため、もうからぬ珈琲耕地より、もうかる処へと移転したい。その遠因は、私たちが沖縄の那覇出発前に小祿村出身の宮里某が北米、カナダ方面より日本金三千円を儲けて帰国した時の土産話によるものと思う。

宮里某は“私はカナダで一カ所に定任せず、何時も金もうけのある場所を探しまわったため、このように容易に金を集めたんだ諸君も伯國に行ったら何時も耳をたてて何処にどんな仕事があるか、何処にこの位の金もうけがあるがとこういう話ばかり聞いて歩きなさい”と聞かされて来た連中だから金のもうからぬ珈琲耕地を飛び出しサントス方面へ早くも走ったものといえよう。フローレス耕地では翌年一月二十五日、五十二名の沖縄移民も上塚代理人と耕主との協議途中、耕主の嫌忌にふれて退耕させられてしまった。

五十二名が耕地で間作していたミーリヨ、豆や、耕主から請負って焼いていた木炭七百俵もみんな没収されてしまった。

当時の移民の財産としては決して少ないものではなかった。

一方この耕地の通訳をしていた大野基尚氏も翌明治四十二年正月に解雇されていた。



故 上塚周平氏

四世の系図

國際結婚組と純日系

二世第一号

移り来て五十年――第一回移民が播いたタネはブラジルという沃土にスクスクと育ちコロニアはいま二世の花盛りである。

この二世から三世が、そしてもう四世さえが生れコロニアという名の樹木は枝葉を拡げているところで「二世第一號」は誰だろうか？――。

一九〇八年六月十八日サントスに着いた笠戸丸第一回移民は、その夜は船中で過し、翌十九日正午汽車でサンパウロ収容所に着いた。そして耕地へとその準備にごった返している二十九日、ヅモント耕地に配耕された熊本県人中川仁蔵さん（四〇）の妻トキさん（三四）は出発を前にして産気づいて男児を生んだ。喜んだ水野龍氏が名付親となって「渾二」（コンイチ）と名づけたが、「二世第一號」のコンイチ君は十歳のときに父母とともに日本に帰り若死にした。その次が広島県人山田勘一さん（二三）の妻ヲリエさん（一九）がヅモント耕地において七月二十九日男児を生んで和

雄と命名したが八月十五日に死亡した。続いて第三番目は
ヅモント耕地を退耕して九月四日ノロエステ線サン・ジョ
アキン駅の同耕地に入植した熊本県人橋口重政さん（二二七）
の妻タニさん（二二七）Ⅱ現香山六郎氏夫人が十月十四日に
長女ローザ・芳子さんを生んでいるがこの芳子さんこそ生
存している日系伯人第一号である。Ⅱ（以上年齢は当時）

四世第一号

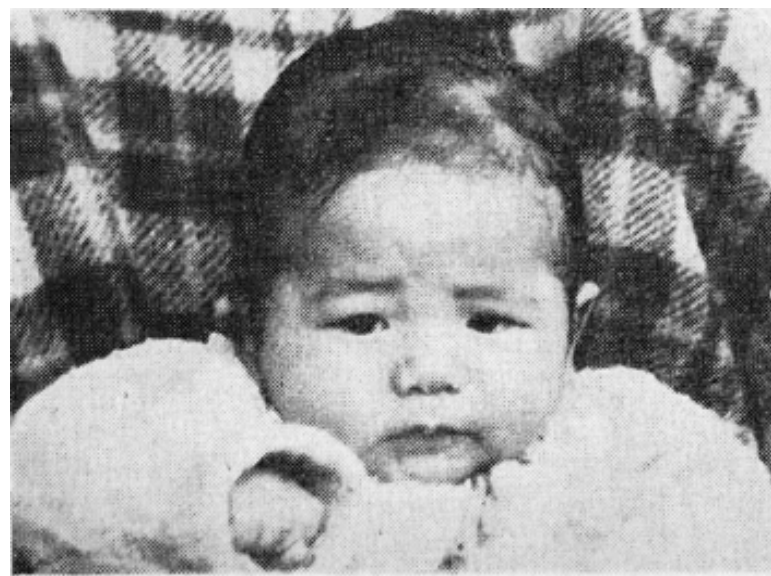
橋口ローザ・芳子さんはその後英國人ウイリアム・ジョー
ネス氏と國際結婚して一男二女の母となったが、三世長男
ウイリアム・重政君（二六）とノルマさん（二六）とのに
生れたウイリアム・テルセイロちゃん（二）が第四世第一
號ということになる。この芳子さんの場合は國際結婚だが、
一方純日系の第四世がいる。その系圖をみると一九〇八年
十一月二十八日、沖縄県人宮平牛助さん（二七）の妻カメ
さん（二七）Ⅱいずれも当時の年齢Ⅱが配耕地のイツー駅
フロレスタ耕純日系第四世―新城ルイス・セザール・幸男
ちゃん一九五八年二月二十八日生地で長女ウトさんを出産
した。ウトさんは金城幸盛さんと結婚し二男三女をもうけ
たが、その次女ラウラ・秀子さん（二六）が新城和男さん
と結婚一九五八年二月二十八日に男子を生んだ。ルイス・セ
ザール・幸男ちゃん、第四世となるわけだ。



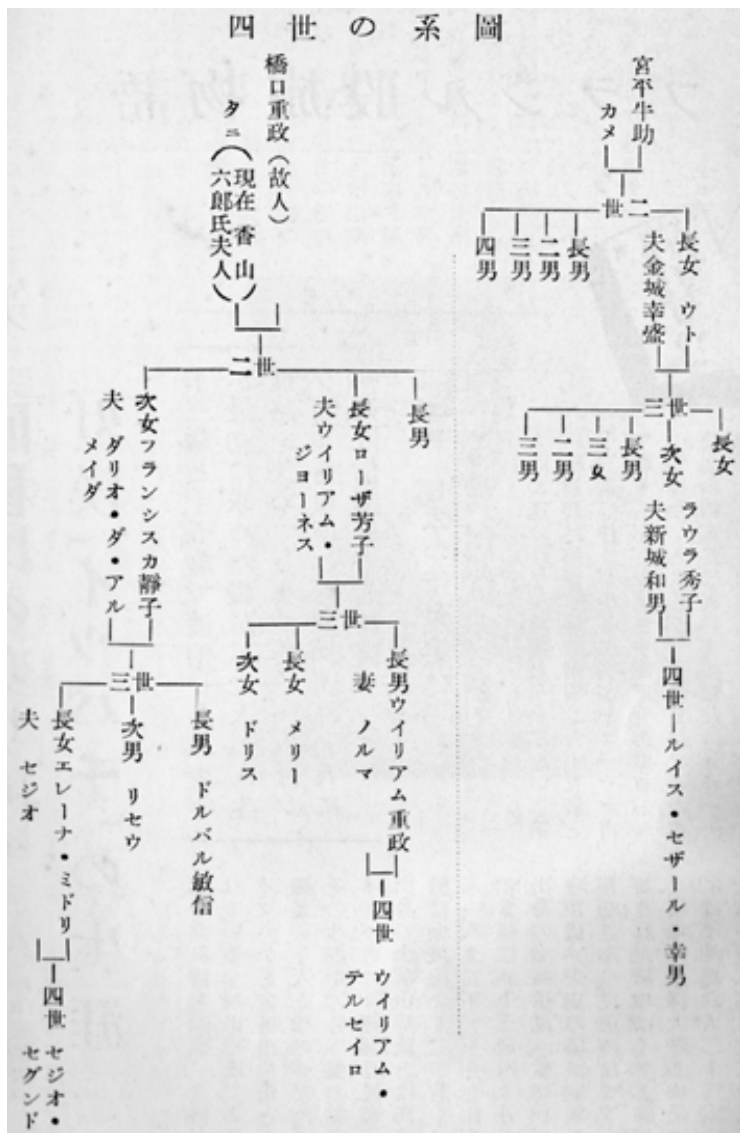
写真Ⅱ前列向つて左よりローザ芳子さん（二世）ドリスさん（芳子さんの次女）ウィリアム・ジョーネス氏（芳子さんの夫）。後列向つて左よりウィリアム・重政さん（三世Ⅱ芳子さんの長男）ノルマさん（同妻）ウィリアム・テルセリロちゃん（四世）メリーさん（芳子さん長女）メリーさんの婚約者



写真向って左からウトさん（二世Ⅱ金城幸盛氏夫人）ラウラ・秀
子さん（二世　ウトさんの次女）ルイス・セザール・幸男ちや
ん（四世Ⅱ秀子さんの長男）



純日系第四世 新城ルイス・セザール・
幸男ちゃん 一九五八年二月二十八日生



【備考】▼橋口さん一家の現在生存者第一世3名、第二世7名、第三世八名、第四世二名、配偶者五名合計二五名。その他タニ夫人は香山六郎氏と再婚しているのでその間に第二世男二名、女二名、第三世七名がいる。▼宮平さん一家では第一世二名、第二世五名、第三世二十八名、第四世一名、配偶者六名合計四十二名となっている。

ブラジル股旅物語

第一回移民の変り種

好漢「イツパチ」の生涯

十三歳と十五歳で渡伯した二少年が最初に求めた職が、二人の人生航路を決めてしまった。一人はブラジルを風びしたバクチの名人に一人は信望厚き歯科医として・・・

日本の空を望み

屋根の上で泣く

人間の運命ほど不思議なものはない。第一回移民の構成家族で渡伯した十五歳と十三歳の仲よし少年二名がサンパウロ市で職をさがした。まず家庭奉公の口がみつかった。ところが、その日が、その奉公先の職業が二人の人生航路の羅針を決めてしまったのである。

この二人の少年は、後年ブラジル全国に名をとどろかしたバクチの名人、「イツパチ」こと儀保蒲太氏（故人）と現在も聖市で歯科医を開業、人格者として尊敬されている金城山戸氏である。

イツパチと金城山戸氏との友情は、その職業こそ天と地のへだたりがあったが、その生涯を通じて魂の結びつきで

あった。イツパチは沖縄県島尻都南風原村津嘉山出身で金城山戸氏とは同村であった。年齢は金城氏より二つ若く、明治二十八年（一八九五年）十月七日生れ。笠戸丸渡伯當時は満十三歳四カ月であった。同村出身の金城善助（当時18歳）妻オサ（当時18歳）夫妻の構成家族として渡伯した善助さんの従弟になっている。着伯後配耕された耕地はイツー駅管内のフローレスタ耕地（通訳大野基尚氏）で、この耕地には、沖縄県人二十三家族、百七十三名（男一四八名、女二十五名）が配耕されていた。

イツパチ少年は渡伯の都合上構成された家族と別れ金城山戸少年と一室に同居したが彼らは年少者でコーヒー園の重労働は無理だというのでもっぱら水汲み役として働いた。ひょうきんで快活なイツパチは実直温順な金城少年とともに耕主に愛され二人はやがて耕地事務所付きの雑務に廻された

その仕事は主として山羊の乳しぼりであった。

放牧されている山羊の群を追う二人の少年は、輪にした網を頭上で振るなどカウボーイの真似をして、遠く故郷を離れた淋しさをまぎらわした。日中はそのように仕事で気をまぎらわすことが出来たが、やがて一日の仕事も終え冷たい部屋に帰ってきてからの淋しさには耐えられなかった。望郷の想いにたまりかねて毎日のように二人の少年は屋根の上にあがって、両親のいる日本の方角をながめてはワ

ンワーンと大声をあげて泣いた。

肉身をしたう二少年の涙は静かに迫る夜霧につつまれて耕地の上をしめらせた。

ニツク・ネーム「イツパチ」の起り

すばしこくて快活なイツパチは笠戸丸船中でも人気者だった。売店係の菓子売りとなり。菓子を入れた箱をさげては移民たちのたまりを廻つては「一發（イツパツ）！一發（イツパツ）！」と呼声をあげて菓子を売った。

イツパチ少年の気持ではこの「一發」とは「お菓子を一ついかが」という意味なのだが、他県人の多い船中ではこの少年の言葉の意味がわからず名前だと思いこんでイツパチさん、イツパチさんと呼び可愛がった。

このアダ名は彼の四十年の生涯を通じて広くブラジルに知られ、その死後現在でも好ましい人柄とともに人々の記憶に残っている。バクチの名人イツパチの名を知っている人は多いが、本名の儀保蒲太を知る者はきわめて少ない。イツパチの名稱こそバクチの世界で生涯を終えた彼が勝負毎に「一發の運」を賭けたにふさわしいアダ名であつたといえよう。

右と左に別れた奇しき”人生航路”

その後イツパチ少年は退耕する家族についてサンパウロに出て、元競馬場のあつたモツカ区で野菜作りをしていた矢崎節夫氏のところへ身を寄せた。

一方金城少年は渡伯一年後、耕地に捨て残された知念某という娘さんと二人でサンパウロに出てきた。頼りにしていた近親の者はみな夜逃げをして二人は置去りにされていたのだつた。

柳行李をかついで出聖した金城少年と落合つてイツパチは喜びにたえなかった。



「イツパチ」こと儀保蒲太氏

早速二人で仕事口をさがそうと町に出た、しかし、知人もなく、仕事をさがす手ずるもない。そこで年長格の金城少年の發案で、まず家庭奉公の口をさがそう。その方法として道路の右側を金城少年が、左側はイツパチと両側に分れて戸別毎にベルをおして「仕事はありませんか」とたずねて歩いた。

言葉の判らぬ二少年は「床も拭きます」「皿も洗います」と手眞似足眞似で就職をたのむのだが、なかなか仕事口はなかった。その時見知らぬ一伯人が「お前たちは仕事を探しているのか、ここに行けば仕事口がある」と紙切れに街名と番地を書いてくれた。喜びいさんで行つてみたらアベニード・チラデントスの刑務所だった。からかわれたのである。二少年は再び元の場所に戻って根氣よくベルを押して歩いた。その結果、金城少年はアウローラ街の歯科医ドートル・アルツール・アルベス・フレイラ氏の診療所で雑務係に採用された。

一方イツパチはサン・ベント街にあるオートモベル・クルーブのバクチ場に職を得た。このときから二人の人生航路のカジが決まってしまったのである。当時イツパチ少年は十四歳、金城少年は十六歳であった。

二十歳にしてバクチ界の花形

バクチの世界はイツパチの性格に合ったのだろう。彼はカルタにとりつかれたようになってカルタさばきの秘技、またインチキのカラクリの妙技を修得することに昼夜没頭した。

一九一五年彼が二十歳のときにはブラジルのバクチ界では花形的存在となっていた。そのたどる道はちがっていても金城氏との友情は続けられていった。歯科医として立とうと一生懸命に勉強している金城氏の傍らで鏡を前にカルタをさばくイツパチの姿があつた。

彼の手に握られたカルタは、さながら生命のあるもののようにだった。長くのびるかと思うと急速に縮み、両手の間に輪をえがいたり、垂直になって手中に落ちてくる札隠し、中札抜き、切り込み、覗き（手のひらに鏡をつけて札を読む）ガン打ち（札に目印の形をつける）その他、この道の秘技にすべて練達していた。

いつも兄貴格の金城氏をとらえて「金城決してバクチをやるな、こんなカラクリがある」と得意の術をみせたものであるイツパチが金城氏に兄事するその友情は深いもので、一九一七、八年当時ブラジルを襲ったスペインカゼで金城氏が病床にたおれるや、寝食も忘れて介抱し、一步も遊びに出なかった。たまたま薬局に行く途中、知人に呼びとめ

られると「今日は大変忙しいのだ。金城が病氣だ」と馳けて行ってしまったて一分の立話もさせなかったという。

カンポ・グランデにバクチ場を開く

イツパチは根は気が小さかった、というよりこういう裏街道をゆく勝負の世界ではみられぬ“善意”の持主だったようだ

或る時日本人相手にバクチをやり、敗けた相手が「イツパチ、貴様はイカサマ賭博で俺の金を盗んだ」とどなり、短刀を抜いて脅かしたことがある。その時のことが身にしみたのだろう。金城氏のところへやって来て「俺はバクチ打ちはやめた、堅気になって地味な生活がしたい。俺を歯医者にしてくれ」としばらく技工の方を手伝っていたことがあった。しばらくいるうちに、瓢然と金城氏の許を去り、マット・グロツソ州カンポ・グランデに移った。一九一八年でイツパチが二十三歳の時である。

カンポ・グランデに落ちついた彼はほどなく同地の有力者たちと懇意になった。

彼の人懐っこい性格がどこにいても愛されたのである。一方金城氏は一九一八年七月二十日高知県人浅倉岩吉氏三女楠枝さんと結婚し、スイート・ホームを築いていた。



金城山戸氏

カンポ・グランデから出聖するイツパチはいつも金城さんの家に滞在した。そのころカンポ・グランデで玉つき場を經營し奥の間で秘かに賭博場を開いているという話であった。最初は玉つき台を三台ぐらい備えた程度だったが、後年大きな家を建て盛大に營業した。

出聖しても仕事のことについては一切金城氏にも語らず、夜になると何処かに出て行き朝方に帰ってくるという風であった。また金城さんからトランクを幾個か借りて、何を買ってくるのか詰めていたが、それは新しい賭博上開設の準備であった。真面目な金城さんに意見されやしないかと気にしていたらしい。イツパチにしてみれば、そのたどる道はちがっても、金城さんに負けられぬという気持ちもあつたのだろう。

イツパチはいつも言っていた「私は絶対に日本人とはバクチをしない。日本人は勝負に負けると」盗られた」という。男と男の一六勝負に負けて悔やむような人間とはバクチは打てぬ」先年バクチで敗けた日本人からドスで脅かされたことが忘れられなかったのだろう。

バクチの名人に背を向けた”運目”

イツパチは決してインチキ賭博はやらなかった。インチキの方法を知っていてもそれを使わなかった。特に日本人に対しては眞面目な勝負をしていた。彼がバクチの名人といわれたのは、札読みの才と特殊なその道のカンに優れていたためにいつも彼に運目があつたのである。

一九二三年イツパチの無二の親友金城山戸さんは、日本人最初の歯医者としてピンダモンニアガーバ歯科専門学校を卒業。

歯科医院を開業、聖市上流社会に絶大なる信望を得て、また三人の子供の父として幸福な家庭を営み、一九二六年三月夫妻そろって母國を訪問した。どうせ故郷を訪れるならイツパチと一緒にと考えてカンポ・グランデにいる彼に知らせた。

イツパチは早速出聖して来た。「出帆日までには訪日の仕度をしてくる」との言葉を残して何処ともなく旅行に出た。

しかし、約束の出帆日は迫ったがイツパチの姿は見えたか
つた。金城さん夫妻出発直前に「都合で訪日できないから、
故郷に帰ったら、私の両親によろしく・・・」との手紙が
カンポ・グランデからではなく、とんでもない方向のポツ
ソス・デ・カルダスからもたらされた。

ポツソス・デ・カルダスはカジノがあるので有名な保養地。
イツパチは、一等船客として故国に錦を飾る金城夫妻と同
行するにはやはり一等で行きたかったが、それには莫大な
金が必要だ。金作りには小さなバクチでは一舉にそれをひ
ねり出すわけには行かない。そこでポツソス・デ・カルダ
スでサイコロに運をかけていたのであった。

しかし「あせりバクチは勝てない」という言葉があるよう
に、運は彼についていなかった。

後年イツパチは彼の生涯において、あんなにあせり気分
になった時はなかったと述懐していたそうだ。

当時を思い出して金城楠枝夫人は次のように語った。

「私たち二人が訪日するというので、世間の人は、如何に金
城が眞面目に働く男でも、そんなにお金がある筈もなく、
多分イツパチから借りたのだろう　：といわれましたが、
この時のイツパチさんはまとまったお金はありませんでし
た」。

郷愁に泣くイツパチ

一九二六年十月十五日サントスに着いた大阪商船もんでびでお丸で金城さん夫妻はブラジルに帰って来た。この（船には山本喜誉司氏、水上不二夫民ら夫妻が乗船していた）金城さんを出迎えたイツパチに郷土の土産話は盡きなかった。

故郷の両親が、金城が帰るなら蒲太（イツパチ）も一緒に来るだろうと家を建て嫁を物色して待っていたという話を聞かせられてイツパチは号泣して自分の不甲斐なさで親不孝の罪を詫び、涙は止まらなかった。

打ちのめされた痛々しい心を抱いてイツパチは悄然とマト・グロツソへ帰って行った。しかし、その心の一隅には必ず故国へ錦を飾ってやろうという決意に燃えていたであろう。イツパチが三十一歳金城さんが三十三歳の時の話である。

独身生活に終止符

イツパチが打けた打撃は大きかった。それから数年が経った。突然イツパチから金城さん宛に妻帯したとの通知が来た。

返事を出したが、通信はしばし杜絶した。そうして、日本移民廿五周年記念祭（一九三三年）にはその妻を連れてサンパウロにやって来た。

妻女は福岡県人でキサオさんといい、イツパチより二、三歳年上のものであったが、どんな過去を持った人だか金城氏にさえ語らなかった。なんでもイツパチがボリビアへ旅行した時に知り合ったとかで、非常に苦勞を重ねてきた面影を持っていた。

しかし義理深い人情家で、世間ともつき合いもよく、日伯人間からほめられており、彼女を悪くいう者は一人もいないという人柄だった。

彼女を妻としてからのイツパチは放浪生活も止り、良き家庭人として、クラブ経営の他に住宅を建て地味な生活に入っていた。

故田付大使もカンポ・グランデに旅行して一回の面接であつたが、イツパチ夫婦が好きになり、ずっと交際を続けていた。

また、元日伯新聞社長三浦さく氏（故人）などは性格的にもイツパチと相通ずるところがあつたのだろう。交友特に深かつたといわれる。

イツパチ胸を患う

結婚生活は幸福であつた。しかし、この時には独身時代ブラジル全國をサイコロ一つに運を賭けて放浪した時代の不摂生がたたつて、彼は胸を患っていた。

日本移民二十五周年記念祭に出席のため出聖した時に診察を受けたが、病勢は樂觀を許さないことを知らされ、静養をすすめられ、サン・ジョゼー・ドス・カンボスの結核療養所に入院した。

キサオ夫人は病夫の療養費を稼ぐためにカンポ・グランデに帰りクラブの経営に専心していたが、一九三四年クラブの家屋が倒壊した知らせを受取り、イッパチは急いでマツト・グロッソにかえつた。

ほんの一時滞在のつもりであつたが、我が家であつてみれば、ついつい長くなり、その間に病勢は進む一方。再びサン・ジョゼーの療養所に来たときには既に手遅れであつた。

見舞いに來た金城さん夫妻の手をにぎり、

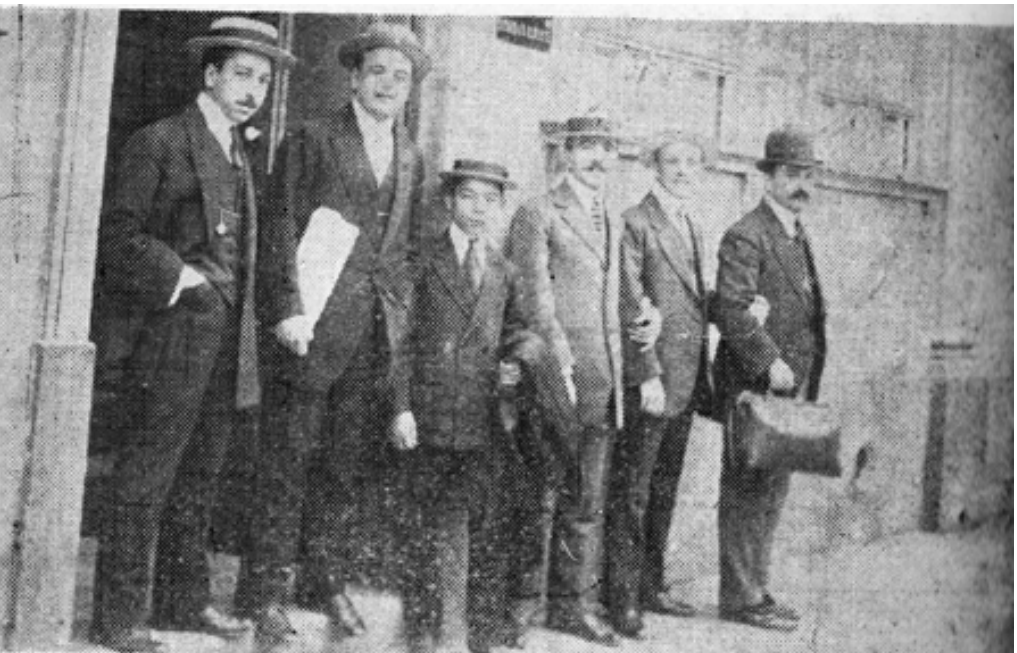
「自分は死にたくない」と語り、生への執着ぶりを見せたが、だれの目にも、もう死期のちかづいていることがおもわれた。

容態が悪化したので、カンポ・グランデの妻女のところへ金城さんから電報が打たれた。馳せつけた妻のキサオさんや金城氏夫妻らに見護られながら一九三五年四月二十三日、四十年にわたる数奇な生涯の幕を閉ぢた。

一天地六のサイの目を追つて三十数年：バクチ打ちが商売

であつたが・接する人たちから愛された好漢イツパチの死は惜しまれた。

遺骸は彼の希望通り、少年時代からの親友、金城山戸さんの住むサンパウロ市に運ばれアラサ墓地に埋葬された。



金城山戸氏が十才歳のとき親友「イツパチ」(当時十四才)と一しよに聖市で職さがしをし、歯科医院に就職したときの写真、向つて左より三人目が少年時代の金城山戸氏

イツパチの死後

イツパチの死後、妻女のキサオさんはカンポ・グランデに帰り、当時の金で借財百コントもあつたが、頑張つてクラブの経営を続けた。

女一人の生活には誘惑もあつた。だがキサオ未亡人はこれらに強くうち勝つてきた蔭には金城山戸さんの物心両面の力強い援助があつたようである。

苦しい財政ながらキサオ未亡人はクラブを閉鎖する折、イツパチの遺言を守つて雇人たちには、退職金としてそれぞれ三十コントに相当する不動産を与えたという。クラブの閉鎖後は、家屋を銀行に家賃二十コントで貸しつけて気楽な生活を送っていたが、寄る年波に故郷が恋しくなり財産を整理して一九五七年四月、養女に貰った姪を連れて帰国した。たしか六十四歳？だったと思う。故郷の実兄、福岡県浮羽郡吉井町大字福益、江崎敏夫さん方に落付いたという便りがあつたきり、その後の消滑息は分らない。

イツパチのことについていろいろと話をしてくれた金城山戸氏は最後にこう語っている。

イツパチは僕を兄のように尊敬してくれて、僕のいう事は無条件で聞いてくれた。ある時など、夜更しをして帰るいくら呼び起しても目を覚まさないので、頭から水をブツかけた事もあつたが、ただニタニタと笑っており、決して

僕に怒った顔をみせなかった」四十年の生涯をサイコロとともに生きてきたイツパチは、第一回移民の変り種の一人であろう。

聖市の邦人”埋葬第一號”

笠戸丸の着いた一九〇八年の七、八月頃の寒い寒い日であつた。九玉吉造氏は肺病にて死亡、アラサ基地に埋葬された。

日本人として墓地に入つた最初の人である。

この九玉吉造氏は鹿児島の人で、笠戸丸に先立つこと二年、一九〇六年五月十九日神戸出帆の欧州航路日本郵船讃岐丸（六千トン）にてブラジル向け出發した。

此の船には同じ目的を抱く明穂梅吉、太田為吉、中井夫妻、本田竹治家族四名、鳥居、安田良一、九玉吉造氏の十一名が乗っていた。

明穂梅吉、中井夫妻、太田為吉氏は佛國マルセイユでフランス船に乗替え八月初旬にサントスに着いて居るが、他の一行はロンドンに廻り、そこでゴタゴタがあり本田竹治一家は渡伯を思い止り、鳥居氏は残留し、長瀬、九玉吉造、安田良一氏等三名が一九〇六年八月二十日リオ港に着いた。

九玉氏は明穂梅吉氏と共に麦ワラ帽子工場やホテルの皿

洗いをして居たが軀が弱く、いつも仕事を休んでいた。

同居者は安田良一氏であった。

藤崎商会二代目支配人佐藤徳治氏は九玉氏の死をいたみ、葬儀に参列して帰ったが、その時オーバを着ているのにガタガタとふるえて「寒い、寒い」と云っていたが、これもとで風邪を引き、肺病となった。

療養に努めたが病勢が進み、一九一〇年一月二日死亡した。

この人がアラサ基地に眠る日本人の二人目である。

“移民の父” 上塚周平氏

ブラジル移民の道を開いた皇國殖民会社社長水野龍氏の女房役として第一回移民を引率して来伯した上塚周平氏は“移民の父”として、その死後二十三年の今日でも在伯邦人から敬慕されている。それは当時東大法学士として母國において“出世”の道がいくらでもあつたのを振り捨てて移民と苦勞を分け合い、植民者の苦しみを自分の苦しみとしてブラジルにおける邦人發展の“背骨”となつて、その生涯を捧げた崇高な精神が人々の胸をうつからである。

上塚氏が建設したノロエスナ線プロミツレン駅イタコロミ―植相民地は鈴木貞次郎氏と協同で一九一八年から開拓

されたものでこの建設には東大時代の親友菊地恵次郎氏の物心両面の力強い協力があったが、同時に現地においては間崎三三一、坂本留次郎、佐々木光太郎、香山六郎、鈴木季造、藤井正人氏ら上塚さんのためならと献身的努力を傾けた人々があつた。殊に間崎氏（第一回移民、現在も元気で第一線で活躍）が上塚さんのために、植民地建設に盡した功績は大きい。上塚さんの開発事業はこのほかに山根寛一氏（故人）と協同事業で一九二二年に開始したリンス駅奥四〇キロの第二上塚植民地がある。



イタコロミ―和巨村英三郎の「杉原三郎」

△略歴Ⅱ明治八年六月十二日生 熊本県下益郡杉上村大字

赤見出身、四十年東大法科卒、四十一年皇國殖民会社代理人として第一回ブラジル移民と共に来伯、移住者の指導に当った。昭和三年十一月今上陛下御即位の御大典に際し移植民事業功栄者として内相より銀牌を授与さる。八年十一月海外移植民事業に尽した功績により勲六等单光旭日章を賜わる。十年七月六日リンス市サンタ・カーザで死去、プロミツソン市共同墓地に埋葬せらる。六十一才であつた。



プロミツソンの上塚周平氏の墓と間崎三三二氏

投身自殺した 隈部三郎氏

隈部三郎氏は鹿児島地方裁判所判事であつたが、第一回移民より二年早く一家七名（一男四女）をあげて一九〇六年七月神奈川丸で神戸を出発十月二十一日サントスに着いた。その後一九二六年八月十九日サントスからリオグランデ・ド・スール行沿岸航路船に乗船し、途中大西洋上で投身自殺をとげた。死亡日は確定しないが、九月十日と発表された。渡伯以来の苦しい流転生活の悩みからだと伝えられている。五百子未亡人および遺児たちは聖市内およびサントス、リベロン・ピーレスで健在である。隈部氏の令嬢たちはブラジルの師範を卒業して伯人子弟を教えていたが、日系教師としての最初の人たちである。



隈部三郎氏

写真は当時の隈部氏令嬢たちと伯人生徒



寫眞は當時の隈部氏令嬢
たちと伯人生徒

だまされて囚人船に乗込む

鉄道工夫として麻州へ

▽：或る第一回移民が

たどった道：△



大森豊吉さん

笠戸丸第一回移民を語るとき忘れられぬことは彼らの多くが鉄道工夫として働いたことである。まず第一回工夫團として出かけたのがズウモント耕地を引上げた独身青年の一団二十八名で、サンパウロ・パラナ線フアシナ付近で工事に従事した。この時の監督兼通訳としてこの一団を率いて行ったのは有川新吉氏であつた。有川氏は早稲田大学出身で、隈部三郎氏一家とともに笠戸丸移民より二年早く

来伯した人。隈部氏とマカエ植民地に最初のオノをふるつた人であつた。隈部氏長女光子さんの婿に決まり、仮祝儀までしたのだが結婚解消してマカエ植民地を飛出してしまった。後に上塚周平氏と玩具製法をやり、藤崎商店に入り、レシフェ支店長となり、その後帰国して病歿した。

この第一回鉄道工夫団の人々はその後ほとんど亜國へ流れ去つた。続いて第二回鉄道工夫団がある。通訳大野基尚氏が沖縄移民のフロレス耕地を退耕したものとズーモント耕地引上げの移民二三家族合計五十七名を率いてノロエステ線アラサツバ駅奥チエテ河に沿つたバクリ駅からイタプーラ駅方面に就働したもので明治四十二年七月から年末にかけてのことだつた。このあたりは有名なマラリア地帯で、罹病するものが続出した。熊本県独身青年出口伊三次（二二歳）がバグリ駅付近で死亡、また沖縄県比嘉善太郎（十七歳）が病弱で仕事にならず、出聖の途中ノロエステ線で行方不明となつたことがあとで判明した。

マラリア患者が続出するので、沖縄県移民代表城間善次郎氏は大野通訳と相談の結果引上げてしまった。一時は日本人労働者五十七名中就働するものは毎日僅かに七、八名にすぎなかつた状態だつた第一回移民中マラリアの洗禮を受けた最初の人たちである。

ヒゲの紳士が来訪

このように鉄道工夫の仕事は激労であつたが、第一回移民たちは資本はなし、事情も判らず、結局あまりなり手のない鉄道工夫でもよいから身体一つを資本にぶつかつて行くより方法がなかった。鉄道工夫に行つた想い出を第一回移民の生存者大森豊吉さん（鹿児島県出身、舊姓小牧、現在六十七歳、聖市在住）は次のように語っている。

グワタパラ耕地で契約期間六カ月の義務農年を終え、家長小牧齋造さん一家四名のほか田中定之助、松山彌吉（生存）上塘（カミトモ）才次さんら三名と一緒にリオに向つた。笠戸丸以前に来伯していた九玉吉蔵氏が小牧一家と同村関係だったので彼を頼つて行つた。九玉音蔵さんはその時リオ開港百年祭記念博覧会場に設けられた日本花火の売店に働いていた。リオに着いた一行を九玉さんは「お前達は百姓をしにブラジルに来たのに町に出るとは何事だ。さつさとサンパウロに帰れ」と意見したが、その時四國の人（註Ⅱ片岡治義氏）が九玉さんをなだめて一行の世話をしてくれた。

そんなことで小牧家放三名はサンパウロに帰り、大森豊吉さん外四名の独身青年はリオに残つてそれぞれ家庭奉公の口をみつけたが、大森さんだけは就職口がないので働きに出る連中の飯炊きをしていた。そんな生活を続けている或

日のこと、シルクハットをかぶった立派なヒゲの紳士が訪ねてきた。「お前たちは支那人か、日本人か」とまず質問し、「お前は船に乗ってアルゼンチン方面に行く気はないか」と聞いた。仕事口もないので大森さんは二つ返事で行きたいという、早速大森さんを彼の事務所に連れて行き、出発手続きをすませてしまった。部屋に帰って一同にその話をすると、上塘（カミトモ）さんも俺も行くというので、市山彌吉さんに二人の荷物をあずけて船に乗込んだ。

囚人と共に麻州へ

さて船に乗込んでみると、同行の連中が沢山いる。いずれも人相の悪い者ばかりで、なんだか囚人の島流し船のよう to 思われた。船がサントスに寄港した際、ドック会社で笠戸丸移民の連中が働いており、「お前らは何処に行くのか、アルゼンチンに行くのか、俺たちも行きたいが、先に行って金もうけのよい処だったら知らせてくれ」などの話をして別れた。

船は南下してモンテビデオで止った。ここで一行は下船して河船の便を待ったために一週間滞在した。乗船以来どうも変だと思っていたが、この時にスペイン人らしい者から「お前たちはマツト・グロツソ州に鉄道

工夫として連れて行かれるのだ」ということを手真似で知らせてくれた。

この時になつてはじめて大森さんらは誰もあり手のない鉄道工夫として、だまされて連れてこられたことが判ったし、かし虐待とか、自由を束縛するようなことはなく、むしろ待遇はよかったという。

このモンテビデオからナタール號という河船でラプラク河を上り、ブエノス・アイレスに着き、次にパラグワイのアスンソンに寄港し、ボリビア、パラグワイ、ブラジル三國境の合流点ポルト・コインブラを経てボルト・エスペランサで丁船した。一行はボリビアから敷かれて来ている鉄道に沿ってカンポ・グランデに向けて工事に従事した。一九〇九年であつた。

笠戸丸組と出合う

就役してから約六カ月たち、工事が約六キロ米進んだ時、笠戸丸組約六十名が現場へ乗込んできた。その奇遇に喜び合つた。その折、工夫監督が大森、上塘さんらを呼んで「日本人の一团には一番の難所である四〇キロの地帯の工事をやらせることになっているが、話すな」と注意した。その場所というのは水が腰までもつかるような湿地帯であつた。彼らが働いた地帯はフランスの請負師がブラジルから委嘱

されたが、難工事のため放棄し、その時はブラジル政府直轄工事となっていた。



当時のマット・グロツソ州の日本人鉄道工夫団

現場にはロシア人工夫も沢山働いていたが、日本人対ロシア人の土降ろし競争をやり日本人側が勝って、日本人だけが日給五ミル二百レースを与えられるようになった。二百レースの昇給は破格の沙汰であつた。日本人側に見れば

ば日露戦争で勝ったのだから俺らも負けてたまるものかという戦勝國民の意気で頑張ったらしい。

日本人間でもいろいろな事件があった。

熊本県人某がピンガを呑んで殴り合いの喧嘩をした事もあった。また後続部隊の中には鹿児島県人折田喜右衛門さんの妻ハルさん（29）、竹内喜左衛門さんの妻マツエさん（27）がおり、女気のない殺風景な現場に柔か味を漂よわせていた。

日本人独身者にとっては憧れの的であった。当時は女性も一人前の給与を貰い工夫の飯たきをしていた。男だけの世界に女が入ってくると、とかく問題が起きてくる。その後上塘才次さんは折田喜右衛門さんの妻ハルさんとアルゼンチンに逃げてしまった。

ストライキ勃發

一九一一年末ごろ工夫たちの貸金支払いが六カ月遅れたことがある。政府から金が来なかったためであるが、労働者た

ちはストライキを起した。この時の労働者の配置状況はボルト・エスペランサからミランダ間百五十キロの区域が第一区ここに日本人部隊として内地人組が一組と沖縄県人組が二組が居り、それよりアキダウアーナまでの二百九十キ

ロが第二区。アキダウアーナからカンポ・グランデ間四百キロが第三区となっていた。

そうして十キロごとに監督が配置されていた。

この時の第二区、第三区の外人部隊がストライキを起している時に、第一区である日本人の混合する第一区部隊の総監督が政府側首脳部のいる本部に逃げて労働者側を裏切るという事件が起きた。

そのために第二区、第三区罷業者は第一区工夫の意図を計りかねて裏切るのか、それとも味方になるか、ます意見を聞きたいと呼出しをかけて来た。

その時は第一区でも就働を中止していたが、総監督も居らぬので、意見もまとまらぬ状態であった。

二区、三区の武装部隊が呼出しをかけた地点はボルト・エスペランサから百キロの地点リオ・ド・ロドリングス耕地の駅であった。当時ポルト・エスペランサに居たツルマ（組）は十五あった）呼出し状の内容というのは『全ツルマは武装して、二区、三区の罷業部隊に合流せよ』というのであった。この通知を受けて一同は行くかどうか協議した結果、もし行かねば復讐でもされた場合を考え、行くという者と、襲撃して来たら迎え撃とうという二派に分れ、沖縄県人は復讐を懸念して罷業団に合流するため出發した。内地人の総べては残留となったが、大森豊吉さんらも残留組であった。その時の指導者は山城梶一郎氏で、ます特別

列車を仕立て汽関車の前部にどつかと腰をかけた山城その他の外人首脳部がリオ・ロドリゲス耕地駅までやって来た。

しかし戦闘準備はしていなかった。武装はしていなが、銃に弾をこめていなかったもので、まさか相手側から一斉射撃を受けようとは思ってもいなかった。

一方呼び出した側では日本人部隊に属する第一区隊に隊し裏切者を制裁するという闘志に燃えて待機していたのであった。

いきなり一人の男が前方にとびだして来て「止め！、武器を渡せ！」と叫んだ。

ただならぬその場の空気に山城さんが、後方の味方に“武器を渡すな”と声をかけ終るか終らぬかに一斉射撃を受けた。

突然の襲撃に一同は貨車から飛びおりて散ったが、この時日本人は比嘉永松さんが頭部を射たれて即死、伯人にも一名の犠牲者があった。日本人を混えた第一区部隊に制裁を加えた敵側は意気揚々と引上げていった。惨敗した一行は犠牲者の遺骸を乗せて基地に帰り、無計画な出発を悔いながら、死者を弔った。

そんないきさつがあった後十三ヵ月目に給与が届き、その後はあまりごたごたもなく、一九一二年サラブラ付近まで工事が進んでいた宮里牛さんがマレックで死んだのもそ

の頃である。大森さんは一九一二年にアルゼンチンに渡ったが、一年ほどいてまた工夫時代が懐しくてマツト・グロツソに引返したりしていた。この永い工夫生活の間にツルマの監督などをしていたが、大正五年渡伯の平山定次さんにすすめられアキダウアナに行き、ロンドン將軍の一族が所有しているといわれるリオ・ネグロ耕地で働いた。一九二二年のブラジル独立記念祭の時にサンパウロ見物に來たまま聖市に落ちつきカーザ・ミカドの家具職人として働き、貯金した金で現在の所有地（カーザ・ベルヂ区アベニダ・チエテ）に一九二二年末家を建て翌年に家具製造業を開業した以來三十五年同地を離れず、カーサ・ベルデ区邦人の最古参である。

大武和三郎民と辞書

一八八九年（明治二十二年）十一月十五日ブラジルは共和国となったが、これを記念してブラジル軍艦「アルミランテ・バローゾ」號が世界周航の途次横濱に寄港した。艦長以下八名は、天皇陛下に謁見した。その中に伯國王子アウグスト・レオポルド親王（ドン・ペードロ二世の孫）がい

た。

乗組員将校たちは西郷従道海軍大臣の午餐会に招かれた。この伯國軍艦の入港をみて横濱の船問屋関係の十八才になる少年が、長崎まで同艦を追って行って同親王のボーイ格でブラジルに渡った。この少年は一時、サンパウロ州リベロン・プレト市近くのシュンプ珈琲耕地で精撰コーヒー機の釜たきをやっていたこともある。一八九四年日清戦争勃発と聞き英國貨物船のボーイとなって濠州を廻つて日本へ歸った。その後駐日伯國公使館、大使館に嘱託として歴任すること二十幾年、和葡・葡和辞典を完成した大武和三郎氏であつた。一九四七年日本で死去した。七十九才であつた。



先駆者の横顔

ブラジル移民の創始者

水野 龍氏

水野龍氏は安政六年（一八五九）十一月十一日、池野龜子（カメス）の次男として、土佐國高岡郡佐川町に生れる。幼少は池野權之介源範経と云い・明治に入って水野姓を名のり龍（シゲミ）と改め、後リヨウと呼んだ。

幕末の風雲險悪なる時代とて水野氏は九才にして松山事件に少年鼓手として出陣した。

板垣退助を始め郷土出身の諸先輩が各方面に活躍するに刺戟され十八才（明治九年）の二月東京に出た。その後一時水戸で巡査を奉職していたが身を官界に投じ、立身の計を樹てた。

後藤象次郎氏の紹介にて岡山県知事高崎五六の知遇を得て県庁に勤めた。

この時、徳島藩士岩佐氏の二女規矩与（キクヨ）と結婚した。廿五才の時である。

後藤氏の死により官界進出を断念した

水野氏は政治に熱中し、明治三十一年奈良県から代議士に立候補したが、板垣退助、中江篤介などの唱えた自由民権

拡張への過激演説であつたため、四十日間投獄され、以後政界進出不能となつた。その後、深川に盤城石炭を使用し火力発電を行い、深川電燈株式会社と云う日本最初の株式会社を創つた。

その頃、日本國民の海外發展熱は昂進し移民会社が各所に創立され、濠州、ハワイ、北米、カナダ等に進出していたがいずれも黄禍論が勃發して入國禁止、若しくは制限を受けるに至つた。

日本移民の出口は八方塞りの状態下にあつた時、ブラジル弁理公使杉村公使のブラジル事情報告書なるものが一九〇五年外務省より發表された。

この報告書は「伯刺西爾移民事情附貿易狀況」「南米伯刺西爾國サンパウロ州各國移民就働狀況視察復命書」「南米伯刺西爾ミナス・ゼライス州視察復命書」であつた。

水野氏は日本移民の新天地は南米ブラジル國である事をこの報告書によつて知らされた。

移民輸送の責任ある計画を樹てるには自ら現地調査に然るべきものなし、として一九〇五年十二月二十二日、日本出發北米、ペルーを経てチリー國ヴァルパライゾに上陸し、ロ馬の背を借りて雪中のアンデスを越え、ブエノス・アイレスより船便を利用、ブラジルに三月二十七日到着した。

水野氏はペトロポリス公使館の三浦通訳官の補佐を受け、聖州

移民会社社長ベント・ブエノ氏及び農務長官を訪問し、その誘導により州内の主なる耕地を視察した。

ただちに日本移民誘入の交渉を対政府に行つたが初期交渉の事として契約の締結を見る事が出来なかつた。

水野氏は一先ず帰国を思ひたち、同年七月ニューヨーク、シヤトル經由で帰国した。

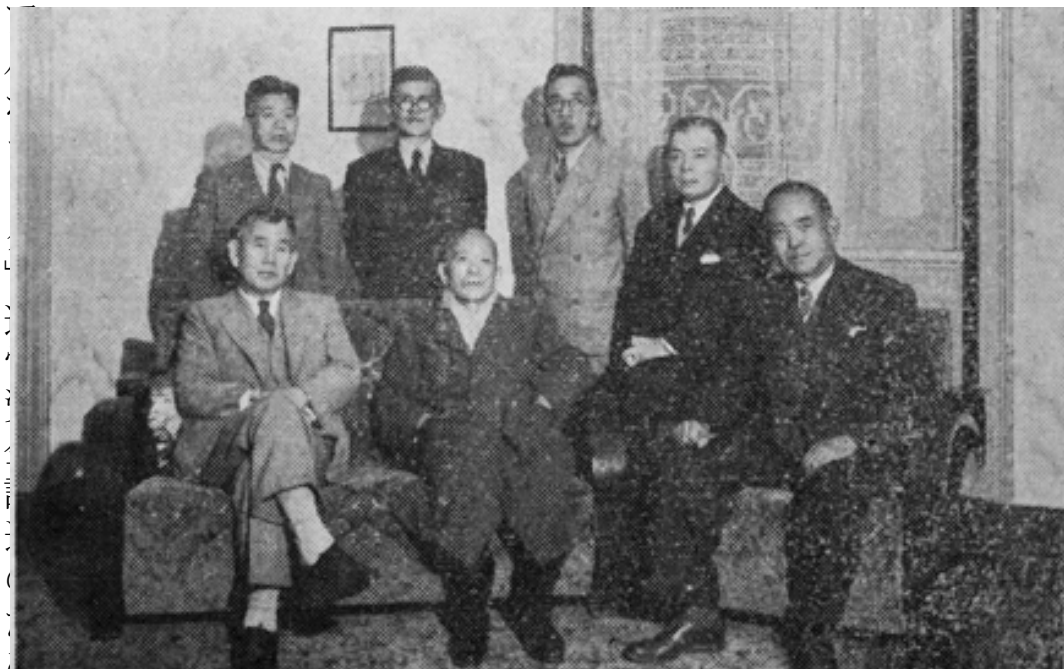
明治四十年（一九〇七）春、水野氏は再度の移民輸送契約を志し渡伯した。時の弁理公使内田定槌氏の援助を受け、リオ州、サンパウロ州両州政府に対して交渉を開始し、サンパウロ州政府とは十一月七日、リオ州は四日後の十一日に移民契約を締結することが出来た。

この契約が笠戸丸移民の渡航への路と成り、五十年後の今日への基礎となつた。

水野氏は第二回移民を運んだ明治四十三年（一九一〇）の時には、第一回笠戸丸移民誘人の時、仮契約をしていたブラジル珈琲宣伝契約を行い東京に合資会社「カフェー・パウリスタ」を創立して、自ら社長となつた。

大正四年（一九一五）水野氏は竹村殖民商館の権利義務一切を譲受け、南米植民株式会社を創立し、後東洋移民会社森岡移民合名会社と合併して「ブラジル移民組合」を組織した。

「コロニヤ・」



、一九四一年六

月六日サントス丸にて訪日の時の記念撮影

前列向つて左より 香山六郎、水野龍、金城山戸、矢崎節夫
後列向つて左より 村崎豊重、臼井介仁、丸野政義

しかし、この移民組合も利害関係より起る異分子の弊害
多く、國家的見地から移植民事業統一の必要をみとめ、水
野氏は幾多の困難な條件を排して、移民会社を総合せる海
外興業株式会社を設立させた。

新会社の設立と同時に専務取締役就任し、多年のうん

蓄を傾けて日本移民對外發展に尽瘁した。

氏は在的同胞のその後の生活状態を視察する目的で第六回目の渡伯をなし帰朝後、時の海興社長神山閏二氏に「在ブラジル移植民近況見聞所感並に施設愚案」を提出したが、海興当局の容れる処とならず、水野氏は憤然として、その職を辞した。

自己の永住の地はブラジルと予ねて決定していた水野氏は、その意志む実行に移し、大正十三年（一九二四）一家を纏めて渡伯した。年令六十五才の時であつた。

着伯するや、パラナ州クリチーバ市郊外に土地を求めて、果樹、茶、青菜の栽培に従事していたが、理想的な植民地建設に着手し「コロニア・アルボラーダ」を創設したが、資金欠乏に悩み資金調達の目的を以て、昭和十六年（一九四一）六月六日サントス丸にて帰国したが、太平洋戦争勃発により帰伯は不能となり、郷土高知市に滞在十年におよんだ。

在伯の友人知己は水野龍氏帰伯後援会を組織し、その旅費を送金するに及び一九五〇年五月十九日懐しのサンパウロに帰り着いた。

帰伯後、家族と共に聖市郊外のぐう居にあつたが高齢者のこととて老衰日に加わり、一九五一年八月十四日午後五時、家族に見守られながら、いとも安かに永眠した。享年九十二才。



九十一歳の水野翁

当時の“民間領事館”

配耕地を嫌って逃げる連中は「日本に帰りたい」と、いう郷愁から、一步でも母国に近かすこうとして、サンパウロへサンパウロへと流れ出た。

ルス駅に客待ちをする馬車引は、日本人を見ると、藤崎商会店員宿舎であるサンパウロ街一五番に運んで来た。

その当時の馬車賃は、客車で五ミル荷車で三ミルであった。

逃亡移民の中には靴を手にブラ下げ跣足でやって来る者が多かった、

耕地よりの追跡者をおそれ、最寄りの駅をさけ、遠隔の

駅まで徒歩で逃げ足を傷けたものである。

逃亡移民の間借り、就職の斡旋、通信関係、送金関係、すべての世話は後藤武夫さんが当っていた。

この当時は領事館もないときで、藤崎商会の保証が大きな権威を持っていた。

藤崎商会は仙台の紳商四代目藤崎三郎助氏によって、笠戸丸到着以前、一九〇六年九月二十四日サン・ベント街に開店された日本商品貿易店であった。この藤崎三郎助氏こそ日伯貿易の開組であり、大恩人である。

初代支配人は野間貞次郎氏、笠戸丸が着いた時は二代目佐藤徳治氏、後藤武夫氏は三代目支配人である。

なお藤崎家は現在東京に本邸を移し六代目三郎助氏の時代で実業界に活躍している。

生存者は十一名

アルゼンチンに渡った

笠戸丸第一回移民

六月十八日から開かれたブラジル移民五十年祭にアルゼンチンの邦人有力者一行十四名が参加したが、一行中のラプラタ報知の平良賢夫氏によってアルゼンチンに行った笠戸

丸第一回移民の生存者が十名いることが判明した。ラプラ
タ報知の調べによると次の諸氏である。

▽新垣松夫妻△玉那覇亀△比嘉 梅助△比嘉加那志△亀
山△官本富一△外間蒲戸△田属亀太郎△小牧斎造△星清蔵
五十年前サントスに入港ブラジルに移住して当初の辛酸を
なめた後、相ついでアルゼンチンへ再移住し住みついた人
たちで、この人々によつて後続部隊が次々と呼び寄せられ
たのであつて、亜国における邦人の進出發展は実にこれら
の笠戸丸組の人達によつて種がまかれたのである

老兵消えず

笠戸丸第一回移民生存者

伯國在住者百五十七名

一九五八年六月十八日現在

沖縄県

金城山戸

明治26・11・16生

本籍地・島尻郡南風村津嘉山

現住所 望市マードレ・テオドーロ街四三四番

渡伯年令 十五才 独身

配耕地 フロレスタ移動経路 配耕地にて就働者の水汲みをする。後耕地雇員となり山羊の乳搾りや夜業の取締りに従事、一年後出聖アウローラ街の歯科医の助手となり、歯科技工を習う。

一九一八年七月二十日、高知県人浅倉岩吉氏三女楠枝さんと結婚。

其の後中央線ピンダモニヤンガーバ歯科学校に入学、日本人最初の歯科医免状を獲得した。爾来一貫して歯科医の職にある。その間二回夫妻にて訪日。
家族一男一女。

知念松

明治20・7・3生

本籍地 中頭郡美里村古謝一二番地

現住所 ノロエステ線アラサツバ市マレシヤール・テオドーロ街一六七〇番

渡伯年齢 二十一歳

配耕地 カナーン

移動経路 配耕地にて契約年期一年を終り、サントス、サンパウロ、ジャウーの各都市を流れる。次にアルゼンチンに二カ年。マツト・グロツソ州にて鉄道工夫三カ年、カンポ・グランデ市にて八カ年。次に一九二四年アラサツバ管内にて珈琲契約農四年、後カフェゾポリスにて自作農。一九四六年アラサツバ市に出て隠居生活に入り現在に至る。

家族 一男二女ともに既婚者。

与 那 嶺 仁 五 郎

明治20・1・21生

本籍地 國頭郡今帰仁村

現住所 イコイノ園

渡伯年齢 二十一才

配耕地 フロレスク

移動経路 六カ月の契約期間を了え、サンパウロ市に出る。夫妻にてドナ・パウリーナ男爵夫人家の野菜作りを二年勤め、ドトール・ジュゼー判事邸。ワシントン・ルイス邸（市長時代）の庭園係をなす。

次に麻州にて鉄道工夫と成り、帰聖して後続日本移民の

通訳としてカーン耕地に入る。其の後各地植民地通訳を
転々し、伯刺西爾時報にも働く、野田良治領事時代領事館
にて勤務、後サントスに移り精米所支配人を経て十五年間
程農産物仲買業を営む。ジユキア線セードロ附近にてバナ
ナ栽培、サンパウロ市に出て八カ年旅館経営をする。

その後、数々曲折を経てジャサナのドン・ペードロ・
Ⅱ養老院に入り、現在は『憩いの園』に居住する。

古 波 蔵 賀 眞

明治26・9・20生

本籍地 中頭郡宜野湾村普天間

現住所 パウリスト延長線ドラセーナ管内ジャバ・パウリ
スタ

渡伯年齢 十五才配耕地 カーン

移動経路 一年間配耕地にて就働後サントスに出て五年間
居住、転じて聖市にて三年余、更にソロカバナ線の鉄道工
夫として一年間働く。その後パ線キンターナに定住し、妻
をめとり農事に従事する。妻女は二回目出産時に母子共に
死亡、爾来独身生活、現住所にて雑作農に従事。

宮 平 半 助

明治14・12・15生

宮 平 カ メ

明治14・11・7生

本籍地 國頭郡名護町東江

現住所 サントス・ジュキア線セードロ駅

渡伯年齢 二十七才 妻二十七才

配耕地 フロレスタ

移動経路 配耕地に十カ月就働、その後 イツー管内カンボス・ネット耕地を経てサントスに下り、ドツカスに一九〇九年より一六年まで就働、次にジュキア線アンナ・ジーヤス駅ペードロ・パロス駅にて米作を主とする農事に従い、一九二四年五月現地セードロ駅に転じ米作及び商店を經營。一九二七年よりバナナ栽培も始め、現在約百八十アルケールスの農園を持つ。

家族 四男一女、孫二十八名

渡 久 地 政 人

明治22・1・13生

本籍地 中頭郡美里村字東恩納

現住所 サントス・ジュンジアイ線サント・アンドレ駅

渡伯年齢 十六才

配耕地 カナーン

移動経路 義務農年を終つても金が無いので動く事が出来ず再契約する。

併し耕地の環境にあきたらず同志を求めて聖市向け脱走を企てたが、耕地よりの追跡者に捕わる。再度逃亡を企て、成功し、サンパウロ市にて家庭奉公に入る。後サントスに移つて七、八年在住、その間・ドッカスの荷揚人夫、炭運び、理髪見習い、活版所職工、養鶏、養豚を営んだが、いすれも失敗する。

次に博打場の計算人となつて三年間、一九一八年より二年まで、ジュキア線ペードロ・デ・バロス駅の植民地で農事支配人を勤め、更にサントスの博打場に帰り、ホテル経営も行ふ。一九二七年に中央線スザノ管内に三域の土地購入、果樹園を営み一九五七年現住所に移る。

家族 六男五女、孫六名、内二男三女は既婚

仲 宗 根 蒲 助

明治18・3 5生

仲 宗 根 カ メ (舊姓島袋)

明治20・1・5生

本籍地 中頭郡北谷村

渡伯年齢 二十三才 妻二十一才

配耕地 カナーン

移動経路 配耕地に一年半、後サントスに移り波止場人夫七カ年。次にジユキア線ノゲーラに移転し棉作に従事する事三年間、後サントスに移つて一九四二年まで野菜作りをする。一九四二年よりサンパウロ市で商業に従事し、一九五六年四月サント・アンドレ市に移る。

平 良 松 六 郎

明治21・12・29生

本籍地 國頭郡今帰仁村仲宗根

現住所 中央線スザノ市マルケス・ヒイゲーラ街一八五番

渡伯年齢 二十才

配耕地 フロレスタ

移動経路 契約農年完了後カンボス・ネット耕地に入る。三カ月就働の時耕主の夜逃げにあい、無一文となる。日本より持参した手拭、齒磨粉を売却し二十ミルの軍資金を得て出聖、其の足でサントスに下りドツカスの荷揚人夫となる。この仕事も重労働にて耐えす五十三ミルの船賃を払つてアルゼンチンに渡る。一九一二年頃サントスに舞戻り、アナン・ジューアスで鉄道工夫となる。その時、星名謙一郎氏の世話で州官有地の払下げを受け地主となる。このアナン・ジューアスこそ日本移民ジユキア線開拓の発祥の地であ

る。

一九二八年所有地を整理し帰国、一九三〇年再渡航しスザノに入植する。

平安 名 次 良（ヘンナ）

明治 18・8・10 生

平安 名 カ メ イ

明治 16・8・5 生

本籍地 中頭郡勝連村

現住所 パラナ州イタンバラカ市

渡伯年齢 二十三才、妻二十五才

配耕地 カナーン

移動経路 配耕地を出てサントス、サンパウロに於て日雇人となり働く、後ジユキア線アンナ・ジーアスに於て米作に従事する。更にサントスに移り十八年居住。一九五七年より女婿の現住所に同居する。

金城 盛 吉

明治 26・7・24 生

本籍地 島尻郡豊見城村字野波三二

現住所 聖市モツカ区ルイ・マルチンス街三一二番

渡伯年齢 十五才
配耕地 フロレスク

城 間 鍋 喜

明治23・9・8生

本籍地 中頭郡西原村

現住所 ソロカバナ線ソロカバ市

渡伯年齢 十八才

配耕地 カナーン

移動経路 配耕地にて二カ年在住、その後サントス附近の
耕地に十五年就働、次にジェキア駅管内に移って六年。

ブ・プルデンテ駅管内にて米作六年、その後ソロカバに
移り商業に転じて今日に至る。

知 念 五 郎

明治24・1・18生

本籍地 島尻郡大里村字板良敷一四一二麻州アキダウアー
ナ市セイテ・デ・セテンプロ街四〇五

渡伯年齢 十七才

配耕地 フロレタス

移動経路 契約期を終りサンンパウロ市に出る。ピラチニ

ンガ街の或工場の薪運び馬車の助手として月給十五ミルで働く。後にサントスに下ってジャバクワラの石穴工事場に働いて居たが、麻州の鉄道工夫に應募しサントスよりラプラクを経てボルト・エスペランサに上陸就働を開始する。この地に二年四カ月あり、亜国ブエノス・アイレス市に移り板工場に働く。更に麻州の鉄道工夫に戻り一九一六年アキダウアーナ市に移って雑貨商人となる。後理髪店パール等を経営し、現在に至る。

大 城 良 宗

明治15・5・3生

本籍地 島尻郡豊見城村字根差部二〇三九

現住所 麻州アキダウアーナ市郊外

渡伯年齢 二十六才

配耕地 フロレスタ

移動経路 契約農年を終りイツー駅近く耕地に半年間働き、後にパラナ河岸ボルト・エピタシオにて鉄道工夫と成る。次にミナス州鉾山に行く予定の処サンパウロ市にて引率者に置き去りにされてサントスに下って働く、再度麻州の鉄道工夫を応募しラプラタ河經由にてボルト・エスペランサに至る。一九一四年帰国し一九二六年十一月再渡伯、麻州カンポ・グランデ市附近の農地で働き一九三〇年アキダウ

アーナ近郊に移り、野菜栽培に従事して現在に至る
家族 妻ウト、長男夫婦、孫八名。

与座 敬三郎

明治18・3・5生

本籍地 島尻郡南風原村字津嘉山一三四二番

現住所 麻州カンポ・グランデ市ウベラバ・ビラ・グワラ
ニ―街九〇

渡伯年齢 二十三才

配耕地 フロレスタ

移動経路 一年半フロレスタ耕地にありビラシカーバのサ
ン・ペードロ耕地に入る。次にイサーのペトラジュ耕地を
経て鉄道工夫となる。マレックを患い聖市に帰る。後ピラ
ジューよりサントスに居住し、一九一八年麻州のカンポ・
グランデに移り現在に至る。

家族 二男一女

仲 程 仙五郎

明治23・10・12生

本籍地 國頭郡本部村字伊野波一五番

現住所 麻州カンポ・グランデ市クワトルゼ・デ・ジュー
リヨ街二六二四番

渡伯年齢 十八才

配耕地 フロレスタ

移動経路 耕地退出後サントスに出る。一九〇九年六月麻州鉄道工夫に應素ポルト・エスペランサに入る。一九二四年カンポ・グランデ市に出て兵舎の左官仕事に傭われる。次にマタ・セグレード植民地に土地を購入し・農業を営なむ。一九二六年妻帯、一九五五年養子に農場を一任、現住所にて隠居生活に入る。

大 城 幸 喜

明治 22・3・3 生

大 城 カ メ

明治 24・7・5 生

本籍地 島尻郡豊見城村字上田二一六番

現住所 麻州カンポ・グランデ市ゼネラル・メーロ街

渡伯年齢 十九才 妻十七才

配耕地 フロレスタ

移動経路 半年の契約農年を終り、カンボス・ネット耕地に入る。その時鉄道工夫の話しを聞き、一日五ミルの手当に引かれ、サントスに出て人夫に應募する。ラプラク河を遡行ポルト・エスペランサに二十六日の族をする。

一九〇九年六月より七年間工事監督として働き・次いで五

年間鉄道の薪木燃料請負、枕木請負等をなす。後ドラード
ス最初の邦人として開拓に入り珈琲エルバマテを栽培する。
一九三〇年カンポ・グランデ市に移り商店を開いたが戦時
中の迫害から一九四二年八月廿日家屋商品焼打に遭い裸一
貫となる。

家族 子女五人

新垣 美 三 郎

明治16・12・6生

新垣 カ メ (旧姓金城)

明治21・12・20生

本籍地 島尻郡南風村字津嘉山四二〇番地

現住所 麻州カンポ・グランデ市ジョアキン・ムルチンニ
ヨ街四六八

渡伯年齢 二十五才、妻二十才

配耕地 フロレスタ

移動経路 配耕地に半年の契約期間を働き退耕後、各処を
転々、一九一五年マツト・グロッソ州の鉄道工夫に入り、流
転生活幾星霜後、カンポ・グランデに居を定め洗染業者と
なり今日に至る

家族 二男二女、孫十七人。

宮 城 宇 志

明治22・12・8生

本籍地 島尻郡小禄村字当間八八三番

現住所 麻州カンポ・グランデ管内バンデイラ植民地在

渡伯年齢 十九才

配耕地 フロレスタ

移動経路 配耕地に半年在住、カンボス・ネット耕地にて米作賃仕事をなす。

この地も三カ月にて退耕、サントスに至りドツカス荷揚人夫八年、次いでジユキア線アーナ・ジーアスに米作五年、再度ドツカスに戻る。次にカンタレーに移り野菜作りをなす。一九三八年カンポ・グランデに移り仲尾耕地に二年バンデーラ植民地にて野菜栽培に従事。一九四一年故郷より妻を呼び家庭生活 に入る。

家族 夫婦

註Ⅱ宮城宇志氏は笠戸丸渡航者とあるが乗船名簿には該当者無く、身代り渡航者か？

島 袋 カ マ (現姓、新垣)

明治24・5・15生

本籍地 中頭郡美里村字比屋根六九〇番

規任所 麻州カンポ・グランデ市ドン・アキーノ街四九番

渡伯年齢 十七才

配耕地 カナーン

移動経路 カナーン耕地に二年、アルゼンチンに渡って一年後・麻州の鉄道工夫として應募する。渡伯十年後夫蒲氏死亡、三年後笠戸丸移民の新垣松と再婚、一九二三年夫松死亡、未亡人となり、爾来三十余年カンポ・グランデ市に居住する。

家状 四男、孫十七人

外間 亀

明治22・5・28生

本籍地 島渡郡豊見城村字真嘉部二〇〇番

現住所 麻州カンポ・グランデ市ジュカビラマ街九七番

渡伯年齢 十九才

配耕地 フロレスタ

移動経路 配耕地に一年カ就働後、カンボス・ネットに四カ月、次いでサントスにてドツカの仕事に七年間従事する。一九一六年麻州トリアングロにて鉄道工夫に入る。一九二一年より薪木販売を始め二十五年間を経る。

家族 二男八女、孫三十五人

池 原 次 郎

明治24・11・7生

本籍地 中頭郡読谷山村字古堅六四九

現住所 麻州カンポ・グランデ市クワトルゼ・デ・ジユリ
ヨ街ビラ・ノロエステ、八番

渡伯年齢 十八才

配耕地 カナーン

移動経路 配耕地生活一年半後サンパウロ市に出る。次に
サントスに下り四年間ドッカスの仕事に従事する。一九一
三年鉄道工夫となり麻州に入る。一九二〇年インビルス
にて結婚、一九二六年セローラ植民地に土地購入、コー
ヒー園経営。一九四〇年カンポ・グランデに居を移し、現
在に至る。

家族数 三男一女

新 垣 ム タ

註Ⅱ新垣茂一の妻マカトの身代り渡航

明治5・5・15生

本籍地 島尻郡南風原村

現住所 麻州カンポ・グランデ市管内

渡伯年齢 三十六才

配耕地 フロレスタ

略歴 一九一五年玉里幸一と結婚、一九五五年幸一帰国後、一子隆と同居、今日に至る。通称玉里マリア、孫九名。

城間 鉄 夫

明治26・10・12生

本籍地 島尻郡南風原村字津嘉山四七五

現住所 麻州カンポ・グランデ市ルア・ドス・バルボーザ十六

渡的年齢 十五才

配耕地 フロレスタ

移動経路 配耕地に一年半の義務農年を過し、ピラシカーバのサン・ペードロ耕地を経て再度イツー管内にて農業に従事、次ぎにソロカバナ線ビラジュイーにて鉄道布設工夫となる。次ぎにマツト・グロツソ州の鉄道工夫となり、一九一五年カンポ・グランデに居を定め今日に至る。その間一九三七年帰国 結婚して再渡伯。

家族 子女六名

比 嘉 仲 直

明治14・7・8生

本籍地 島尻郡南風原村

現住所 ソロカバナ線パラグワスー・パウリスタ駅管内
渡伯年齢 二十七才
配耕地 フロレスタ

金城次良

現住所 ミナス州タピライ郡内
配耕地 フロレスタ？

註Ⅱ 笠戸丸移民と申出あるが乗船名簿に該当者無く、身
代り渡航者か？

金城泰平

明治26・2・4生

本籍地 島尻郡南風原村字津嘉山

現住所 麻州ドラードス市プレッデンテバルガス街七三四
番

渡伯年齢 十五才

配耕地 フロレスタ

比嘉秀吉

明治22・6・1生

本籍地 国頭郡久志村字辺野古六五番

現住所 ジュキア線ペードロ・デ・トレード町

渡伯年齢 十九才

配耕地 フロレスタ

移動経路 配耕地退出後鉄道工夫、家庭奉公、サントスのドッカス荷揚人夫を経てリオ・デ・ジャネーロ市ドッカスに荷揚人夫、又三都市で自動車運転手もする。その後ジュキア線各地を転々米作に従事したが振わず、現住地にて商業に転じて現在に至る。

宮 平 松

明治22・9・13生

本籍地 中頭郡北谷村字野国十六

現住所 ソロカバナ線アバレー駅サンパウロ街三五番 郵

函七

渡伯年齢 十九才

配耕地 カナーン

移動経路 配耕地に一カ年就働、サントス市に半年、次ぎに鉄道工夫を應募して麻州ボルト・エスペランサに上陸、就働四年後ジュキア線に移り米作に従事五カ年を過す。次ぎにサンパウロ市郊外カツシヨエーラに十年間在住し、後

パウリスタ線マリリアにて六年間棉作に従事する。一九四三年現住所に移り安住の地を得る。

家族 子女六名

宮 城 伊 八

明治22・12・10生

本籍地 中頭郡美里村

現住所 聖市ヴィラ・プルデンテ区ピーレス・ピメンター
ル街二六

渡伯年齢 十九才

配耕地 カナーン

金 城 善 助

明治23・8・3生

本籍地 島尻郡南風原村字津嘉山一三八四番

現住所 ノロエステ線パウルー市郊外シヤカラ

渡伯年齢 十八才

配耕地 フロレスタ

名 嘉 文 五 郎

明治19・3・12生

本籍地 島尻郡伊平野村

現住所 サントス市カンボス・メーロ街一三番

渡伯年齢 二十二才

註Ⅱ 渡伯名籍に該当者無く、身代り渡航者？

栄 門 松

明治22・4・9生

本籍地 中頭郡勝連村

現住所 サントス市アンナコスク街三六八

渡伯年齢 十九才

配耕地 カナーン

比 嘉 牛

明治16・7・14生

本籍地 中頭郡中城村

現住所 サントス市パラ街一二四

渡相年齢 二十五才

配新地 カナーン

城間 佐一郎

明治 22・6・5 生

本籍地 島尻郡南原村

現住所 サントス市セナドル・フエジヨ街四一三

渡伯年令 一九才

配耕地 フロレスタ

比嘉 カメ

明治 10・9・20 生

本籍地 中頭郡中城村

現住所 サントス市ジヨゼー・デ・アレンカール街一四

渡伯年齢 三十一才

配耕地 カナーン

比嘉 ウタ

明治 19・4・25 生

本籍地 中頭郡中城村

現住所 サントス市サボオ区

渡伯年齢 二十二才

註 Ⅱ乗船名簿に該当者無く、身代り渡航者？

伊 良 皆 成 貞

明治 15・11・20 生

本籍地 島尻郡大里村字板良敷

現住所 パラナ州カンバラ市

渡伯年齢 二十六才

配耕地 フロレスタ

移動経路 配耕地退出後サントス市に出て運送店貨物自動車運転手として働く、次ぎに麻州へ鉄道工夫に行き再度聖市に帰ってバールを経営、その後アラクワ線カンブイ耕地に移って棉作農に従事、後ちカンバラに移って現在に至る。

家族 夫婦外二名

新 垣 平 太

明治 25・8・12 生

本籍地 島尻郡南風原村宇津嘉山一三五四番

現住所 望市ビラ・カロン区タカチンガ街四〇

渡伯年齢 十六才

配耕地 フロレスタ

有 銘 兼 徳

明治19・5・23生

有 銘 た ま（旧姓山城）

明治21・9・15生

本籍地 那覇区西一三八九番

現住所 リオ州ニロポリス市アントニオ

・ジヨゼー・ビッテンコルト一四七

渡的年齢 二十二才、妻二十才

配耕地 フロレスタ

移動経路 耕地の馬小屋同様の処に入れられ、奴隷に売られたと、毎日泣いていたが義務農年を果した。後サントスに出てドッカスの人夫二年八カ月、一九一二年にリオ州に入って米作に従事していた。一九一五年に現住地ニロポリスに移り果樹及野菜栽培を行い生活していた。所有地が市街地に編入するに及び、この地を売却、町に出て隠居生活に入る。

座 覇 政 憲

明治23・11・11生

本籍地 国頭郡本部村

現住所 パラナ州ロンドリーナ管内

渡伯年齢 十八才
配耕地 フロレスタ

仲 宗 根 蒲

明治22・9・10生

本籍地 中頭郡西原村

現住所 聖市

渡伯年齢 十九才

配耕地 カナーン

比 嘉 徳 松

明治24・8・13生

本籍地 中頭郡中城村

現住所 聖市バロン・デ・ヅツプラット街

渡伯年齢 十七才

配耕地 カナーン

神 山 徳 助

明治23・1・7生

本籍地 國頭郡名護村

現住所 ソロカバナ線サン・ロツキ管内
渡伯年齢 十八才
配耕地 フロレスタ

安 里 宇 志

明治 24・10・5 生

本籍地 中頭郡西原村

現住所 ソロカバナ線イタペーバ在

渡の年齢 十七才

配耕地 カナーン

照 屋 カ マ

明治 25・7・14 生

本籍地 島尻郡大里村

現住所 ソロカバナ線プ・プルデンテ在

渡伯年齢 十六才

配耕地 フロレスタ

古 波 歳 巖

明治16・3・18生

本籍地 中頭郡西原村

現住所 サントス・ジユキア線^ペ・トレード在

渡伯年齢 二十五才

配耕地 カナーン

松 本 松

明治22・6・5生

本籍地 中頭郡美里村

現住所 聖市イタプーラ・デミランダ街

渡伯年齢 十九才

配耕地 カナーン

新 里 三 良

明治23・3・26生

本籍地 島尻郡大里村

現住所 聖市

渡伯年齢 十八才

配耕地 フロレスタ

田 場 ウ シ

明治 2 2 ・ 1 2 ・ 2 4 生

本籍地 中頭郡美里村

現住所 聖市

渡伯年齢 十九才

配耕地 カナーン

金 城 双 三

明治 2 0 ・ 1 1 ・ 1 0 生

本籍地 国頭郡本部村

現住所 聖市

渡伯年齢 二十一才

配耕地 フロレスタ

石 原 ウ シ

明治 2 4 ・ 2 ・ 1 6 生

註Ⅱ 中宗根牛の妻カメの身代り渡航

本籍地 中頭郡美里村

現住所 聖市

配耕地 カナーン

合 計 五十七名（内男四四名）

熊本県

香山 六郎

明治19・1・5生

香山 タニ（旧姓橋口）

明治15・7・5生

本籍地 玉名郡高瀬町

現住所 聖市グワウ街一七一番

渡伯年齢 二十二才、妻二十六才

移動経路 渡伯後、皇國移民会社書記を勤める。後ジャタ
イー耕地、ノロエステ線トレード・ピーザ駅ボア・ヴィス
タ耕地通訳を経て聖市に戻る。第一次欧州大戦当時は聖市
に過し、パ線第一ガピローバ植民地通訳、麻州の鉄道工夫、
ソロカバナ線第一モンソン植民地で豆作りをやる。大蝗害
で失敗をする。一九二一年九月七日伯國独立記念日をトシ
てバウルー市で週刊紙聖州新報を発刊。一九三八年には日
刊紙となる。

其の間一九二八年四月ノロエステ日本人年鑑發行、一九
三〇年ノロエステ・ソロカバナ・パウリスタ三線年鑑、一
九三四年在伯二十五周年鑑、一九四九年に至って日本移民
四十年史を發行する。尚移民短歌集「移り来て」、葡和対訳
「ツピー単語集」を表す。

一九四一年七月外国語新聞発行禁止令により發刊に至る迄二十年間を新聞人として生きる。

一九五二年大病を患い失明す。聴覚不良であるが補聴器に依りこれをおぎない、現住所にて句作随筆等にふけり、悠々自適の生活をする。

家族　タニ夫人との冊に露子、夫陽、エイトール、秋子の二男二女

林　田　美　喜（旧姓井上）

明治27・6・25生

本籍地　飽託郡小島町字小島村

現住所　ソロ線サンタ・クルース・ド・リオ・パールド市
レプブリカ広場三七五番

渡伯年齢　十四才

配耕地　ヅモント

移動経路　ヅモント耕地を経てソロカバナ線サン・マノエル駅ソブラード耕地に移る。一時聖市に居住。後ソロ線モンソン植民地に転住、此の地で林田善太郎と結婚する。一九二四生サンタ・クルースに移り農業雑作に従事し其の間夫善太郎死亡。

一九五二年現住所にバールを購入現在に至る。
家族　一男五女あり、長男は結婚家業を継ぐ。

上田ミト

明治23・3・2生

本籍地 八代郡龍峯村大字奥善寺一六一七

現住所 中央線スザノ市北部本島正雄方

配耕地 ズモント

渡伯年齢 十八才

中川トミ (旧姓西村)

明治39・10・6生

中川コト (旧姓西村)

明治35・9・25生

本籍地 飽託郡城山村半田

現住所 パラナ州ロンドリーナ市ビラ・シマブクロ

渡伯年齢 トミニ才、コト六才

配耕地 ズモント

山口トモ (旧姓西村)

明治37・3・18生

本籍地 飽託郡城山村半田

現住所 聖市サン・ターナ区

永 田 呈 三

明治 25・1・5 生

本籍地 八代郡有佐村

現住所 パラナ州コルネリオ・プロコピオ市 郵函五二二

番 セントラル植民地

渡伯年齢 十六才

配耕地 ズモント

移動経路 配耕地に三カ月、出聖して二週間後、徒歩にてリオ市に至りミナス州の鉱山モリベリヨに約七カ月就働する。アマゾンのマナオスに三カ年、リオ市に移る。結婚後二カ年在留、後サンパウロ市に帰りブラジューを経て北パラナ現住所に入る。

家族 三男、二女

西 島 仁 作

明治 12・1・9 生

西 島 チ カ

明治 22・2・15 生

註Ⅱチカは鹿児島県人日高喜作の妻セキの身代り渡航

本籍地 飽託郡城山村大字半田一二二八番地

現住所 中央線モジ・ダス・クルーゼス

カツペーラ街道十キロ地点

渡伯年齢 二十九才、妻十九才

配耕地 ズモント、妻サン・マルチンニオ

移動経路 モジアナ線モンソン耕地を経てサンタ・クルー
ス・ド・リオ・パールド、アバレー等を転々、一九三九年
現住所に移り、果樹栽培に従事する。

家族 二男夫婦、二女（既婚）

稗 田 ユ キ（旧姓中田）

明治19・12・26生

本籍地 八代郡龍峰村大字岡中一一二番

現住所 ソロカバナ線アルバレス・マツシヤード駅管内

渡伯年齢 二十二才

配耕地 ズモント

移動経路 配耕地に於ての紛争事件のため二カ月にて退耕、
家長光永と共に各地を転々、その後、稗田浅吉氏と結婚ア。
マツシヤード管内に十五アルケールスの土地購入農事に従
事、爾来三十一年現在に至る

田 島 勘 五 郎

明治13・3・1生

中 島 モ セ

明治15・10・18生

本籍地 鹿本郡広見村大字芋生二五〇七番

現住所 ソロカバナ線プレシダンテ・ベルナルデス市 郵

函二〇〇番

渡伯年齢 二十八才、妻二十六才

配耕地 ズモント

職業 農業

森川 卯八郎

明治19・3・12生

本籍地 飽託郡内田村三八九四

現住所 パラナ州クリチーバ市 郵函六〇七番

橋口 敏信

明治36・8・2生

本籍地 天草郡深海村

現住所 パウリスト線ヴィラドーロ駅

渡伯年齢 五才

配耕地 ズモント

堀 田 徳 平

明治23・1・17生

本籍地 玉名郡横島村字大園

現住所 リオ・デ・ジヤネーロ州中央線イタグワイ駅 郵

函三〇番

渡伯年齢 十八才

配耕地 ズモント

移動経路 配耕地退出後、姉夫婦と別れてサンパウロ市に出る。鉄道工夫となり労働していたが、その後カンピーナス附近マンジョカ工場で働く。一方姉夫婦は徒歩にてリオ州に入り、メスキックの瓦工場に就働していたが、姉夫、濱田太作はマレッタにて死亡・臨月の軀をかゝえて苦しむ姉を助けるためメスキックに至る。一九一八年姉を帰国させ、その後も引続き四十四年間、同瓦工場に働く。一九五四年病弱のため退職、現住所にて野菜栽培に従事、現在に至る。

家族 夫婦に四男五女

井 手 ツ ギ

明治11・9・24生

本籍地 飽託郡城山村

現住所 ノロエステ線リンス駅管内

渡伯年齢 三十才

配耕地 ズモント

大村 千太郎

明治 5・8・1 生

大村 サガ

明治 10・4・1 生

本籍地 飽託郡城山村

現住所 ノロエステ線リンス管内

渡伯年齢 三十六才、妻二十一才

配耕地 ズモント

上田 豊吉

明治 14・12・10 生

本籍地 八代郡龍峰村

現住所 ノロエステ線カフエランジヤ管内

渡伯年齢 二十七才

配耕地 ズモント

光永 三利

明治 40・1・10 生

本籍地 八代郡龍峰村

現住所 ソロカバナ線プ・プルデンテ駅管内

渡伯年齢 一才五カ月

配耕地 ズモント

合 計 二十一名（内男 一〇名）

鹿児島県

大 森 豊 吉（旧姓小牧）

明治24・5・4生

本籍地 揖宿郡エイ娃村別府二九一二番地

現住所 サンパウロ市カーザ・ヴェルヂ区チエテ大通り二

六番地

渡伯年齢 十七才

配耕地 グワタパラ

移動経路 六カ月の義務農年終了後、単身リオ・デ・ジャネーロ市に移る。一九〇九年四月麻州ボルト・エオペランサにアルゼンチン經由にて入り、鉄道工夫となる。一九一二年亜國ブエノス・アイレスに二カ年居住、一九一四年再

度麻州に至り、一九二二年サンパウロ市に居を移し現在に至る。

現職業 鉄工場、木工場、ボール等経営

結婚 一九二二年広島県人大森鶴松の婿養子と成る。

家族 養父（85）妻キミノ（57）の三名

竹内 喜左衛門

明治20・5・15生

本籍地 川邊郡西南方村坊之津

現住所 カンポ・リンポ

渡伯年齢 二十一才

配耕地 サン・マルチンニオ

移動経路 配耕地の同盟罷業問題にて退散、麻州横断鉄道敷設工夫に従事、其の後アルゼンチンに渡り製材所に働く、次にウルグワイ國モンテビデオに渡り鉄道工夫をしていたが、革命の為伯國に帰り、サントスにて漁師又は荷揚人夫と成る。一九二六年結婚し聖市郊外にて農業経営、後カンポ・リンポに十数アルケールの土地購入し煉瓦工場経営に転じる。長男に家業を継がせ隠居生活に入る。

川床 栄吉

明治12・2・2生

川 床 ニ ダ

明治21・12・28生

本籍地 川邊郡加世田村津貫五二七番地

現住所 パウリスク線ジュンケーロポリス市バルボーザ街
九〇七番

渡伯年齢 二十九才、妻エダ二十才

配耕地 グワクパラ

移動経路 配耕地に三カ年、サントス市に三カ年、ノロエ
ステ線ビリグイ駅管内で農業四十一カ年、パウリスタ線
ジュンケーロポリス市に移り商業に転じて三カ年。

家族 長男夫婦及孫七名同居。

田 中 ツ タ（旧姓牧之段）

明治22・7・24生

本籍地 川邊郡加瀬田村

現住所 聖市郊外コチア郡モインニヨ・ベーリヨ 郵便二
七二二SP

渡伯年齢 十九才

配耕地 グワタパラ

移動経路 渡伯当時牧之段愛熊の妻として家族構成、グワ
タパラ耕地六カ月就働後家族構成解散、サンパウロ市に出

て家庭奉公八カ年、一九一三年サントスにて田中十一と結婚、後夫と共に麻州カンポ・グランデ市に移り九カ年在住、再度聖市に移る。一九四〇年夫死亡後コチア小学校附属寄宿舎炊事長として十六年間勤務、現在に至る。
家族一子

小村 喜之助

明治22・11・4生

本籍地 川邊郡西南方村

現住所 中央線スザノ駅カーザ・ブランカ耕地

渡伯年齢 十九才

配耕地 サン・マルチンニオ

永田 一

明治24・6・12生

永田 のき（旧姓西牟田）

明治19・11・15生

渡伯年齢 十七才、妻二十二才

配耕地 サン・マルチンニオ

移動経路 配耕地退出後、一九一〇年サントス港ドッカスに就働、同年十月サンタ・カクリーナ州ジュインビーレ市

に在任、ピントール職につく。

一九一一年リオ・グランデ州に至り各地転々、一九一五年同地方の鉄道工夫となる。

一九二五年聖州に帰り、アンタルチカに働く、一九三〇年当時モジアナ線モーロ・アズール耕地にて総監督となる後転々として一九三九年九月ジャカレー市に移り洗染業を始め現在に至る。

宮 田 勝 衛

明治24・1・5生

本籍地 川邊郡西南方村坊津

現住所 聖市マルチン・カラスコ十番

渡伯年齢 十七才

配耕地 サン・マラチン・ニオ

職業 ナシ、次男薫医学士と同居

家族 夫婦と子供九人、孫十五人

竹 内 ト メ

明治11・1・30生

本籍地 川邊郡西南方村坊の津

現住所 聖市カシンギー区マルビーナ街二番

渡伯年齢 三十才

配耕地 サン・マルチンニオ

家族 子供二人、孫十四人

八 木伊 勢 吉

明治14・2・11生

本籍地 木元那花岡村字古江

現住所 パラナ州マンガワリー市 郵函二三三

渡伯年齢 二十七才

配耕地 ナシ

移動経路 笠戸丸船員として渡伯し其の儘入国、聖市にて六力年間建築業を営む。一九一四年サントス市に移り十年間同業にて生活。一九二四年リンス駅管内に移つて農業に従事し、一九四七年次男忠男の家族と共にマンガワリー市に移り、飲食店業を営み現在に至る。

家族 三男一女、第三世十三人、第四世二人

牧 之 段 次 太 郎

明治27・1・31生

本籍地 川邊郡加世田村

現住所 聖市サン・ジョアキン街四七番

渡伯年齢 十四才
配耕地 グワタパラ

岩 元 秀 雄

明治24・2・1生

本籍地 揖宿郡指宿村字十二町大渡り四三〇五

現住所 リオ・デ・ジャネーロ市郊外ボンスセツソ・イジ

エノポリス区フランシスコ・メディレス街一二五番

渡伯年齢 十七才

配耕地 サン・マルチンニオ

移動経路 配耕地を単独にて退き、サントスにて家庭奉公。
後サンパウロ市にて自動車運転手、一九二七年中央線モジ
郊外にて農業に従事、一九三四年リオ・デ・ジャネーロ市
に出て、中央市場に就職、現在に至る。

家族 夫婦に一男。

有 村 栄

明治26・1・27生

本籍地 川邊郡加世田村武田三〇二

現住所 麻州アキダウアーナ市

渡伯年齢 十五才

配耕地　グワタパラ

移動経路　配耕地を経てサントスのジャバクワラにて石穴の石割工事に少期間働く、次に亜國の其英人経営の砂糖工場職工募集に應募し同工場大工部に数年働く、その後亜國州内を流転の末、麻州の鉄道工夫を志願、ラプラタ河をのぼりポルト・エスペランサに上陸、鉄道局大工部に働く、その労働により得た資金にてアキダウアーナ市より十八軒の地転カンピーナス農場を買入れピング製造を企業し現在に至る。

家族　子女共九名

池　上　美　禰

明治5・3・3生

本籍地　川邊郡東南方村

現住所　望市ヴィラ・ソーニヤ区マンジスノンガ街二八番

渡的年齡　三十六才

移動経路　契約移民であるが夫二次郎と共にサンパウロに残留、藤商会店員、宿舍サンパウロ街一五番で炊事係となる。老後日本に長く渡っていたが、一九三九年五月に再渡伯

草 野 チ ヨ ゲ サ

明治 22・7・30 生

本籍地 川邊郡西村樺泊

現住所 パウリスタ線バストス移住地グロリア

渡伯年齢 十九才

配耕地 サン・マルチンニヨ

移動経路 配耕地に十年間在住、プロミツソンに地主として十五年間、バストス移住地に十域の土地を求めて入植して二十五年間、現在は野菜栽培農である。

家族 三男五女、孫三十三人

園 田 猶 衛（旧姓永江）

明治 23・4・5 生

本籍地 川邊郡東南方村

現住所 聖市郊外グワル―リヨス市在住

渡伯年齢 十八才

配耕地 サン・マルチンニオ

隈 元 維 高

明治 16・5・8 生

隈 元 モ イ

明治15・8・18生

本籍地 肝属郡牛根村境一四〇五番

現住所 聖市郊外ブラガンサ・パウリスタ街道十八キロ地

点カツシヨエーラ植民地

渡伯年齢 二十五才、妻二十六才

配耕地 サン・マルチンニオ

家族 三男一女、孫十五人

湯 ノ 口 畛 市

明治22・8・1生

本籍地 指宿市玉利

現住所 サントス市セナドル・フエジヨ街八〇〇

渡伯年齢 十九才

配耕地 サン・マルチンニオ

湯 ノ 口 八 郎

明治26・2・12生

本籍地 指宿市玉利

現住所 サン・ビセンテ市パルケ・デ・サン・ビセンテ街

二〇〇

渡伯年齢 十五才

配耕地 サン・マルチンニオ

池 上 恒 則

明治20・6・8生

本籍地 枕崎市一二五八

現住所 聖市ジャサナン区フランシスコ・ロドリゲス街

渡伯年齢 十六才

配耕地 サン・マルチンニオ

本 多 誠 二

明治15・3・12生

本 多 ツ ヨ

明治17・11・11生

本籍地 枕崎市一二五八

現住所 聖市ジャサナン区ジョゼー・グリーンノ一番

渡伯年齢 二十六才、妻二十四才

配耕地 サン・マルチンニオ

清 水 キ セ (旧姓森)

明治20・11・24生

本籍地 川辺郡枕崎町小字小港

現住所 ルア・B・七番・ヴィラ・ソニヤ区

渡伯年齢 二十一才

配耕地 サン・マルチンニオ

移動経路 配耕地に三年在住、その後サンパウロ市に出て家庭奉公、女工等に就働する。後清水安治郎と結婚し森姓を失う。一九二一年一時帰国、一九二九年再渡伯しパ州クリチーバに移住、一九四〇年現住所に至る。

茶 屋 エ ダ

明治17・1・9生

本籍地 川辺郡東南方村枕崎三七七番

現住所 聖市郊外ピリツィバ市ルア・3一二五番

渡伯年齢 二十四才

配耕地 サン・マルチンニオ

家族一男二女

茶 屋 政 雄

明治26・9・12生

本籍地 川邊郡東南方村

現住所 聖市郊外サント・アマーロ市ビスコンデ・タウネ

イ街七一九

渡伯年齢 十五才

配耕地 サン・マルチンニオ

竹内 吉次郎

明治 23・6・9 生

本籍地 川邊郡西南方村大字坊

現住所 ソロカバナ線プ・プルデンテ駅管内

渡伯年齢 十八才

配耕地 サン・マルチンニオ

安達 熊太郎

明治 15・1・3 生

本籍地 川邊郡西南方村泊八九三九

現住所 サントス・ジュンヂアイ線ヴァルジャ

渡伯年齢 二十六才

配耕地 サン・マルチンニオ

移動経路 配耕地に義務農年を了り、一九〇九年より一〇年迄サントスのドツカス人夫となる。その後アルゼンチンに渡り首都ブエノス・アイレスにて製材所の火夫を四年、後麻州のトレス・ラゴア町にて野菜栽培に一九三二年ま

で従事する。同年一時帰国し、一九三三年助監督として再渡伯、現地に野菜作りとなって現在に至る。

松 山 彌 吉

明治23・2・12生

本籍地 指敷郡今泉村利永一八一番

現住所 リオ州中央線エリオポリス駅エルネスト・デ・ソーザ街二四

渡伯年齢 十八才

配耕地 グワタパラ

移動経路 グワタパラに六カ月就働、単身リオ市に至り竹細工商人杉原氏職場に働く、一九一二年独立し一九二一年まで専業する。

その後、西谷商会に入店、一九二九年に蜂谷商会に移り、ボタン製造所に働き一九五六年まで勤続する。退職と共に現住所に移り、ボタン工場開始の準備中。

家族 夫婦に一男

西 吉 太 郎

明治20・9・15生

本籍地 川邊郡西加世田村片浦七四三番

現住所 聖市ビラ・アルピーナ区ルア・J・十七番
渡伯年齢 二十一才
配耕地 グワタパラ

上村 泰造

明治24・10・25生

本籍地 川邊郡西南方村

現住所 日本に帰国中なるも近く帰伯。

渡伯年齢 十七才

配耕地 サン・マルチンニオ

伊瀬 知麟逸

明治23・6・13生

伊瀬 知の妻

註Ⅱ妻も笠戸丸渡航と通知あるも何人か不明

本籍地 川邊郡西南方村

現住所 麻州アキタウアーナ市管内

渡伯年齢 十八才

配耕地 サン・マルチンニオ

丸 野 政 義

明治17・2・1生

丸 野 ナ ツ（右妻）

註Ⅱ家長石井愛之助の妻アキの身代りとして伊漱知ナツ

渡航し後丸野と結婚

本籍地 揖宿郡指定村

現住所 聖市ペンニヤ区

配耕地 サン・マルチンニオ

合 計 三十六名（内男、二四名）

広 島 県

間 崎 三 三 一

明治20・5・7生

本籍地 広島県人として渡伯するも高知県幡多郡八束村間

崎出身

現住所 ノロエステ線プロミツソン市 郵函十六

渡伯年齢 二十一才

配耕地 ズモント

移動経路 ズモント耕地は全退耕家族に従い八月廿五日出

聖、ピントールとなりサンパウロ街二〇番に居住する。一九一二年竹村殖民商館の移民到着と共に通訳として耕地に入る。後ドラデンセ線サンタ・コンスタンテ耕地の総支配人となる。一九一八年土塚周平氏プロミツソンに植民地建設するや氏のもとに入る。爾来同地にて農業経営の傍ら三菱系東山商事代理人、珈琲、棉花農産物の仲買人として現在に至る。

珈琲園七十五域（八万五千本）牧場百八十五域（牛六百頭）を所有。

臼 井 介 仁

明治 22・9・17 生

臼 井 ま さ よ

明治 23・3・5 生

本籍地 安芸郡昭和村

現住所 パラナ州バンダイランチス駅管内

渡伯年齢 十九才、妻十八才

配耕地 ズモント

移動経路 配新地退耕後ソロカバナ鉄道、車掌其の他に就働、第二回日本移民到着後は耕地監督として転々、一九三二年トレス・バラス移住地支配人として働く。戦後当バンデイレンテス市に居任し隠居生活に入る。長男はアグア・

デ・ピーザに四十域の功排園を所有している。

池 町 彌 一

明治19・5・1生

池 町 ア サ ノ

明治22・5・25年

本籍地 山県郡都谷村

現住所 聖市サルダニヤ・マリニンヤ街二〇七

渡的年齡 二十三才、妻十九才

配耕地 ズモント

家族 二男一女、孫二人

山 田 フ リ エ

明治22・9・1生

本籍地 出県郡都谷村

現住所 聖市オリサンガ街一六二番

渡伯年齡 十九才

配耕地 ズモント

移動経路 配耕地は二カ月にて退耕、ノロエステ線バウル―管内の耕地に再配耕され、その地で二年間就働する。その後サンパウロ市に出て夫勘一氏はピントールと成り、

フリエさんは家事にあつたが一九五三年一月夫死亡後長男
マリオ夫妻の家庭にて楽隠居、今日に至る。

家放 三男三女

来 原 又 喜

明治12・10・15生

来 原 コ ナ ミ

明治23・2・1生

本籍地 山県郡戸河内町字川平

現住所 聖市ビラ・プルデンテ区ピース・ピメンテール

街二〇一番

渡伯年齢 二十七才、妻十八才

配耕地 ズモン ト

移動経路 二カ月にて配耕地退出、ソロカバナ鉄道布設工
夫を経て同鉄道大工部に勤める。後独立して食器用装飾箱
製造業に転じ現在に至る。

西 村 ワ イ

明治24・10・3生

本籍地 安佐郡安村大字高取六九番

現住所 聖市ビラ・カロン区ペードロ・ボス街一四番

渡伯年齢 十七才

配耕地 ズモント

移動経路 ズモント耕地二カ月にて退耕後ソロカバ市に移り、四十数年以前サンパウロ市に移って現在に至る。

児 玉 良 一

明治 28・7・10 生

本籍地 出県郡都谷村

現住所 ソロカバナ線プ・プルデンテ駅管内

渡伯年齢 十三才

配耕地 ズモント

合 計 十名（内男・五名）

高 知 県

鍋 島 喜 代 重

明治 22・11・7 生

本籍地 長岡都十市村四七二〇番

現住所 パラナ州ウライ駅 郵函九一番

渡伯年令 十九才

配耕地 グワタパラ

移動経路 一九一〇年一月アルゼンチンに渡り一九一三年まで在住、後麻州を経て第二モンソン植民地に入る。一九一八年プロミツソン耕地に有り、一九二四年一時帰国する。一九二六年再渡伯パラナ州バンデイランテスに九年珈琲コロノ生活を経て現住地に入り、現在に至る。

家族 夫婦と四男三女、孫一名。

片岡 治 義

明治12・1・10生

本籍地 高岡郡高岡村

現住所 パラ州カスクニヤール市管内

渡伯年齢 二十九才

移動経路 水野龍氏が計画中のリオ州マカニ都の皇國殖民予定地の測量及地区割の仕事に従事するために自由移民として渡伯する。着伯後七月三日水野氏に引率されリオ市開催中の内國博覧会場におもむき、玉屋花火関係者と起居して炊事係をつとめる。同年十一月博覧会終了後、皇國殖民予定地に入り先着の隈部三郎氏一行と合流する。孤立無援、飢餓におびえる生活に退耕するモジアナ線ビラ・コステラ耕地に転じて珈琲苗の仕立に従事し、一九一七年パラナ

パネマ河沿の原始林で境界線設定の仕事につく、その後、西原清東農園支配人、中央線ピнда管内で米作を経て一九二九年北伯ベレンの南米拓殖会社に米作指導者として招聘されカスタニヤールに入植。一九三四年同農場閉鎖の機会に独立し、ピメンタ・ドレーノを主作とする雑作農に移り現在に至る。

家族 四男二女

合 計 二名（男）

福 島 県

安 田 俊 平

明治22・11・8生

本籍地 安達郡本宮町字南町裡八十三番地

現住所 ノロエステ組アラサツーバ管内アグア・リンパ植

民地

渡伯年齢 十九才 既婚

配耕地 ズモント

移動経路　ヅモント二カ月にて退耕後ソロカバナ線トレゼ・デ・マイオ駅ソブラード耕地にコロノとして入植し、後同耕地日本人通訳三年、麻州に移つてトレス・ラゴア及びカンポ・グランデを移転しつゝ、鉄道保線工夫として働く、後工夫監督と成つて前後十七年勤務、次にアラサツバ駅管内アグア・リンパ植民地に入植、爾来三十年農事に従事今日に至る。

カフエー・ザール五アルケール所有
家族　三男六女

楠　作　右　エ　門

明治17・8・23生

本籍地　伊達郡茂庭村字中茂庭

現住所　聖市ガレーノ・デ・アルメーダ六四番

渡伯年齢　二十四才

配耕地　ヅモント

移動経路　配耕地を十二、三日にて脱出車掌が来ると便所にひそみつゝ無機汽車族行にて出聖する。ソロカバナ鉄道架設工事二、三カ月従事、後サンパウロ市に帰る。

小期間食堂皿洗いとなり、後ボア・ヴィスタ街ファルマシヤ・モルチンニオに薬剤士見習いとして雇われる。爾来四十五年薬局監督として働き、一九五五年退職し、蘭の栽

培を趣味として自適生活に入る。

家族 夫婦二名。

本 田 キ ク

明治17・7・18生

本籍地 安達郡土佐和村字上ノ倉

現住所 マット・グロツソ州カンポ・グランデ市シノール

大通り八六番

渡伯年齢 二十四才

配耕地 ズモン ト

移動経路 ズモン ト退耕後、サン・マノエル耕地にて三年契約に入る。一九一一年アルゼンチンに渡る。一九一三年正月二十八日麻州鉄道工夫に應募する 夫に従いボルト・エスペランサに入る 炊事婦として働く。次いでアキドウアーナに五年。ニキワに移り、シヤーカラ生活十五年。一九一五年夫本田丈右 エ門と離別、一九一七年武川徳三と再婚、一九三五年未亡人となる。

家族 本田との間に二男一女、武田との間に一男

畠 セ キ

明治18・8・11生

神田ハツ（旧姓畠）

明治40・1・28生

本籍地 伊達郡湯野村字北穴原十一番

現住所 ノロエステ線プロミソン駅管内

渡的年齢 畠セキ二十三才、神田ハツ一才五カ月

配耕地 ズモント

三浦今朝治

明治15・4・18生

本籍地 安達郡二木松町鈴石字井戸ノ上

現住所 ソロカバナ線プレシデンテ・ベルナルデス駅 郵

函八四

渡伯年齢 二十六才

配耕地 ズモント

移動経路 配耕地は約二カ月にて退耕、後ソロ線ソブラー

ド耕地に入り、十二年間農事に従う。その後ソロ線サント・

アナスタシオ管内に上地購入し地上となる。七年後同地を

売却し同駅の梅弁植民地を購入、珈琲、棉、その他雑作農

を営む。一九五二年同地売却、アルバレス・マツシャード

駅第五支部に入り現在に至る。

本田 サノ

明治 22・1・9 生

本籍地 伊達郡茂庭村中茂庭五一番

現住所 聖市ジャサナン区ビラ・コンスタンテ街三六五番

渡伯年齢 十九才

配耕地 ズキン ト

渡邊 七之助

明治 19・1・1 生

本籍地 安達郡石井村

現住所 聖市近郊グワル―リヨス市

渡伯年齢 二十二才

配耕地 ズモン ト

職業 養鶏業

渡邊 又吉

明治 23・4・12 生

渡邊 トミ

明治20・3・27生

本籍地 安達郡新殿村

現住所 聖市フアグンデ・マリアーノ街三八一

渡伯年齢 十八才、妻二十一才

配耕地 ズモント

只 野 儀 助

明治21・8・1生

本籍地 双葉郡幾世橋村

現住所 中央線スザノ市アバシヨ

渡伯年齢 二十才

配新地 ズキント

只 野 ウ メ ノ

明治16・11・20生

本籍地 双葉郡幾世橋村

現住所 レジストロ管内ジプブラ（桂植民地）

渡伯年齢 二十四才

配耕地 ズモント

家族 三男三女

註Ⅱウメノさんは山本キイの身代り渡航

小 野 寺 ト ラ（旧姓安斎）

明治 2 3 ・ 3 ・ 1 生

本籍地 安達郡玉井村字南町

現住所 モジアナ線イガラパーバ駅管内

渡伯年齢 十八才

配耕地 ズモント

註Ⅱ 安斎彌惣右エ門の妻として渡伯、未亡人となって小野寺氏と結婚す

合 計 十三名（内男、六名）

宮 城 県

遠 藤 豊 之 助

明治 1 7 ・ 9 ・ 2 4 生

本籍地 伊具郡大平村瀧ノ内

現住所 パラナ州マリアルバ管内フロレスタ耕地主

渡伯年齢 二十四才

配耕地 ズモント

君 塚 ゆ き (旧姓遠藤)

明治28・11・14生

本籍地 伊具郡大平村瀧ノ内

現住所 聖市イピランガ

渡伯年齢 十三才

配耕地 ズモント

註 遠藤豊之助妹

合 計 二名 (内男一名)

兵 庫 県

鞍 谷 イ ノ

明治20・5・2生

本籍地 明石郡平野村ノ内中津村

現住所 ノロエステ練ラビニア駅管内ミモザ植民地

移動経路 自由移民にて配耕を受けず、聖市に残留してモツカ区プレッセル附近で野菜作りを夫半三郎氏と行う。

飯 田 又 一

本籍地 明石郡平野村内中津村

現住所 パウリスタ線ピラシカーバ管内

渡伯年齢 不明

註Ⅱ自由移民として鞍谷半三郎家族に構成し渡伯、聖市に残留する。

合 計 二名（内男一名）

東 京 府

茨 木 友 次 郎

明治19・12・8生

本籍地 東京都墨田区吾妻橋二丁目十九番地

現住所 ノロエステ線リンス市 郵函二九三

渡伯年齢 二十二才

配耕地 ズモント

移動経路 配耕地を経てバウルー管内ピラチニング・ビヤード耕地に二年。ソロカバナ線イタチンガに二カ年。後出聖し独逸人経営の製紙会社を経てモジアナ線フランシス

コ・シミット耕地に入り、其の後コンキスタ、ジユサーラ
耕地通訳。イグアペ植民地に四年を経てノロ線ゴヤンベ
植民地に入る。

其の後リンス駅管内を転々と移り、現住所リンス市サン
タ・マリア町十五番大宣寺を建立現在に至る。

職業 僧侶

合計一名

山口県

久保庄右工門

明治19・3・21生

本籍地 熊毛郡上ノ開村字四代部

現住所 コチア産組ジャカレイ倉庫

渡伯年齢 二十二才

配耕地 ソブラード

家族 一男一女に夫婦四名。

石村 清太郎

明治19・12・18生

本籍地 都濃郡鹿野村大字狐原三六七

現住所 サンパウロ市ゴンサルベス・レード街一八九番

渡伯年齢 二十二才

配耕地 ソブラード

移動経路 耕地を出て四十九年聖市に居住、洗濯業を営む。

現在 隠居

林 岩 松

明沼29・9・29生

本籍地 大島郡沖家室付

現住所 聖市ミゲール・デ・イササ街五四一

渡伯年齢 十一才

配耕地 ソブラード

家族 夫婦に子供四人、孫七人

職業 商人

松 田 宇 一

明治21・1・20生

本籍地 熊毛郡周防村立野九八三番

現住所 リオ州中央線ニロポリス市ナチビダーデ街七二八

番

渡伯年齢 二十才

移動経路 水野氏宅の書生をして居た関係で三原万次郎について、リオ市開催の内國博覧会場花火製培販売場に助手として働く。一九一二年ライト瓦斯会社試験所に技師補佐として入社、一九一八年同部主任となる。大東亜戦争により一九四二年退職のやむなきに至る

職集 無職であるが貸家十一軒の収入にて生活。

家族 三男二女

合 計 四名（全部男）

愛媛県

中村 たかの

明治26・1・15生

本籍地 伊予郡上灘村双見町

現住所 サントス・ジュンジアイ線サン・カエターノ市
ズルバル・ビラルバ街一四一

波伯年齢 十五才

配耕地 ソブラード

移動経路 配耕地にて二カ年就働、モジアナ線カニンデ駅管内にて棉作、米作に従事、其の間鹿児島県人中村四郎（笠戸丸）と結婚する。爾来夫と共に各地に転々し、未亡人となつて今日に至る。

橋本 重左エ門

明治12・5・24生

本籍地 伊予郡上灘村大字小網村

現住所 サントス市アベニード・レイ・アルベルト街二七五

渡伯年齢 二十九才

配耕地 ソブラード

池田 栄太郎

明治12・8・10生

池田 ミヤノ

明治22・1・9生

本籍地 伊予郡上灘村大字土灘甲六四〇九番

現住所 パラナ州トレスバラス移住地セードロ区

渡伯年齢 二十八才、妻十八才

配耕地 ソブラード

移動経路 配耕地退出後聖市にあり一九一九年まで大工生活をつづける。のちミナス州ジュンケーラ耕地で農業、同耕地退出後、ビラボンフィン駅管内サンタ・クルース耕地、ジヨゼー・デ・カンポ耕地、サンタ・ルジア耕地等に十三年間を過す。その後ドラデンセ線イビチング駅コツケーラ耕地に一カ年、カベツサ・デ・ネグロ耕地に三カ年棉作に従事し、一九四〇年現住所に移る。

家族 八男七女、孫八名

宮 田 稔

明治25・8・7生

本籍地 喜多郡天神村大字平岡

現住所 リオ州中央線イタグワイ駅 郵函三五

職業 農業

渡伯年齢 十六才

配新地 ソブラード

移動経路 耕地の重労働に耐えかね、同志一少年と謀り夜逃げを決行、所持金は一文無しと云う有様。汽車内で車掌が来てベラベラしゃべるが「知らぬ半兵衛」をきめこみ、無貨乗車にてサンパウロ市に着く。ルス駅頭で呆然として

いる兩人を馬車引きがサンパウロ街十五番の日本人家屋に運んだ。こゝで飲まず喰わずの空腹を満たされ、馬車賃まで払って貰った。

註Ⅱ池上二次郎氏宅。夫人美彌女は八十六才にて聖市に健在。

その後、藤崎商会の世話で某陸軍大佐家のコッペーロとして働く。その時三宅栄次郎の勧めで。バラナ州フアシナ在のフランス人ホテルに働く。後米作景氣に刺戟されビラ・イグアスに入植したが物凄いまレックに驚き十九日で逃げる。一九一〇年旅順丸逃亡移民と共にラージ造船所にカンカン（サビ取り）として働く。一九一二年東洋殖民会社の神奈川丸入港するや、佐藤次郎、神又、古川等と共に招かれて通訳となる。一九二〇年当時ミナス州ウベラーバ附近で米作、一九二二年リオ州に移る。一九二四年再度サンパウロ州へ、一九二七年リオ州に移り西谷商会のボタニ工場を経て、独立経営となる。

一九四一年太平洋戦勃發後、ボタン工場は民衆に襲撃され破壊される。生命に危険を感じ現農地三十二アルケールを購入、果樹其の他雑作に従事しつゝ現在に至る。

家族 二男二女

明治13・12・3生

本籍地 喜多郡内子町

現住所 サンパウロ市

渡伯年齢 二十八才

配耕地 ソブラード

合計 六名（内男、三名）

新潟県

菅 原定 三郎

明治20・3・18生

本籍地 北浦郡乙村高野

現住所 パラナ州ジャタイー駅アサイ町 郵便六八番

職業 農業、珈琲園二十アルケール所有

渡伯年齢 二十一才

配耕地 グワタパラ

移動経路 グワタパラ在耕七力年、一九一三年呼寄せにて
現夫人カメ女と結婚。一九一五年サン・ジョゼー耕地にて
カフェー四年契約、一九一九年棉作に転ず。一九二三年ア

ララクワラ線ケブラ・デンテ植民地に転じ珈琲ホルマ。一九二七年アアチーガ耕地で棉作に従事。一九四三年現住所に入る。

菅 原 雄 次

明治17・6・7生

本籍地 北蒲原郡乙村大字高野一〇七番地

現住所 アラクワラ線フェルナンドポリス市

渡伯年齢 二十四才

配耕地 グワタパラ

移動経路 配耕地にて五カ年、後カタンヅーバ附近サン・フランシスコ耕地に三年就働し土地を購入、地主となる。一九二八年サントス丸にて帰国、一九二九年八月マニラ丸にて再渡伯カタンヅーバ附近にて珈琲四年契約に入る。後棉作に入りオンダ・ベルデ、タナビーメリジアーノ地方を経て現住所に至る。

福 原 庄 五 郎

明治23・1・8生

本籍地 長岡市

現住所 リオ市アンドラーデ街九六番十六階

渡伯年齢 十八才 笠戸丸上級船員付ボーイとして来航したが、日本公使館の要請に應じ、リオ市にて下船する。その後・蜂谷商会に入り勤続現在に至る。

合 計 三名（全部男）

総合計 百五十七名
（内訳男一〇四名、女五三名）

皇國殖民会社の解散

第二回移民船旅順丸出帆

水野龍氏の皇國殖民会社の第二回移民送出しは実現を見なかった。第一回移民送出しによって受けた同社の損害は甚大であつて第二回移民の募集、輸送の実現につとめたが、外務省はこれを認可せず、一九〇九年度輸送は挫折してしまつた。

同社は再起不能となり破産状態になつたので、水野龍氏はサンパウロ州政府との移民契約に関する義務と権利およびブラジル・コーヒー宣伝契約も含めて高知県出身の竹村与右衛門氏に譲りわたし、新たに竹村植民商館を設立して水野龍氏が実際の事務をとることになった。その結果、第二回移民船旅順丸は二百四十七家族九〇九人の移民を乗せて一九一〇年五月四日神戸を出帆した。

第二回移民の来るまでの約三年間は、移民会社の出張員上塚周平氏をはじめその他の関係者は給与はおろか事務所の経費さえ払えぬ窮状にあつた。日本からの送金が枉絶していたので、上塚周平氏はその傘下集る青年たちや逃亡移民を集めて玩具手工や行商をやり各自の生活を維持してゐた。

この玩具は古トタン製の羽根トンボ、紙風船、色紙細工



竹村與右衛門氏

の開き扇などで、香山六郎、有川新吉、仁平高、加藤順之助、松永二三さんらの家族がいた。貧乏生活の境地にあつた上塚周平氏は旅順丸の出帆とともに竹村植民商館サンパウロ出張所員に返り咲きようやく陽の目を見ることができるようになった。

あとがき

◇：『笠戸丸』——この名はわれわれブラジルに住んでいる邦人はもちろん、日本においても移民に関心をもつ人たちにとっては忘れられぬ名であると思う。

しかし笠戸丸第一回移民については断片的に知られていても、それがどういう経路で渡伯し、これら先駆移民が、どんな道をたどったかとなると案外知られていない。

また当然知っていなければならぬことで、全然知られなかったり、忘れてしまっていることが多い。

◇：移り来て五十年——笠戸丸移民はたいていの人の頭の中で歴史の過去帳に入れられてしまっている。また戦後来伯した人々にとっては、すでにそれは“歴史”そのものである。しかし、この“歴史”は現在に直接つながるものである。それを知らなくては今日のコロニアの繁栄を語ることは出来ない。

◇：この意味で、移民五十年祭を記念し、移民五十年祭委員会が、この『笠戸丸』を出版することになったことはまことに有意義なことである。

五十年祭委員会会長の山本喜譽司氏から、その編集を依頼されたが、いざ出来上ってみるといろいろと不満の点多

いと思う。その点は御諒承していただきたい。最後に資料調査に当つていろいろと協力してくれた北上藤太郎氏に一言お禮を述べておきたい。

(内 山 静 男)

發行所 日本移民五十年祭委員会

編集人 内 山 勝 男

印刷所 サ ン パ ウ ロ 新聞社

